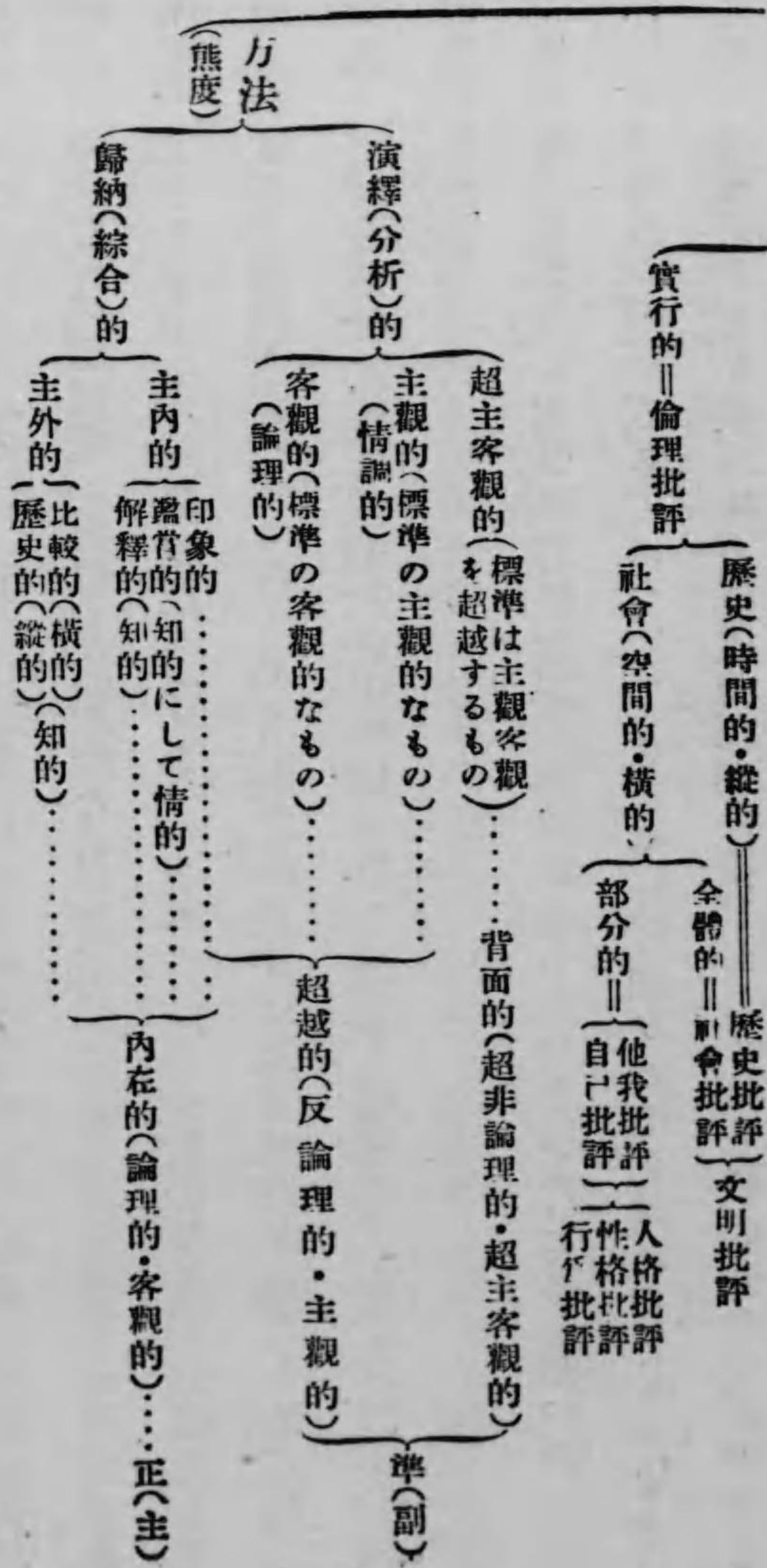
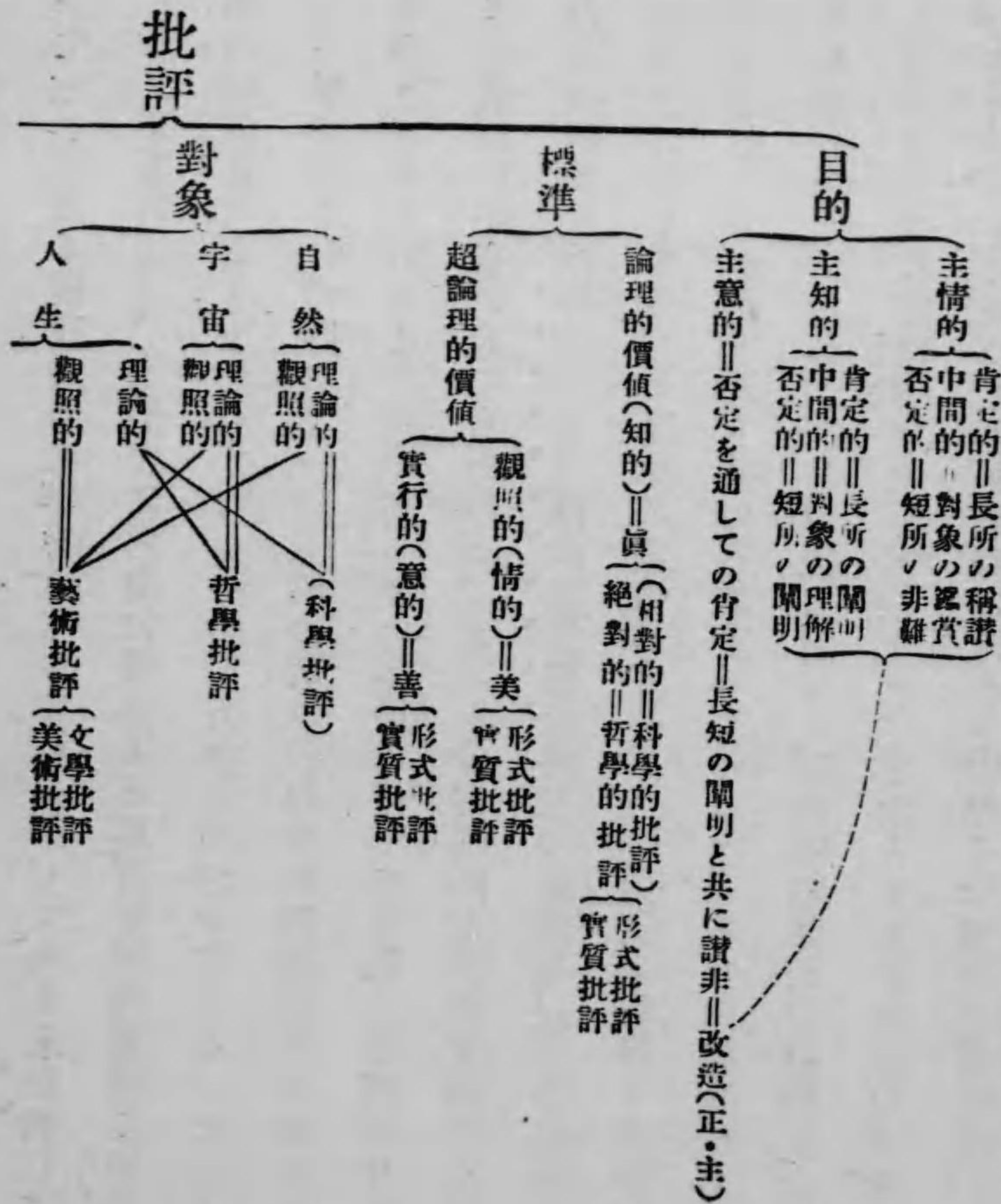


値に對する批評と廣く(三)實在全體の價值に關する批評とに別つことが出来るが、一口に人生乃至人文といつてもこれを縦に時間的に見れば歴史となり、これを横に空間的に見れば社會となり、同じ社會にしても全體として見た社會を主とするのと其の成因たる個人を主とするのとで異り、随つて人生批評に(イ)歴史批評と(ロ)社會批評とこの兩者を合併した(ハ)文明批評との別を生じ、自然を對象としながら(イ)科學批評と(ロ)藝術批評と(ハ)哲學批評との別を生じ、人生を對象としながら(イ)哲學批評(認識批評)と(ロ)倫理批評と(ハ)藝術批評との別を生じ、藝術批評は又(ア)文學批評と(イ)美術批評との別を生じ、倫理批評は(ア)個人批評(自己批評)と他の自己批評)と(イ)社會批評との別を生じ、更に前者は(イ)行爲批評と(ロ)性格批評とは(イ)人格批評との別を生ずるに至るのである。而して何れも夫々特殊の範圍と職能とを有すると共に、更にそれ／＼細かな種類を包含して居るものである。

(四)方法(及び態度)よりの分類。凡そ研究の方法に演繹と歸納、若しくは分析と綜合との二大別があることは改めていふまでもない。随つて批評の方法態度に於ても、

(一)主として或る確乎たる標準を立て、これに照して對象を分析しながら其の價值を明らかにする方法と、(二)倒まに對象に關係する事實を整理蒐集し綜合することによつて其の價值を内面より明らかにして行く方法との別を生ずるのである。尙この區別を更に一層詳しく分つ時は、(一)いふ所の價值の標準を對象以外に置いてそれから演繹的に批評を下すといふことの中にも(イ)いふ所の標準が自己の主觀の中にある、そして只主觀的價值しかないものもあれば、又(ロ)十分客觀的妥當性を持つて居るものもあるから自ら主觀的な演繹批評と客觀的な演繹批評との區別を生ずるに至るのである。次に(二)歸納批評にしても、(イ)歸納の根據を定める上に對象を構成する素材中内面的本質的ものを主とするか、即ち其の對象そのもの、内容特質を精査するか、(ロ)外來的副貳的ものを主とするか、即ち對象に對する時間的空間的影響(たとへば周圍とか時代とか一言にすれば環境を主とすること)を主とするかに依つて主內的歸納批評と主外的歸納批評とに別つことが出来るばかりでなく、更に(イ)前者は、(a)批評者の對象から受けた直覺的な感じ心持をそのままに合理化しないで表白する印象批評と、(b)公平な

□批評の分類表



態度で對象の長所美點を識別し鑑別する鑑賞批評と、(c)對象の具有する意味と價值とを解釋し表明する解釋批評との別があるし、(b)後者には、(d)對象の所有する特質を他のものと比較して果してそれが其のもの独自の本質的特質であるか、或は果して客觀的に價值ある特質であるか、更に其の独自の本質的價值は如何なる部類に屬するかを

明かにする比較批評と、(ハ)其の對象を生じた歴史國民性時代社會の狀態などを明かにすることに依つて其の對象の特色乃至價値の由つて來る所を明らかにする歴史批評とに別つことが出来る。尙單に狭い意味で方法といふだけではなくて、批評者の態度をも併せ兼ねた意味での方法といふ點から區別すると、批評は(一)超越的(反論理的)(二)背面的(超論理的)(三)内在的(論理的)の三つとすることが出来る。而して超越的批評は大抵主觀的演繹批評(但し價値判斷の過程を論理的ならしめることも、又それを論理的客觀的に表明することもせず)、只結論即ち判斷だけを示すのが一般の演繹批評に比して反論理的といはるゝ所以)と同じものであり、内在的批評は鑑賞的歸納批評を論理化したものであり、背面的批評は演繹的批評中特に非難を主とした變體である。(以上、前掲批評の分類表參照)

〔二〕 以上略述せし所に依つて、略批評の種類が明らかになつたと思ふが、尙以上の略説以外特に必要と認めるものについて、更に幾分詳細な説明を試みることにする。但し、これら各種の批評を貫通する根本的區別たる、そして最も代表的なものである

哲學批評、倫理批評、藝術批評に關しては、各中編に於て改めて詳述するから茲には別に述べない。

甲 歴史批評・社會批評・自己批評・文明批評

(一) 歴史批評。或る事件或る時代或る社會を歴史の一段と見て其の意味と價値とを明らかにしようとするものは歴史批評である。而して、これは完畢するに或る事件(時代社會)を時間的に連續する全體の一部として見ようとするものである。随つて其の批評の方法は、いふまでもなく因果法であるが、而かも歴史的因果律は機械的因果律と異つて、同量的でなく、因と果との間には發展進化の餘地があるものであるから、其處に批評の面白味がある。併しながら結局は發生的であり回顧的である。この意味に於てこの批評法は事件の起源乃至歴史的價値を明らかにすることが出来るが、必ずしも其の本質を明らかにすることが出来るとはいへない。蓋し事象の本質はその時間的意義と空間的意義とを明らかにしてのみ理解されるものだからである。随つてこの批評による價値の改造は、時代錯誤に陥ることはないが空間錯誤に陥つて切實を缺くのが

通弊である。

(二) 社會批評。人生の事象を横的に見ようとする批評法であつて、或る社會の所有する價值標準に照して其の一部分としての出來事なり状態なりの意味と價值とを批判しようとするものである。随つてこの批評法による時には、事件乃至事象が或る限られた時代の社會に於て如何なる意味と價值とを有するかを明らかにすることが出来るけれども、それが歴史的に見て如何なる意味と價值とを有するかを明らかにすることが出来ない。随つてまたこの批評による價值の改造は、歴史的批評と反對に空間錯誤に陥ることはないが、時代錯誤に陥るのが通弊である。即ち社會一部の缺陷を指摘し、その直接の原因を見出して應病與藥的匡救法を施すことが出来るけれども、その根源を索ねることによつて根本的匡救法を施すことが出来ない。尙社會といつても全世界と國家と其の他の社會とによつてそれ／＼趣を異にするものであるが、畢竟するに全體を標準として部分の價值を批評するといふ點に於いては何れも同一である。

(三) 自己批評。批評を一面から見れば、批評の心理的根據は批評者が自己の懷抱する

價值觀即ち要求の客觀的妥當性を事實によつて檢證しようとすることに存するのである。換言すれば批評者の懷抱する主觀的の理想若しくは思想を事實化し、個的特殊的價值を社會化し一般化すると共に、倒まに、對象内の個的特殊的思想を批評者の客觀的妥當性ある標準に照して事實化することを通して對象内の思想をも批評者の所有する思想をも超越した一層客觀的な一層生命のある思想を生み出さうとする要求の上に存するのである。而してこの點から見ると、批評には積極的方面と消極的方面とがあることは極めて明白なことである。即ち、これを積極的に見れば、批評は、社會的事象を通して批評者の主觀的思想乃至價值意識を事實化し社會化することであつて、主觀の社會的妥當性を要求する廣義の社會批評であり、これを消極的に見れば、批評は、批評者の主觀が客觀的事象に交渉することを通してそれを思想化し論理化することであつて、社會の主觀的乃至心理的妥當性を要求する廣義の自己批評である。而して後者が本源的のものであることはいふ迄もない。

思ふに自己批評は、反省若しくは自覺といふ形に於て現はれるものである。而して

一般に反省とか自覺とかいへば、其の對象となるものは、自己の現實的方面即ち自己の何であり、如何なる價値を有するものであるかを明らかにする心作用であるかのやうに思はれて居るが、これだけを以て自己批評の全體の意味を悉したと思ふのは謬見である。蓋し、反省若しくは、自覺にはこの他に、自己の何であるべきか、如何なる價値を持つべきかといふことを明らかにする一面があるからである。否自己批評といふ心作用を惹起する原因はいふまでもなく、單なる認識のための認識作用ではなくて、出来るだけ自己の價値を高めるための出發點としようとする改造の意志であるから、反省といひ自覺といふも、其の中心點となるべきものは、寧ろ後者でなくてはならない。斯くして自己批評は自己の先天性固有性即ち個性の現實的價値を明らかにすると共に、この個性の將成的價値若しくはその到達點としての最高標準乃至規範を見出すこととなるのである。而して前者は自己批評の消極的知的方面であり、随つてまたその分析的方面であり、後者はその積極的情意的方面であり、随つてまたその綜合的方面である。然るに若しも自己批評が單に前者のみに限られる時には、自己批

評は自己の既存價値を闡明するといふ知的満足を與ふるに止つて、其れを改造し、更に新價値を創造するといふことが出来ないのである。然るにこれに反して、上に述べたやうな二面が調和した形に於て作用する時には、即ち要求を以て個性の現實を制御し、現實的價値を闡明することを通して將來改造の萌芽を見出す時には、自己批評は始めて自己の改造力乃至創造力となるに至るのである。

(四) 文明批評。歴史といひ社會といふも、これを最も高い意味の文明即ち人生の一面と見てのみ、初めて十分な意味に於ける批評の對象となるものである。但し、歴史は事實としては歴史學の對象であると同様に、社會もまた事實としては、社會學の對象である。然るにこれらを以て生の第一義欲の所産なる文明の一面と見る時には、初めて其れが價値的存在となり、随つて十分な意味で批評の對象となることが出来るのである。そして茲にこそ文明批評の職能が存するのである。實に文明批評は社會の事象を、縱横兩面から見て、即ち時間的に其れの原因と歴史的意義とを匡すと共に、空間的に其れの原因と社會的意義とを尋ねることによつて其れの真相眞價を正當に認識し、且

その短所弱點を匡救することに依つて改善の原動力を與へるものである。換言すれば、文明批評は、文明の皮相面乃至一面のみを見ないで、其の内面性本質性たる文化の價値を正當に批評することに依つてその進歩と人類の幸福の増進とに貢献しようとするものである。更に別言すれば、文明批評は、文明の源流と變遷とを理解し、其の基調を把握し、其の正しい進路を達觀することに依て、進歩の停滯と疾病とを救濟すると共に、歸趨に迷ひ踟躕狐疑失望沮喪する社會民衆に前途の光明と精進の力とを與へることを任務とするものである。随つて文明批評は、時間的錯誤にも空間的錯誤にも陥ることから免れて、事象を精確に批判し、文明の進歩を正路に立たしめ、人間の幸福を健全なものたらしめることが出来るのである。

然らば、いふ所の文明とは何であるか。一言にすれば、文明とは人間精神の最高作用なる理性の所産である。即ち、人間が價値ある生活を營まがために、一面に於ては、生活意志を深強大化すると共に、他面に於ては、件の意志を出来るだけ十分に實現せんがために、生活力そのものを強烈にし、且精巧細緻な具體的方法を講ずる結果

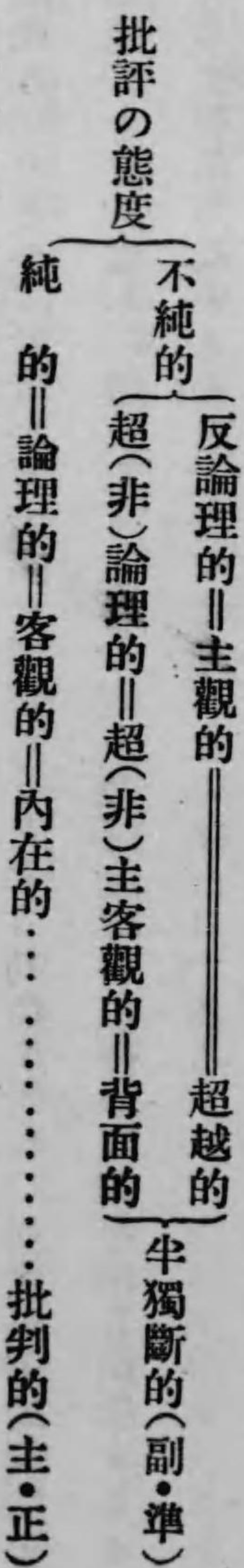
として文明の進歩を見るのである。そして生活意志が深強大化されるとは、個人意識が十分に發達して「人格」となるといふことであり、生活力が強烈になるとは、知情意の心力と體力とが調和的に發達するといふことであり、具體的方法を講ずるとは社會を組織し自然を利用する方途を講ずるといふことである。随つて文明批評の標準はこの兩面に存する。即ち、文明批評の根據は一言にすれば人生批評である。文明批評が人生批評まで到達しない時は、それは單なる歴史批評、社會批評の境域に止る。文明批評が件の縦横の對立を一團として其の底に徹するやうになつた時がやがて人生批評である。蓋し、人生の價値の客觀的具體化を他にして文明乃至文化價値があり得ないからである。然るに文明は普遍的であると共に特殊の特殊であつて、全世界乃至人類に共通するものがあると共に土地に依つて異なるものがある。斯くして、世界文明と國家文明との別を生ずるに至る。随つて文明批評に於てもこの兩面を併せ兼ねなくてはならない。即ち、同じく歴史批評と社會批評とを等しく攝取するにしても、いふ所の歴史にも社會にも同様に普遍的のものと特殊のものとがあるから、何れの一面にも

偏することなく、十分調和的な態度を以てこれに當らなくてはならない。併しながら凡そ如何なる文明批評を試みるにしても、常に人生の本義を根柢とし中心とすることを忘れてはならない。即ち自己批評に即した人生批評を根柢とし中心とすることを忘れてはならない。蓋しこの點を忘れる時には、既に一言したやうに、淺薄にして低級な歴史批評若しくは社會批評の何れかに墮して仕舞ふからである。随つて本當の文明批評をなし得るものは價值ある人生觀を懷抱し、且文明乃至文化價値の根柢と全體とを理解し批評する能力を持つて居るもの、即ち廣義の哲學者でなくてはならない。

(乙)超越批評・内在批評・背面批評

批評を一個の方法、態度乃至形式として、詳しくは價值批判の方法態度乃至形式として用ゐられる時は、所謂獨斷的と對照して批評的方法と稱せられる。即ち、古來の傳説口碑若しくは他人の説議思想を其の儘に是認するか、何等の吟味をも批評をも加へないで、自己の思想の原理を先づ肯定し、其の上に演繹的に學說を構成するのが即ち獨斷的態度であり、これに反するのが批評的態度である。

斯くの如く、批評の本質は本來獨斷に反すべきもの、即ち正しい意味で論理的であつて超(非)論理的(非理性的無理性的乃至情意的)、及び反論理的(過誤・虚偽及び詭辯)要素を絶対に包含すべからざるものではあるが、廣義に批評といふものの中には、これらの要素が多少介在して居ても、依然これを一種の批評と見做すのである。斯くして批評の態度にも、以上の區別に従つて三つの種類を數へることが出来るのである。



(一)超越的乃至主觀的批評とは、批評者自身の立脚地若しくは標準によつて對者の判斷を判斷する批評である。即ち對者と異つた標準に依つて下す判斷であるから、主觀的であり超越的であり随つて非論理的であつて十分な意味の批評といふことが出来ない。たとへば、對者が或る藝術品を以て非常に價值があるとするのに對して、自己の藝術的良心から見れば價值がないと批評するやうなのはそれである。

(二) 内在的乃至客觀的批評とは、他者の立脚地若しくは標準(前提)に自己を置き換へて暫らくこれを襲用し、而して其れの當然な推論の過程に照して他者の判断の正否を判断する批評である。即ち自己を空しくして客觀的立脚地を取り、他者の態度若しくは論理の内に在つて其の正否を判断するものであるから、客觀的であり、内在的であり、論理的であり、随つて論理的といふ點から見れば十分な意味の批評といふことが出来る。たとへば對者が藝術品を價值ありとする判断に對し、對者の美的規範と判断の過程とを檢覈し、價值ありとせる理由乃至論理的根據の誤謬を明らかにすることによつて價值がないものと批評するやうなのはそれである。

(三) 背面的乃至超主客觀的批評とは、他者の判断の背面に立ち入つて判断の論理的根據の正否よりも寧ろ有無即ち其の判断の存する心理的根據の如何を檢覈し一舉に其の判断の是非を判ずる批評である。即ち判断其のものは是非よりも、判断者の心事乃至態度の是非を判断するものであるから超主觀的であると共に超客觀的であり、更に超論理的(寧ろ心理的)である。随つて論理的といふ點から見れば是非の判断を下すこと

の出来ない批評である。前の例を藉りれば、或る藝術品を價值があるとする判断に對して、其の判断者が未だ其の藝術品を見たことがないといふ事實を示して其の判断の價值を否定するやうな批評は即ちこれである。

以上三種の批評の價值を比較するに、各何れも存在の價值を有するが、内在的批評は最も論理的であるから、普通はこれを主として用ゐる時には最も正皓に近い、即ち客觀的妥當性に富んだ批評を下すことが出来る。これに比して、超越的批評は論理的でないために、主觀の偏見や好惡に左右されて批評の精確と妥當とを損傷し、随つて對象の價值改造の域外に出ることが少くないが、而かもこれは、對象の範圍を擴大し、諸多の新らしい見解を提供することに依つて對象を一層價值あるものに判断し直すことが出来るといふ長所を具へて居るから、前者に次いで用ふべきものである。要するに超越批評の價值は、特に批評者の用ゐた價值標準の高下大小に依存するものである。背面的批評は、批評者の標準による判断をも承認せず、自己の論理的缺陷をも承認せざる場合、或はこの兩者の何れをも用ふる必要もない程價值の少い判断に對して

一舉にして其の根柢を覆す上に最も有効な批評である。随つてこの三者は對象に應じて夫々独自の價值乃至效用あるものであるから、必ずしも一を採つて他を捨てることは出来ないが、一般の順序少くとも否定的破壊的批評の順序としては、先づ内在的批評によつて精到なる論理的批評を試み、それでも對者が承認しない時には超越的批評を試みて對者の立脚地を囚はれより脱せしめ、それでも尙十分に納得しない時には、背面的批評を試みて其の心理的根據を破壊するやうにすべきである。

尙この點に關聯して一言附加したいことは、批評法と一般の學問研究法との關係である。蓋し批評といふも嚴密な意味に於て用ゐられる時には對象に對する論理的判斷を以て骨子とするものであり、随つて究極するところ一般の研究法乃至思考法以外に出ることが出来ない筈だからである。而して、いふ所の一般の研究法乃至思考法とは歸納法と演繹法とである。詳言すれば、歸納法とは、個々特殊の既知の事實より未經験若しくは未論證の事實を網羅した可能的乃至蓋然的な一般の眞理を推知する方法を意味し、演繹法とは一事實の正當なことをより多く精確なりと認められる所の原理

より證明すること、若しくは自明にして疑ふべからざる唯一の原理より正當の方式を以て更に其の應用たる小さな原理を導き出す如き方法を意味する。即ち前者は主として論證法であり随つて消極的であるのに對して、後者は主として發見法であり随つて積極的でありと見なされ、且學問研究法としては後者が前者よりも一層卓越するとせられて居る。翻つてこれを方法としての批評に就いて見るに、依然として其の間にこれと同様の二面があることを見出すことが出来る。即ち超越的批評は演繹法に類似し内在的批評は歸納法に接近して居る。併しながら、演繹法と歸納法とは必ずしも全然兩立すべきものでもなければ、又價值の優劣が絶對的なものでもなくて實は相關的補合的のものである。只歸納法は演繹法に比して一層包括的の價值を有するものであるといふ事は出来るが、歸納法其のものが、新らしい眞理を發見し創造するといふことが出来ない。蓋し眞理の發見乃至創造といふ境致は單なる理知作用乃至論理作用以上の一層奧妙な人格作用だからである。殊に批評に於ては、其の本質上新らしい眞理の發見乃至創造を主眼とするのではなくて既存の眞理乃至眞理と見做されたものを改造

して行くことを主眼とするものであるから、一面に於ては歸納法の問題によつて對象の判断を改造する上に當然必要な諸要素諸屬性を蒐集し、これを其れ自身の内在的標準に照して判断すると共に、更に一層大きな標準に照して見るといふ演繹法の問題をも加味しなくてはならない。要するに十分な意味に於ける批評は、表面的には論理的でなくてはならないけれども、其の點睛的境致に於ては超論理的乃至人格的のものであるといはなくてはならない。而してこの點こそ批評と創作との交渉問題を生ずる所以である。

補遺——前篇第二章の「三」(七頁)の末尾に左の一文を加ふ。

Criticism はホルドウィンの『哲學及心理學辭典』(Dictionary of philosophy and Psychology, Vol. 1. p. 246.)によれば希臘語の "κριτικός from κριτής, a judge" に當る。

中篇各論

第一章序説

「一」前篇に於て、批評の本質を明らかにした。即ち批評の語義より、一般的意義、論理的意義、目的、動力、作用、對象、標準、價值及び種類等凡そ批評乃至批評作用といふものゝ性質に關して一通りの説明を加へた。随つて讀者は、批評に關する大抵の理解、殊に批評といふものは、人性乃至人生に關する、極めて根柢的全體的の作用であるといふことに對する理解を持たれたことと思ふ。併しながら、前篇第一章に一言したやうに、通例の意味に於て批評と呼ばれる時には、主として認識道德及び藝術の三方面の批評を指すものであり、殊に「批評家」といふ時には、大部分藝術上の批評家即ち「文藝批評家」を指し、時には所謂「文明批評家」をも指すものであるから、「批評」の全體的意義を闡明するがためには、その原理論乃至總論と共に、上に述べた實際的特殊的方面をも明らかにしなくてはならない。但し、批評の各論全體に亘つて論述す

るには、前篇第四章に挙げた批評の種類全體を詳しく説明しなくてはならないのであるが、それは到底本書のやうな小著では出来ることでないから、茲には只上記の三方面即ち哲學批評倫理批評及び藝術批評のみについて極めて簡単な説明を加へるだけに止めて置くこととする。

而して、著者が特に上記の三方面を選んだのは、勿論通例の價值分類法即ち眞善美の三分法を套襲したものであるが、而かも尙この三種の批評を明らかにすることに依つて、大體批評の凡ての種類の性質を闡明することが出来ると信じたからである。

〔二〕さて件の三種の批評を一通比較して見よう。

第一に、其の對象及び標準を比較するに、哲學批評の對象は論理的價值體、即ち判斷乃至認識で、其の標準は眞理乃至眞であり、倫理批評の對象は倫理的價值體即ち行為乃至人格で、其の標準は善であり、更に藝術批評の對象は美的價值體即ち藝術品で、其の標準は美である。

第二に、其作用を比較するに、哲學批評は主として理知的論理的判斷乃至最も高い意味の理性的判斷であり随つて合理的論理的といふことを主眼とするのに對して、倫理批評と藝術批評とは寧ろ情意的判斷であり随つて超論理的である。但し、同様に情意的判斷であるとはいへ、倫理批評は意的に偏し藝術批評は情的に偏することは改めたいふまでもない。尙これと共に一言すべきは、倫理批評も藝術批評も情意判斷であるけれども、其の批評の態度形式方法等に於ては哲學批評に俟つ所は極めて多いといふことである。即ち倫理批評にしても藝術批評にしても、それが客觀的妥當性のあるものとなるためには、或る程度迄は必ず論理的批評合理的批評の力を藉りなくてはならない。蓋し、哲學批評は、其の究極に於て、倫理批評及び藝術批評の原動力たる善意識美意識の究極的性質及び最高標準を闡明するものだからである。この意味に於て、哲學批評或は倫理批評は認識論が其の他の學術特に倫理學及び美學に對すると同様に批評の出發點であり、最根柢であるといふことが出来る。

これを要するに、哲學批評は價值批評としては形式的方面を主とするものであるのに對して、倫理批評及び藝術批評は、實質的方面を主とするものである。

(尙序ながらこの點に聯關して一言したいことは、前にも一言したことであるが、「批評」と「批判」との相違についてである。勿論これは大まかにいへば兩方共同の意味であるが、而かも通俗的にも二者の間には幾分の相違があることは事實上否定することが出来ない。即ち、量に於て前者は狭く後者は廣いし、其の質に於て前者は情意的(主觀的)色調が強く後者は知的(客觀的)の匂ひが著しい。前者が主として倫理的藝術的の批評、殊に其の非難の方面に用ゐられるのに對して、後者は主として稱讚非難を包含した公平な論理的批評に用ゐられるのは洵に故あることである。随つて一般的には、批評は倫理的審美的のものに使用し、批判は哲學的のものに使用するものとして見て差支ない。併しながら本書では在來慣習的に用ゐられた名辭以外のものにはこの兩者の常識的區分を徹廢して單に批評の一語を用ゐ、詳しいことは其れに形容詞を附して使用することにする。)

第二章 哲學批評

第一節 總說

哲學上批評の意味を有する所は、主として其の知識論即ち認識論に於てである。蓋し、知識論乃至認識論は、學としての哲學の根柢であり、哲學研究の態度方法を定めるものだからである。斯くして認識論に於て批評的態度方法を取るものは、詳しくいへば、第一に認識の起源及び能力そのものを研究して、出來得るだけ少い假定から出發しようとするものは、「批評哲學」の名を以て呼ばれるのである。

批評哲學乃至哲學上の「批評主義」^{クリティシズム}は、消極的な形に於ては、既に「懷疑論」として古代から現はれて居たが、積極的な、そして系統的な形に於て唱へたものは、いふまでもなくカント(一七二四—一八〇四)である。随つて批評哲學又は批判哲學といふ時には、カントの哲學乃至廣くカント派の哲學を指すのである。併しながらカント哲學以後現今の所謂「目的批判說」に到る迄、その間には種々の相違があるから、以下極めて簡単にこれら

の諸説を解説することによつて、批評哲學乃至哲學批評の輪廓を明らかにし、併せて哲學に於ける批評の本質を闡明しようと思ふ。

但し、批評乃至哲學を狹義に解する時には、哲學批評は單に認識批評を以て足れりとするけれども、これを廣義に解する時には、單なる論理的認識以上の最も高い意味の理性の批評まで到達しなくてはならない。随つて哲學批評の中心は最も高い意味の理性價值即ち「真理」でなくてはならない。

第二節 批判的觀念論

「一」哲學が「批判學」であるといふことを明言したのはカントであるが、彼の意味する批判はいふまでもなく「認識力の批判」乃至最も廣くして高い意味の「理性能力の批判」を指すものである。換言すれば、彼は單に認識能力に對してばかりでなく、學問の全野に於いて、獨斷的といふと乃至獨斷論（獨斷論とは、カントに従へば、あらかじめ理性の能力を批評するとなしに行はれる論斷）に對して批判的といふことを

用ゐたのである。即ち彼の批判哲學の意義は、要するに客觀的普遍的の態度に於ける即ち根本原理からの批判といふ所に存するのである。カント曰ふ（『純理批判』の序）。

「私から見れば、批判とは書籍や體系の批判を意味するものではなくて、あらゆる經驗の助けなしに到達しようとする認識に聯關する理性能力一般を批判的に考察することを意味する。随つて、形而上學一般が成立するや否やの區別、及び其れの起源と範圍と限界とを凡て根本原理から規定することを意味する。」

(Ich verstehe aber hierunter nicht eine Kritik der Bücher und Systeme, sondern die des Vernunftvernögens überhaupt, in Ansehung aller Erkenntnisse, zu denen sie, unabhängig von aller Erfahrung, streben mag, mithin die Entscheidung der Möglichkeit oder Unmöglichkeit einer Metaphysik überhaupt und die Bestimmungseruso wol der Quellen, als des Umlanges und der Grenzen derselben alles aber aus Principien.)

以上の言葉に依つて明らかなるやうに、カントの批判哲學は認識能力の批判から出發しようとするものである。而して其の第一歩は正に消極的批評主義ともいふべき懷疑

説であり、随つて其の直接先驅となつたものは經驗論から懷疑説に入つたヒュームである。この意味に於てカントの批判哲學は懷疑論の徹底したものであるといふことが出来る。換言すれば、懷疑論と獨斷論(極言すれば一切の反對論)に共通する一層包括的にして本源的な概念乃至原理即ち認識の先天的要素を探究しようとするのがカント批判哲學の目的なのである。随つてカントの批判哲學は懷疑論と異ると共に、獨斷論とも異り、この二者を調和し包括するものなのである。

〔二〕上に述べた點から見ても明らかであるやうに、カントの批判哲學には要するに二つの特色がある。即ち、第一は、哲學の研究は認識能力を批判して其起源限界及び權能を論定することから出發しなくてはならないとすることに依つて、自己の立脚地を所謂「獨斷論」から區別した點である。勿論この見解はロックの經驗論的認識觀を根源として居るが、ロックのは傾向としては即ち獨斷的な形而上學に反對する點に於ては批評主義的であり乍ら心理學的根柢に立つて居るために結局懷疑論に入るべき運命を有する所がカントの批評主義と異なる所である。第二は、知情意の三方面に亘つて、

吾々の精神内に存する超個人的の先天機能を探究することを中心目的とし、且この目的に恰適した新方法を案出したことである。即ち超個人的な規範の淵源者を自己詳しくは理性作用其のもの内に認めようとし、随つて論理的方法即ち批判的方法を採用するに至つたことである。要するに、認識論を以つて眞理價値の起源と本質との攷覈でありとし、それに恰適する方法として、所謂批判的方法を採用したのがカント哲學の特色である。(蓋し、カントが批判的方法を採用したのは、哲學の對象を以て「價値」であると見たからである。)

〔三〕更に詳言すればカントは在來の獨斷論(經驗論と純理論)に反し、認識の起源と認識の價値とを峻別して、認識の性質を明らかにせんがためには、單に心理的方法によつてその起源を明らかにする許りでなく、又批判的方法によつて其の價値を決しなくてはならないとした。併しながら、カントの批判哲學の對象となつたものは、既に一言したやうに、單なる心理學上の理知若しくは知力とは趣を異にして、最も高い意味の理性(ラテン語)の悟性に對するものにて理知又は認識の最高段階、(三)知情意の三面を含みながら、而かも先天的妥當的妥當性、即ち知情意全體を包括した意識若しくは精神其のもの能力又は價

値を明らかにしようとするものである。これ彼が自己の批判哲學を、純粹理性、實踐理性、判斷力に應じて『純粹理性批判』『實踐理性批判』及び『判斷力批判』に三大別した理由に他ならない。

兎に角、カントは獨斷的に初より認識の可能を許さず、其の果して可能であるか、どうか、そして若し可能であるとするならば、如何なる條件、及び如何なる原理の下に可能であるかを吟味した後で、肯定し否定せんとするのである。而して、カントに従へばこの認識を可能ならしめるに必要な條件及び原理は、認識即ち經驗に先立つて存在することを要するものであるから認識を批判し理性を評價せんがためには、認識乃至經驗の成立に先立つ經驗の要素及び認識の要素を明らかにしなくてはならない。カントはこの認識乃至經驗の成立に先立つ要素を、先天的要素若しくは先驗的要素と名付け、随つて又この要素を研究するといふ意味で批判的方法を先驗的方法若しくは先天的方法とも呼び、更に、自己の立脚地を批評主義、批判哲學、超越哲學乃至先驗哲學などと呼んで在來の獨斷論から區別しようとしたのである。而してその批判哲學の

根本問題は、「如何にせば先天的綜合判斷は可能なるか」といふことである。

「先驗的」若しくは超越的とは經驗に先立ち、經驗を超越して、而かも經驗即ち認識の成立に必要な要素を研究することである。尙この語は、過境若しくは不可經驗の對象といふ意味の即ち經驗乃至認識と全く没交渉なトランスセンデントといふ語と嚴密に區別さるべきものである。「先天的」とは、後天的個人的偶然的に對して用ゐられる語で非時間的のもので、經驗に先立つて存し、經驗によつて論證せられず寧ろ經驗をして可能ならしめる普遍妥當性及び必然性即ち超個人性を有するといふ意味である。換言すれば、先天的とは原因及び原理を認識することによつて、結果若しくは事實を認識するの意味で心理的先行といふことではない。

蓋しカントに従へば、前篇に一言したやうに認識即ち知識の取得に必要なものは判斷であるが、この判斷には、分析判斷と綜合判斷との別がある。即ち判斷の賓概念が主概念の内包中に包含せられる概念である時には、分析判斷で、判斷によつて單に既知を説明するだけで知識の範圍を擴充し、新知識を獲得するには何等の用をもなさな^{エルロイテレングスウルマイル}いもので「説明判斷」と名づくべきものである。これに反して、判斷の賓概念が主概念の内包中に包含せられない判斷は綜合判斷で知識の範圍を擴充し、新知識を獲得するもので「擴充判斷」と名づくべきものである。換言すれば分析(説明)判斷は經驗を俟つことがなくて自明なものであり、隨つて先天的即ち普遍的必然的のものであるのに對して、綜合(擴充)判斷は經驗を俟つのでなければ眞偽を別つことの出来ないも

のであり、随つて後天的即ち特殊的偶然的のものである。随つて又、前者は主として理性を偏重して経験を無視する合理論者によつて用ゐられるに反し、後者は主として経験論者に用ゐられるのである。(カントは、認識の起源論では合理論を正しとし、其の範圍論では経験論を正しとした。)

然るに本來學的認識は、吾々の知識を擴充するに足るもの、即ち第一に綜合的であることを要するが、これと共に、綜合には綜合の作用たる何等かのXがなくてはならない。而してこのXは勿論経験の對象ではなくて倒主に経験をして可能ならしめるものでなくてはならない。蓋し、若しもそれが経験の對象であり得るとしたならば更にそれ以上綜合のXがなくてはならないからである。随つて十分な意味で價值のある判断は綜合的であると共に、また普遍的必然的でなくてはならない。即ち合理論の長所(普遍的必然的の認識を與ふること、分析判断を與ふるは其の短所)と經驗論の長所(綜合的認識を與ふること、偶然的特殊的認識を與ふるは其の短所)とを併せた先天的綜合判断でなくてはならない。實にカントの批判哲學の目的は、この先天的綜合判断の可能を證明することにあるのである。随つて、カントの「批判」の眞義も結局するとこ

る意識の全部即ち知情意の三面に亘り、この必然的にして普遍妥當的な先驗的要素——規範乃至理想を見出すことによつて綜合判断を可能ならしめようとするものに他ならないのである。換言すれば、規範意識を伴ふことを特性とする眞善美の共通の根柢となるそれ自身普遍妥當的な必然的な先天的原理即ち先天規則を知情意の三方面に亘つて探究しようとするのがカントの批判哲學の中心主題である。

但しカントは、判断若しくは認識の先天綜合性を認めただけでも、これは要するに只論理的分析の上で認めただけでその綜合力を眞に十分實現することが出来なかつた。而してこれを事實化し具象化したものがやがてヘーゲルの「正」「反」「合」の三段による辯證法である。即ちヘーゲルは、二つの抽象的段階(即ち正と反)を経て具象的段階(即ち合)に到達するといふのである。これ彼がこの具象的綜合を呼ぶに單に綜合とはしないで、「止揚」^{アウフヘーベン}といふ言葉を用ゐた所以に他ならない。

止揚には、「止める」ことと、「保存すること」と「揚げる」こととの三つの意味がある。即ち具象的綜合に於ては矛盾は其の對立を止め、且大切な要素として保存せられるばかりでなく、更にその對立以上に高揚されるのである。

これを他面より見るにカントに随へば、認識の内容たる感覺の資料は與へられるものであり、随つて認識に於ては偶然的のもの即ち經驗に依て制約されるものであるが、感覺に秩序を與へる普遍的直觀形式(時間と空間)及び概念形式(十二の範疇)は先天的に吾々の思惟に存在し、随つて凡ての認識作用に具はつて經驗内容を超越する所謂先驗的のものである。一言にすれば、凡ての認識に於ては、必ず資料と形式とを具ふべきものであり、そして前者は、經驗的後天的であり後者は先驗的先天的であるといふにある。随つて兩者の調和を主眼としながら、何れかといへば、後者を重視するカントの認識論乃至哲學全體が形式的に偏するのは極めて當然なことである。更にこの點から見て、カントの認識論が現象論とはいひながら實在論よりは寧ろ觀念論に近い理由が明らかである。随つてカントの認識論を一言に批判的觀念論といふと出来る。

批判的觀念論(若しくは超越的觀念論乃至先天的觀念論)はカントが自家の説を獨斷的觀念論と區別するために名付けた名稱である。即ち認識力を批判した結果、認識の超越的要素を主觀的だと見るバークレーの觀念論は、認識力を批判することなしに立

てた觀念論であるとしてこれを質料的觀念論と名付け、自己のはこれと區別して形式的觀念論と呼んだのである。即ちバークレーが認識を以て徹頭徹尾主觀の表象であると見たのに反して、カントは、その形式だけを主觀の所産であると見、その質料は經驗が與ふる所のものと見たのである。而して前者に優越性を認めたのは、畢竟彼の先天觀の中心が創造的な綜合意識にあるからである。

〔四〕これを要するに、カント哲學の主眼は正しく「自我の解放」である。即ち彼は、主觀は客觀に依存するのではなく、倒まに客觀は主觀の所産であると見ることによつて、換言すれば人間の「理性」は自然界に隸屬するものではなく、倒まに自然界は理性に依て成立するものであり、客觀的知識は先驗的な純粹統覺の綜合(乃至主觀又は一般意識の統一)により、自然科学の世界は純粹自我の綜合によつて成立するものであると見ることに依つて、自我をあらゆる外的權威乃至法則から解放しようとするものである。蓋しいふ所の主觀、自我といふものは、單なる悟性的のもの心理的のもの個人的なものではなくて、理性的のもの先驗的のもの普遍的なものだからである。實に

カントは、自我を根柢から自由なものとすることを主眼としたからこそ、理知と情意との限界を明らかにし後者に卓越性を與へることに依つて相殺剋撃を避けたと共に、眞善美全體の價值意識を各々獨立な而かも統一あるものとしたのである。

斯くの如くカントの批判哲學は「解放」の哲學ではあつたがまだ十分な意味で「創造」の哲學ではなかつた。そして其處に最も大きな「改造の哲學」としての彼の批評哲學の眞面目があると共に、彼が純乎なるロマンテイケルとなり得なかつた理由がある。實にカントは「意志の卓越」を力説しながら、乃至は「信仰の世界」と「趣味の世界」との價値を高調しながら、本來聰明な彼の理知は、客觀世界の實在を肯定せずには居られなかつた。即ち彼は經驗世界は純我の綜合に依つて成立するものであり、そしてその形式は先天的に主觀に具はつて居るものであるとしながらも、その内容を客觀界に求めずには居られなかつた。實在を凡て主觀乃至自我の創造とし、情意を即ち自我とするには、彼の心は餘りに反省的であり、冷靜であると共に、人性を渾然たる綜合體統一體と見るには彼の心は餘りに分析的であり細緻であつた。斯くして彼はどこ迄も知と

信とを區別し、理知と情意とを區別し、主觀と客觀とを區別したのである。一言にすればカントの情意の要求は凡て理知を止揚したものであり、その夢と情熱とはいつても理知化されたものであり、隨つて彼があらゆる努力によつて解放した「自我」詳しくは「純粹自我」は實在の創造者生産者たることが出來なくてその構成者たり改造者たる地位に止つたのである。而して茲にこそ最も偉大なる批評主義者としての彼の眞面目があり、最も偉大なる批評主義者としての彼の哲學の本領がある。カントが彼の時代を指して「現代の特色は批評の時代たる所に存す」といつたのは、畢竟するに、カントが彼自身の哲學を以てこの時代の思想界學術界を支配しようとした、換言すれば自己を以て時代の批評者を以て任じたものに他ならない。

尙最後に一言すべきは、カントの批評主義は單に認識の限界論に於て獨斷論（肯定的獨斷論）と懷疑論（否定的獨斷論）、その起源論に於て合理論（先天論）と經驗論（後天論）、乃至その本質論に於て實在論と觀念論とを調和するばかりでなく、更に科學と宗教及び道德、即ち理知作用と情意作用とを調和し、物質世界と精神世界とを調和し

ようとするものであるといふことである。單言すれば、カントの批評主義は、一切の反對説を、それらの各説に共通する最も根本的な即ち普遍的妥當性のある原理を發見することによつて、十分な形に於て調和し、各種の見解をしてそれらの真理を發揮せしめる新方途を發見しようとするものである。即ちこの意味に於てカントは批評といふことを、精神作用中最も根柢的にして全體的なものとするものである。

第三節 カント以後の批評哲學

「一」カント哲學は合理論と經驗論、先天論と後天論と、觀念論實在論とを調和しようとするものであるが、其の後繼者はこのカント説の各一面を立脚地としてカント以前の哲學に復らうとしたために、嚴密な意味でカントの批評論的立脚地を遠ざかるに至つた。即ちカント哲學の直系といふべきフイヒテ、シエリング、ヘーゲル三家の所謂ドイツ觀念論哲學乃至ロマンティック哲學は、勿論三家各没すべからざる特色を有するものであるが、其の基調に於て合理論的寧ろ思辨的であり先天論的であり觀念論的で

あり乃至形而上學的である點に於ては凡て同一である。斯くしてカントの主目的たる認識論的哲學の建設即ち形而上學の破壊といふことが忘却されて、寧ろ形而上學の建設を主目的とすることとなつたのである。これ批評哲學の衰頹を來した所以である。

「二」この間の消息を幾分詳しく述べるに、先づカントの批判的方法是フイヒテに至つて所謂目的觀的方法となつた。即ち、カント哲學の暗示に基き理性の最高目的を定めてこれより出發し、あらゆる理性の機能をこの最高目的に對する必然的な手段として演繹することによつて、カントの發見した種々の理性の機能に統一と體系とを與へようとしたのがフイヒテの目的觀的方法である。併しながら、やがてそれはこの時代の哲學——ロマンティシズムに共通な純先天的方法即ち辨證法の形式を取つたために、それから諸多の規範乃至先天機能を導き出すことが出来なかつた。これと共に、フイヒテに發してヘーゲルに極つた超個人的理性の形而上學化、本體化の根柢の上に立つ汎理的觀念論は、其の形而上學的豫想から出發して價值の體系を導き出さうとしたが、それは第一に、形而上學的豫想を以て出發したといふ點に於て嚴密な意味の學と

しての體裁を缺き、第二に價値の相對觀若しくは平等觀に陥つて、「不許不」乃至規範性の意義を没却し、隨つて批判法出現の根本精神に背くに至つたのである。

斯くして、一九六〇年前の獨逸哲學界の本流は自然科學的思潮乃至自然主義的哲學の司る所となり、カント哲學乃至其の後繼としてのヘーゲル哲學は其の副流に過ぎない様な有様であつたが、哲學思想そのものの本質的發達と文化の進歩變遷の結果、六七十年代に於てカント哲學復興の時期を生じ、斯くして所謂新カント派の出現を見るに至つたのである。

而して其の先驅となつたものは、ノオルトラージである。即ち彼が『ヘーゲル哲學の缺陷』(Die Lücken der Hegelischen System)に於て「カントに歸らなくてはならぬ」と絶叫し、ヘーゲルの門から出たツェラーが一八六二年に、ハイデルベルヒの就職講演に於て『認識論の意義と問題』とを論じカント研究の要を力説してこれに和したが、未だ深く一般の注意を惹くには至らなかつた。これと前後して、ヘルムホルツは、その生物學的研究の結果がカントの『純理批判』の結果と契合する點があることを唱へ、

更にリープマンがカント及び亞流(Kant und die Epigonen, 1865.)に於てカント哲學を復興すべきことを高調し、ランゲは『唯物論史』(Geschichte des Materialismus, 1866.)に於てカント哲學の意味を明らかにし、更にコーエンの『カントの經驗理論』(Kants Theorie der Erfahrung, 1871.)、マイエルの『カント心理學』(Kants Psychologie, 1871.)出づるに及んでカント哲學の復興の必要と價値とが明らかになり、遂に單にドイツばかりでなく、世界哲學界の主潮を形造り遂に今日の所謂「新理想主義」の時代となつたのである。

「三」 纏つて思ふに、カント哲學には少くとも二つの大きな哲學系統の萌芽を含んで居る。即ち一つは認識論的哲學であり、一つは形而上學的哲學である。精しくはカント哲學の中心概念たる理性の解釋の異なるに従つて所謂新カント派に二つの異つた學派を生じたのである。即ち理性を個人精神内の超個人的意識と解するものは論理派、乃至認識論派であり、これを超個人的意識と見ると共に更にこれを形而上學的のものと見るものは形而上學派である。そして前者がカント哲學の本旨に近いことはいふまでもない。隨つてこれを以て「批判派」といふことが出来る。これ新カント派が其の初期

に於て認識論に止つた所以である。實に新カント派興起の當初に於ては、カントの認識論の研究を中心とし、當時の主潮たる唯物論乃至自然主義の打破若しくは當時最も勢力のあつた自然科学の根柢の檢覈に主力を注いだのである。蓋し、カントは、いふまでもなく近世認識論の創始者として、認識問題を中心とすることによつて形而上學的思辨を排したのが、この時代の反形而上學的傾向に恰適したからである。

勿論新カント派も、それが發達するに従つて種々複雑な内容を生じ、且前世紀末からは、その初期のやうに、單に消極的な唯物論の打破、若しくは舊い形而上學の破壊のみに止らないで、積極的に新らしい形而上學的傾向を加味して、人生觀や世界觀を建設しようとするものが多く現はれて來た。即ち其の初期に於ては、カントの三大批判中『純粹理性批判』を哲學研究者の唯一の權威として居たのが、其の後期に於ては『實踐理性批判』及び『判斷力批判』をも併せ尊ぶに至つた。而して其の共通點は、(一) 基調が理想主義的であるといふこと、(二) カントの先驗的方法を採用し隨つて論理的であり認識論的であることに存する。

尙其の主要なる學派は、(一) 實證論派と、(二) 論理派と、(三) 目的批判派とである。純粹の新カント派ではないが、實證論派に似たものが所謂精密科學派である。而して新カント派は單に獨逸だけでなく、英佛にも大なる影響を與へた。但し、カントの批判哲學の影響を受けながら、尙カント派と呼ぶことの出来ないやうな立場や體系で批判的見解を主張したものがあつた。ヴントの「經驗批判說」の如きはそれである。今これらの新哲學の中特に批判哲學の名を以て呼ばれる諸說について略解を試みよう。

第一項 經驗論的批判論

〔一〕「エンピリカウクリティシズム經驗論的批判論」とはヴントの認識論上の立脚地で、カントの批判哲學が純理哲學に偏したのに反して、批判論でありながら、經驗論に執して居るために特に經驗論的と名づけるのである。

ヴントは、直接經驗より出發し件の經驗を批判することによつて認識の本質を説明しようとするものである。即ち、認識は外界の刺戟のみより受動的に生ずるものでもなく、又外界と何等の關係もなしに生ずるものでもなくて、刺戟と思惟との協力に由

つて生ずるものであるとするものである。換言すれば、経験が無ければ勿論認識は成立しない。併しながらいふ所の経験は、英國経験派のやうな外界の経験其のものではなく、外界の刺戟と精神に本具する思惟作用との協力の結果である。そして抽象的には、経験即ち思惟を形式と内容とに別つことは出来るけれども、實際に於ては、兩者は、決して離れることの出来ないものであつて、兩者の協力的作用こそ認識作用の源泉となる根本的事實である。そしてこの事實がやがて直接経験である。

直接経験には自ら二つの區別が生ずる。即ち経験の主観的内容(情意の支配を受くるもの)と客観的内容(情意の支配を受けないもの)とであつてこれがやがて主観と客観との區別を生じ、そして客観が主観に表象されるために直接経験は分れて主観に於ける表象と、主観の對象との二つとなる。但し主観と客観とは、カントの考へるやうに初めから對立するものではなくて、経験の進歩の結果として後天的に分立する同一物の異なる側面である。要するに、直接経験を自己の情意と關聯せしめて見れば表象となりこれと離して見れば對象となる。斯くして氏はカントの提起した認識問題中主観と

客観、表象と對象との關係を直接経験によつて解決しようとしたのである。これと共にカントが先天的の形式とした直観形式も範疇もザントに従へば、多くの経験を重ねた結果として漸次に發達し固定したものである。蓋しカントに従へば、「先天」といふ語は、(一)普遍的必然的の妥當、(二)経験の形式、(三)認識作用中主観に根柢を有する部分といふ三つの意義を持つて居るが、ザントは認識の主観と客観とを區別しないために主観に根柢を有すると否とによつて先天と後天とを區別するのは無意義であると共に、認識の形式と内容とは、單に思想上の抽象的便宜的區別で、實際は初めから結合して與へられたものであるから、内容から獨立する形式といふものも亦無意義であり、随つてザントによつて認められるものは、只第一の必然的普遍的といふ意味の「先天」であるが、而かも、ザントから見れば、これは經驗的に發展して來た概念だからである。然らば何故にザントはこの經驗的の直観形式や範疇を「先天的」のものとしたかといふに、これらは經驗の結果ではあるが、而かもこれを個々の經驗に適用する時には先天的即ち必然的普遍的であると共に、その根源は直観作用思惟作用の本質に

所謂經驗に先立つてあるからである。而して、斯くの如く直接經驗より出立し、思惟活動によつて經驗を整理する結果思惟の公準として範疇が固定して行くとするヴントの見解は勿論カントに反すると共に、フイヒテヤ、ヘーゲルの如く、範疇を以て形而上學的の「絶對」の發展の段階となし思辨的にこれを演繹する見解ともかなり異なるものである。而して又思惟と經驗とを平等に採用し完全に調和するといひながら、而かも、思惟を偏重し主知的に傾けるに對して、經驗を主張し主情的要素を尊重せるはたしかに認識論の進歩に貢獻する所が大である。

尙ヴントより出たものでキユルベ、ステルリング、メツサー等の一派を「批判的合理論」と呼ぶこともある(アイヌラー等)。

〔二〕「經驗批判論」の主張者には、ヴントの外に「純粹經驗批判」の著者アベナリウス(四一)がある。即ち氏に従へば、認識の對象は、純粹經驗である。そして純粹經驗は直接に與へられるもので、意識とか、主觀客觀の別とか、事物の表象とかいふものは何れも形而上學的の概念で、人性を外物に與へたか、さうでなければ、物性を心に

與へたかの結果として生じたものである。認識論の出立點は、(一) 周圍、(二) 我即ち神經中樞、(三) 神經中樞の發表即ち經驗で、認識は周圍が神經中樞に働き掛けて引き起した動搖であり、經驗はその發表である。随つてこの三者の關係を攻究すれば、認識の性質は自ら明らかになるものでこの三者の名が何であるかを問ふ必要がない。尙、同様に「經驗論的批判論」でありながら、アヴェナリウスの立脚地がヴントのそれと異なる所は、認識過程を以て人間の有機的性質の結果と見て、生物學的の説明を與へようとする點、及び感覺論を根據とする點にある。

第二項批判的實在論

「批判的實在論」とは、ユーベルエツヒが十九世紀のイギリス新カント學派中、ホヂソン及びアダムソン等の經驗論的實在論的な見解に對して與へた名稱である。即ち實在論的認識論を取り、觀念を離れても實在は客觀的に存在すとしながら、その實在を認識する認識能力を批判的に見る點に於てカントの批判哲學を襲ひ、斯くして認識能力は實在の真相を知り得る力があるか否かの問題に接觸することなしに、形而上學

的の實在を立てる獨斷的實在論と趣を異にするものである。

第三項批判的唯心論

「批判的唯心論」とはユーベルエツヒがイギリス十九世紀の唯心哲學、即ちカントの批判哲學を主とし、これにフイヒテよりヘーゲルに至るドイツ唯心學者の主張を加味したものに與へた名稱である。而して其の代表者はグリーンである。

即ちグリーンはカントの先驗的方法により、經驗を分析することよつて認識を可能ならしめる精神的原理を發見しようとするものである。換言すれば、認識の成立には感覺と、これを統一する精神即ち自意識とがなくてはならない。更に、吾々の認識の對象たる自然界が、若しも認識の主體たる精神と全然其の組織を異にする時には、精神はこれを認識することが出来ない。随つて自然其のものも、其の根柢は精神と同様各個體が双關的に統一的に存在するものであり、随つて又宇宙は認識と同様に、體系的のものでなければならぬ。而してこの宇宙の統一者は神的自意識であると共に、吾々の精神も亦この神的自意識の顯現であるから、兩者を支配する法則は畢竟同一であ

る。これを要するに、神的自意識は宇宙の最高統一者であり、この最高統一者が人間に於ては自意識となるのである。

第四項目的論的批判論

「一」目的論的批判論とは、ウインデルバントを筆頭とする獨逸西南學派の認識論的哲學のことである。この學説は、「物自體」といふ思想を極力排斥して、知識の根柢を全然思惟の要求に置き、認識論がやがて哲學そのものであると見ると共に、認識論上の心理主義に反して、純然たる論理主義即ち批評的方法を取らうとする點に於ていふまでもなくカントの批評哲學を繼承したものである。即ちカントが知識の根柢に意志を認め實踐理性を理論理性の上位に置いた主意的見解を一層徹底せしめて「目的論」のものとしたフイヒテの見解を襲うたものである。詳しくは、ウインデルバントに隨へば、知識が實在に合致することに依つて普遍妥當的なもの、即ち眞理となるのではなくて、情意の對象たる先天的な規範意識の存在に依つて眞理となるのである。更に別言すれば、彼は普遍妥當的な目的を最高價値の認識及び行爲の規範として批判しよう

とするものである。斯くして氏は在來の自然科学に對して規範學としての文化科學を建てると共に、カントに於てはコンストラクティブ・エグザム・ド・エツァエ構成的原理であつた自然科学の原則を目的的に解してレギュラティブ・エグザム・ド・エツァエ規制的原理としたのである。

而して氏のこの主意的目的論的見解は、フイヒテから來て居ることは、氏がフイヒテがカントの規範意識を目的論的に解したことを推稱して居ることに徴して明らかなのである。併しながら、氏の説がフイヒテの説と異なる所は、氏がフイヒテの『知識クイッセンシャフト』が目的の規定から實現の手段を演繹しようとしたのを排して事實と價值、存在意識と價值意識とを峻別しようとし、更に、フイヒテを以て形而上學的となし、どこまでもカントの認識論的立脚地を固守しようとする點に存する。而して、これウインデルバントが目的論的立脚地にありながら、フイヒテ乃至ヘーゲル等の如く、沒價值觀乃至形而上學派に墮しなかつた所以である。

〔二〕リツケルトはウインデルバントの批評哲學の見解を一層明晰にして、哲學即ち認識の對象は「不可不ミューズセン」ではなくして「不許不ソルレシ」即ち「價值」でありとし、批評的方

法を論理的に解することに依つて嚴密に心理主義から區別し、即ち先驗的論理學を先驗的心理學から嚴密に區別して前者を重視し、眞理は思惟の必然性によつて立てられるものではなくて、倒まに、思惟の必然性は「不許不」即ち「價值」を假定することに依て解せられるのであるとした。斯くして氏の説はボルツァノの純論理主義に接近すると共に、幾分カントを離れることゝなつたのである。尙この派に屬するものに、クリスチャンセン、ラスク、コーンなどがある。(この派は特に「先驗的觀念論」と呼ぶことも出来る。)

第五項其の他の批判論

ルヌヴェイエーは自ら「批評主義クリティシズム」と稱する程カント哲學の影響を受けた人である。即ち彼はカントに倣つて人間の理性を批判し、是に基いて哲學の問題を研究しようとするものである。但し彼は其の認識論的見地に於てカントと異なる所が少くない。即ち彼はカントの時間を以て實在でないとしたばかりでなく、物其自身乃至本體の世界を排して吾々の意識にあらはれる現象以外に實在はないとしたのである。彼（及びピロソ等）の批評主義は「新批評主義」とも「方法的觀念論メトードイッシュエン、イデアリスムス」とも呼ばれる。而してこ

の系統に近いものは、所謂論理派ロギスムス即ちコーエン、ナトルプ、カッシーラ等の説である。

論理派は目的批判派と同様に、カントの物其自身を排して、純粹に認識論的立場を取り、思惟其のものの中に認識の根本動因を見出さうとするもので、即ち思惟の綜合及び分離を以て最も根本的な認識能力とするもので、この意味に於て、形式的であり論理的であり随つて批判的である。而してこの派(殊にコーエン)の西南派と異なる所は、思惟を生産的のもの、即ち思惟の必然的發展が時空の形式であると共に其の内容であるとし、且數學及び自然科学の認識を主とする點である。換言すれば、西南派が價值乃至規範を出發點として論理學を立て、價值乃至不許不を中心とするに對して、この派は存在乃至眞理を出發點とも中心點ともし、論理學を以て直ちに價值の學とする點である。これこの派が「合理的カント派」(アイスラー)とも呼ばれる所以である。

最後に批評といふことを意的に解することによつて「價值の哲學」を主張するに至つたのはミュンステルベルヒ、ロイス等であり、フアイヒンゲル等も幾分これに類似して居る。

第四節 哲學批評の意義

既に一言したやうに、批評は哲學的根據を得てのみその十分な意味と價值とを發揮することが出來ると共に、倒次に、哲學の中心要素が批評乃至批評的精神である。實に哲學は、其の中心動力として批評的精神を要し、其の方法乃至態度に於て批評的であることを要し、最後に、その職能乃至目的に於て價值の批評といふことを要するのである。更に詳言すれば、最も高い意味の批評的精神はやがて直ちに哲學的精神其のものであり、哲學の要する批評的態度乃至方法は勿論内在的批評であり、更に哲學の職能乃至目的としての批評は單に認識批評知識批評のみに限られるものではなくて、人生其のもの根本的批評若しくは人生の根柢の批評即ち最も高い意味の「理性」乃至「理性價值」の批評でなくてはならない。而してこの點にこそ批評の哲學的意義が存するのである。

然るに、批評を生命とする哲學が、甚だしく沒批評的になることが少くない。詳し

くは、第一に、其の精神に於て批評的精神が薄く、即ち改造の意志乃至能力が薄弱な時には獨斷と模倣と盲従とを事とし、随つて何等の進歩發達をも見ることが出来ないこととなるに至る。小さな亞流哲學者の如きは大抵これである。これに反し、他に對しては批評的精神が發動しても自己批評の意志乃至能力が薄弱である時には、誇大盲想狂や似而非天才になつて、十分な意味での自己改造の本旨に乖くに至るのである。第二に、其の態度方法に於て批評的でない時には、知識に對しても人生に對してもその一面や皮相面に觸れるに止つて、全體的根柢的の改造を遂げ得る境域に到達することは出来ない。第三に、たとひ其の精神や方法態度が批評的になつたとしても、其の目的の内容が單に認識批評知識批評のみに止る時は、哲學は或る意味では、即ち認識論の意味では、批評哲學であるとしても、十分な意味では未だ批評哲學といふことが出来ない。蓋し、批評哲學の職能は、單に認識論上の反對論を調和統一して最も根柢的本源的な原理を見出すだけでなく、宇宙乃至人生に關する一切の學說の矛盾を排して共通の根本原理を見出し斯くして人文をして斷えず健全なそして統一的な進歩をな

さしめることにあるからである。随つて十分な意味で批評哲學を建設せんがためには、認識批評は勿論最も高い意味の人生批評を完うしなくてはならない。即ち全體としての人生そのもの、本質を理解し其價值を明らかにすると共に、其の價值を増進せんがために絶えず根柢的な改造作用を試みなくてはならない。而して人生の具象的價值は文化の中に具現されるものであるから、批評哲學の對象となるものは認識力以外に最も高い意味の文明即ち文化價值でなくてはならない。然るに在來の哲學は、主として認識批評に止るか、さうでなければたとひ人生批評に手を着けても、その批評が人生改造の動力とならないやうな不徹底なもののみ多かつたのである。この意味に於て、私は上に略述した現代の批判哲學中所謂價値の哲學價ち目的論的批判論に最も多くの敬意を拂ふものである。只この哲學は、餘りに認識論に偏し、餘りに論理に執して、具體的價値の批評即ち人生批評に力を注がなかつたことが最も遺憾なところである。これを要するに、哲學批評の直接對象は論理的判斷即ち認識でありその標準は「眞」であるから、第一に先づ認識力の起源本質の攷察から出發して認識の價値批判即ち真理

批判に進むと共に、その究極対象たる眞善美を包括した人生そのもの、根本的批判に入つて最高價値を攫み、其れによつて自己存在の價値の根柢を堅めると共に人生を統一し、そしてこれに斷えざる改造力を附與するために方法としては所謂「論理法」と所謂「直觀法」とを併せ兼ねた眞の批判法を用ゐ、態度としては、内在的批評の態度に依るやうにする所に批評の哲學的意義が存するのである。(隨つて、哲學批評の眞義を十分に明らかにするがためには、上に述べた形式論以外以上更にその内容たる「眞理」の本質を明らかにすべきものであるが、本書に於ては到底これを詳述することが出来なから、甚だ不完全ながら上記の形式論のみに止めて置くこととする。この意味に於て本章は只哲學批評の一面を論じたに過ぎないのである。)

斯くの如く見る時は價値ある哲學批評は、單に學識の豊富と理知の明敏とだけで出来るものではない。勿論、哲學は學である限り、哲學批評に於ては學識の豊富と理知の明敏とは必要不可欠の條件であるが、これを以て直ちに哲學批評の原動力の全體であると思ふのは大なる謬見である。蓋し既に述べたやうに、哲學批評の一面は認識批

評にあると共に、一面は人生批評にあり、そして價値ある人生批評は只熱烈な人生改造の誠意を有するものによつてのみ成し遂げられるものだからである。隨つて價値ある哲學批評を爲さんがためには、何よりも生活改造の意志即ち生活意志を旺盛にすると共に價値意識を鮮活鋭敏にし、更に、件の改造の意志を事實化し價値意識を活用せんがために、理知を明敏にし思索力を精到にし論斷力を的確にすることを要する。實に件の両面が巧みに調和されてのみ、即ち自我全體が批評的に活動してのみ本當の哲學批評が出来るのである。(尙「哲學者が批評家である」といふ點については附録(一)批評家としての哲學者、及び(二)文明批評家とは何ぞ、の二篇を参照していただきたい。)最後に、アイヌラの『哲學辭書』(Handwörterbuch der Philosophie)中の「批判」及び「批評」の説明を引照して参考に供する。

Kritik; Beurteilungskunst, Scheidung des Richtigen vom Falschen, Wertvolles vom Wertlosen, Prüfung einer Leistung, eines Werkes nach Bedeutung und Wert des Gebotenen, auf seine Angemessenheit zu den Forderungen und Normen der

theoretischen oder der praktischen Vernunft oder des Geschmacks hin. (S. 355.)
Kritizismus; Standpunkt der philosophischen Kritik, Methode der erkenntniskritischen Grundlegung der Philosophie, der Besinnung auf des Voraussetzungen, Prinzipien, Ziele und Grenzen der Erkenntnis, im Gegensatz zum Dogmatismus, welcher ohne Prüfung der Erkenntnisbedingungen philosophiert und Metaphysik treibt. (S. 356.)

第三章 倫理批評

第一節 總說

倫理批評とは、倫理的價值體即ち行爲乃至人格を對象とし、その理想價值なる善を標準とする標評である。随つて、「善」の解釋の異なるに従つて其の内容にも其の方法にも種々の差異が生ずるのである。斯くして倫理批評の眞義を明らかにするには、其の標準たる善及び其の對象たる行爲、乃至人格の本質を攷覈しなくてはならない。

第一に倫理批評は、其標準より見る時は個人說と社會說、自律說(乃良心說直覺說)と他律說(乃至權力說)形式說と内容說若しくは動機說と結果說とに別れ、内容說又は結果說は、更に快樂說と理性說、自我實現說又は人格實現說に別れ、更に快樂說は自己的、公衆的(功利的)、進化的の三つに別れる。

第二に、これを對象より見る時は、行爲批評、性格批評、人格批評と別れる外に、特殊的には自己批評、他我批評、社會批評及び文明批評等に別れるのである。

第二節 標準よりの分類

〔一〕倫理的價値の標準を以て、個人的のものと見る時には、個人主義となり社會的のものと思ふ時には社會主義となる。個人主義の代義者はニイチエやホッブス等であり、社會主義の代表者はヘーゲルやスペンサー等である。次に、善の標準は自己の心内にあり随つて道德は自律的のものであるとすれば自律主義随つて良心主義直覺主義となり、これに反して善の標準は自己心外の外界にあり随つて道德は他律的のものであるといふ時には他律主義随つて權力主義となる。キルヒマンは他律主義の代表者であり、カントは自律主義の代表者である。更に善は形式的のもの即ち意志活動の形式そのものであるとすれば形式主義となり随つて結果よりも動機を重んずるから動機主義となり、これを内容的のもの即ち何等か内容ある結果を生む事であるとするれば内容主義となり、随つて又結果主義となる。内容説は其の主眼とする所が快樂であるとするれば快樂説となり、理性に従ふことであるとするれば理性説(クラーク及びストア派を代

表者とす)となり、自我の實現であるとするれば、自我實現説(グリーンを代表者とす)となり、人格の實現であるとするれば、人格實現説となる。更に快樂説は、個人一個の快樂の増進を主眼にするのと、社會一般の快樂乃至幸福の増進を主眼とするのと、これを社會進化の一面と見るのとで個人的(エピクロスを代表者とす)、公衆的(ベンザム、ミルを代表者とす)、進化的(スペンサー、ステイブンを代表者とす)の三つに別れる。

〔二〕倫理批評の上の斯くの如き異解は、要するに、その標準たる「善」に對する見解の相違から來るものである。然らば、最も十分な意味に於ける善とは何であるか。

吾々を以て見れば、善は人間の最深要求即ち意志の中心作用を離れて存するものではない。換言すれば、善は人間の最深要求其のものであると共に、また件の最深要求を觸發するもの乃至其れの對象となるものである。一言にすれば、よりよく生きようとする意志の發達乃至實現の目標及び過程が善である。この意味に於て善は意志に内在するものであると共に、それを超越するものである。善が時に相對的となり時に絶

對的となるのは蓋しこれがためである。併しながら、善は其の他の價值と同様に、必ず「自己」に、精しくは自己のよりよく生きようとする最深要求に相對的なものである。更に別言すれば、自己に内具しながら價値的には絶えずこれを超越しようとする力即ち自律力が善である。この意味に於て、道德乃至道德的價値の本性は自律的であり、内面的であり更に最も高い意味で形式的であるといはなくてはならない。而して斯くの如き内面の力即ち自律力によつて絶えず自己の要求を實現せしめて行くと共に、又斷えず要求其のものをも深強大化し、あらゆる意味に於て自らの力で自らを成長せしめるものは、換言すれば、自由なる意欲によつて斷えず個別的自我の實現をはかると共に、個別的自我に内在しながら而かもこれを超越する超個人的命令としての「不許不」に服従することを本務とすることによつて斷えず自己其のもの成長をはかる「自律」的存在は、人格を外にしてはないから、倫理批評の標準は斯くの如き意味に於ける「人格」であり、随つて倫理説として最も價値あるものは、斯くの如き意味に於ける人格實現説であるといはなくてはならない。

〔三〕人格は自己本具の力によつて、最善に即ち獨自な形に於て自己を成長せしめて行くものである。随つて斯くの如き標準の下にある倫理的價値の特色は、或る意味に於て獨自性即ち絶對性といふことに存する。詳言すれば、倫理的價値乃至人格價値の本質は、其の他の價値即ち所謂事物價値が相對的であつて、大きな損失なしに他のものと交換することが出来、随つて一方の損失を他の異つた方面から補償することが出来るのに對して、大なる損失(或は絶對的損失)なしに交換することの出来ないもの、随つて一方の損失は如何なる方法を以ても補償することの出来ないものであるといふ意味に於て絶對的であるといはなくてはならない。この點から見て、カントは價値を二分して人格價値と事物價値とした。人格價値とは其れ自身目的であり、随つて絶對的のもの第一義的のもの本質的のものであり、事物價値とは他の(即ち人格の)目的の手段であり、随つて相對的のもの第二義的のもの利用的のものである。而していふ所の唯心的倫理説は前者の價値を根柢としたものであり、いふ所の快樂説乃至功利説は後者の價値を根柢としたものである。随つて倫理的價値を以て人格的のものとするものにとつて快樂

説乃至功利説が十分な満足と與へないことは改めていふまでもない。

〔四〕これを他面より見るに、價値の特質たる規範性乃至改造性は、この倫理的價値乃至人格價値に於て最も明白強烈に現はれるものである。自己の造つた理想的價値、即ち最高價値に向つて自我及び生活を進めねばならないといふ拘束を痛感し、苦闘と精進とに伴ふ苦い幸福を斷えず嘗めて行かなければならない。理想と現實との對立交渉本務と偏向との對立交渉、乃至價値的必然即ち不許不と事實的必然即ち不可不との對立交渉に於て、倫理的價値は矛盾の超越、鬭争、力苦精進の結果としてのみ現はれるもの、即ち單なる實現ではなくて獲得であり、單なる寄與ではなくて創造であり、單なる服従ではなくて自由であることが證明される。倫理的價値が「自律」といふ形に於て現れると共に、又「當爲」といふ形に於て現はれるのは蓋しこれがためである。

更に倫理的價値に於ては、價値の特色たる客觀的妥當性が最も明白に現はれる。蓋し、倫理的價値は何等かの意味に於て客觀的とならなければ存在することが出来ないからである。即ち倫理的價値程客觀的になればなる程主觀的特殊的になるもの

はない。詳しくは、既成の風習秩序等を廻避することがないと共に、これに盲従することとはなく、十分な意味でこれを批評し改造することに依つてのみ自我は眞の自由を獲、眞に倫理的價値のある人格となることが出来るのである。即ち「自律」によつて個人と團體、服従と自由、必然と當然、受容と施與とを調攝する所に倫理的價値が現はれるのである。

〔五〕以上要するに、倫理的價値の特色は活動的な所に存する。而かもいふ所の活動は、自己を離れた目的乃至單なる結果を標的とするものではなくて、自己其のものを目的とし、活動其のものの過程其のものを目的とするものである。即ち自己目的的自己充足的なものである。随つて倫理的價値の特色は、其の他の價値のやうに主觀と客觀乃至形式と内容との分離對立といふことなく、寧ろ、形式が内容を貫串し、主觀が客觀に透通する所に存するものである。蓋し、倫理的價値の形式的主觀的要素たる「自律」は、内容其のものを客觀其のものの動力であると共に、それらを離れて存在し得るものではないからである。

第三節 對象よりの分類

「一」倫理批評の對象は、「行爲」であるといふことは一般の見解であるが、而かもいふ所の行爲を單に外的行爲と解する時には、行爲批評となり、行爲は性格の現はれであると見る時には、性格批評となり、行爲も性格も人格の一面であると見る時には、人格批評となる。更に、特に一個人の倫理的價值(思想、行爲、性格、人格)を對象とする時には、個人批評即ち自己批評若しくは、他我批評となり、社會一般の倫理的價值を對象とする時には、社會批評となり、更に廣く文明乃至歴史にあらはれた倫理的價值を對象とする時には、文明批評となり、人生全體の倫理的意義といふことを對象とする時には、人生批評となる。(これらの一般的意義及び區別は既に前篇に於て略述したから茲には述べない。)但し、狹義に倫理批評といふ時には、主として對他批評、即ち他の人格(行爲)に對する批評を意味する。

而して、これら諸種の倫理批評は、一を以て他の凡てを兼ねるといふいふやうな性質のものではなく、何れも夫々独自の意義と領域とを有するものである。只行爲批評性格批評及び人格批評の三者を比べて見ると、第二のものは第一のものよりも、第三のものは第二のものよりも一層包括的な隨つて高義のものであるといふことが出来る。

「二」詳言すれば、倫理批評の對象は、嚴密な意味に於ける行爲である。そして嚴密な意味に於ける行爲は、必ず有意的目的的動作である。隨つて其れは思慮選擇決意實行の諸作用を具備したものでなくてはならない。即ち全體としての人格の意識的自覺的表現でなくてはならない。少くとも、いつも必ず人格體系に還元することの出来るものでなくてはならない。隨つて倫理批評の對象が人格であることは勿論である。即ち個々の行爲は人格體系の一發現一要素としてのみ批評の埒内に加入し得るものである。倒まにいへば人格體系は、只個々の行爲を通してのみ成長も表現も出来るのである。

性格とは人格の倫理的價值である。即ち性格は人格體系中直接に倫理批評の對象となるべきものである。詳しくは、心物的實在としての人格が倫理的作用を呈した時の状態が性格なのである。而して意志は、性格の動的發現である。性格の決定力でもあ

り、また人格體系の精髓動力でもある。随つて、本體的靜的に見れば、性格と意志とは區別することは出来ない。即ち意志と見る所に性格がなく、性格と見る所に意志がないのである。二者は只動的時間的の區別である。二者は斷えざる一元的連續的發達的である。意志が性格となるのではなく、性格が意志となるのではなく、性格が意志なのであり、意志が性格なのである。性格を意志と呼び、意志を性格と呼ぶのである。但し、件の轉換は、勿論同量換位ではない。何となれば性格の範圍よりも意志の範圍が廣大だからである。詳しくは意志が現實的に發動する時には、性格の實存在せず、而かも意志活動を肯定的に自覺する刹那に於て既にそれは性格と名づけらるべきものなのである。要するに人格を動觀したのが意志で、靜觀したのが性格である。

〔三〕翻つて、これを意志の自由といふ點から見ると、意志自由の可能は、只性格自由の可能に依存する。意志の自由とは、自由體たる性格を原因としての因果律に従ふといふことである。性格以外の、詳しくは性格に何等の交渉も變化も及ぼさぬやうな單なる外的原因(勿論かゝる原因は實際にはあり得ないが)に従はぬことを意味する。

意志が出鱈目に作用するのではなくて、性格が可能的に本具する選擇決意作用を性格自身の發達完成の目的のために活かして、性格に依存しながら尙且幾分其れに新らしい意義と内容と形式とを附與する様に、意志活動をするを外にして自由意志は存在しないのである。要するに、性格的必然に依存しながら、其の結果に於て其の性格を幾分なりとも發達完成の道に進めさせるのが意志自由の本義である。

思ふに心情に關係のない行爲がなく、行爲に影響のない心情はない。只心情性格其の儘が必ずしも行爲となるものでも、又行爲に現はれたものが性格の全體でもない。人格の全相は、只性格と行爲との系統化によつてのみ知ることが出来るのである。即ち行爲は、其の性格に交渉せしめてのみ其れの評價が妥當性を得るのである。随つて性格批評といひ行爲批評といふもそれは種類の差ではなくて觀察の位置の差である。平面的差別ではなくて、立體的差別である。空間的相違ではなくつて時間的相違である。性格を背景とし原因とし先行條件としない行爲がなく、行爲を動かし、行爲に依つて進められ行爲によつて表現されない性格もないのである。現實に存在するものは性格

に原因し、行爲に現はれ、更に性格の内容を變化する所の過程即ち人格の活動過程がある許りである。單なる性格、單なる行爲、單なる意志といふが如きは抽象名辭に過ぎない。随つて倫理批評の對象は、性格と行爲との二面を具備するものとしての人格批評を他にしてはないのである。性格批評を離れた行爲批評はなく行爲批評を離れた性格批評もあり得ない。何となれば、行爲前の性格と全く異つたと思はれる程の行爲（極めて稀であるが）又は全然其の性格を知らぬ人の行爲も、其の一行爲の示した範圍に於て、それだけそれが其の行爲者の性格の一象徴的經驗だと見て批評を加へて差支がないからである。要するに問題は性格と行爲とは、全然別物であるかといふのではなくて、寧ろ「新らしい行爲、詳しくは新らしい意志決定から成り立つた行爲がどれ程舊い性格と價值的に差異があるか、將た、舊い性格の眞價如何、及び新行爲に依つてどれ程の内容的變化を與へられたか」といふ點に存するのである。換言すれば「靜的性格（過去行爲の總果）の眞價如何及び動的な性格（現在の意志及び行爲）が如何程靜的性格と類似若しくは相違するか」といふ點にある。

要するに、性格は過去に於て意志の成果であるやうに、未來に於ける意志の源泉である。「現實的」^{アクチュアル}となつたのが性格である。伏能^{ポテンシャル}を現實となさんとするのが意志である。伏能が現實となりつつある過程が行爲である。性格と意志とは行爲といふ形のみ存在し理解し得るのである。行爲たらんとする力其のものが意志であつて、行爲となつたものが性格である。行爲は意志と性格との限界線である。

〔四〕さて行爲批評に比して性格批評を重視する所以のものは全心界を系統化し、統一して、「人」を全體として見、且批評しようとする努力の結果であつて、實人生より抽象して道德事象を攷覈する立脚地より、具體如實の生を統一的に見て倫理を説き人格全體を評價の對象とする立脚地に移つたもので、多大の進歩といはなくてはならぬ。

斯くして、眞の倫理批評の標準が人格であると同様に、最も十分な意味に於ける倫理批評の對象も人格である。随つて最も十分な意味に於ける倫理批評も亦人格批評であるといはなくてはならない。即ち單に外的行爲だけでなく、行爲の内面即ち動機

性格をも批評の對象とする所に、一言にすれば人格を對象とする所に、倫理的判斷と法律的判斷即ち道德性モラリテイトと合法性レガリテイトとの差別が存するのである。而して、この意味の倫理批評は只良心作用の最も卓越した人の自己批評に於てのみ可能である。随つて、既に一言した其の他一切の倫理批評即ち他我批評社會批評乃至文明批評は皆自己批評を唯一の理由根據とすべきものであるといふことは、ヘリツプスの言の如く、やがて自己の人格批評を根柢とすべきものであるといふことに他ならない。この意味に於て又、他人に對する本當の人格批評は、只人格及び力量に於て被評者と同等乃至同等以上の人が強烈にして純眞な批評的精神を以て、即ち誠實と熱心と愛と聰明とを以てする時にのみ出来ることである。随つて人格批評程困難なとして慎重にすべき批評はないのである。

尙序ながら一言すべきは、倫理批評も其の他の批評と同様に、主觀的と客觀的との別つことが出来るが、眞の倫理批評は、勿論後者でなくてはならない。これカントが、判斷の主觀的法則なる格率マキズムが客觀的普遍妥當性を有する時にのみ眞の道德的判斷が出来るとした所以に他ならない。

第四節 倫理批評の意義

「一」倫理批評即ち性格批評乃至人格批評の主眼とするところは、被評者に自己改造の暗示と激勵とを與へるといふことである。換言すれば、被評者自身の自覺しない或は長所と誤信する短所缺點を指摘すると共に、其の短所缺點の由つて来る源泉と理由とを明らかにし、更にその短所缺點を匡救し補成することの出来るやうな暗示と激勵とを與へることである。而して倫理批評が其の他の批評と異なる所は、直接に生活意志を對象とし、直接に價值改造の意志を力強く刺戟し規制するばかりでなく、更に、一切の批評を嚴密に自己批評を根柢として爲す所に存する。實に、凡ての倫理批評が、對者の意志に肉薄して「彼か是か」エントウエーダーオーダーの一を選ばしめずには止まないものであると共に、倫理批評に於て、斯くの如き態度を以て他人の思想なり行爲なり性格なり生活なり事業なりを何等の容赦もなく又何等の不徳——道德的苦痛をも感ずることなしに、大膽に

深刻に徹底的に批評——非難することの出来るのは、要するに、それが單に理知や感情上のことではなくて直接意志上のことであり、更に、單に對象のみに對する客觀的の批評ではなくて、實は自己批評を根柢とするものであると共に、對者を憎惡するがためではなくて、眞に對者を愛するがためであり、眞に對者の價値を高めん——改造せんとするがためである。

随つて、若しも批評を以て價値改造の意志を根柢とし、價値改造の事實を本旨とするものであり、更に、自己批評を以てその根柢中心とすべきものであるとする著者の見解が許されるならば、この意味に於ける倫理批評は批評の眞義を最も十分に發揮したものであり、随つてまた典型的な批評であるといはなくてはならない。

〔二〕併しながら倫理批評を以て典型的批評であるとするのは、決して一般的意味に於ける善を以て最高價値と見ようとするものではない。蓋し、改めていふまでもなく眞も美も皆善と同様にそれ／＼獨立の價値を有するものだからである。而かも吾々はそれと反對に善を以て眞や美を阻害するものとするのも亦極めて大きな誤りであるとする

るものである。何となれば、眞も美も結局は最も高い意味の善の一面乃至一要素に過ぎないものだからである。即ち人間精神の最も複雑にして高尚な即ち最も根柢的な作用が良心であるといふ意味と同様の意味で、人生最高の價値は善であるといふことは許されるものであり、随つて、一切の批評は、結局この意味の善の改造を究極目的とするものなのである。そして高い意味に於ける倫理批評の特殊の意味は實にこの點に存するのである。實に、哲學批評に於ても藝術批評に於ても、人生最高の價値たる至善を目的としてのみ十分な効果を擧げることが出来るのである。これに反して、哲學批評にしても藝術批評にしても、單に知的興味乃至情的興味のみで行はれる時には、本當の人生の進歩のために貢獻する所が少いのである。吾々が一切の批評の根柢を價値改造の意志にありとし、一切の批評の目的を對象の價値改造にありとし、更に一切の批評の中心點は自己の價値改造にありとするのも、畢竟するに、この最も高い意味に於ける倫理批評を以て批評の典型とも中心精髓ともするがために他ならない。

これを要するに、倫理批評の對象は、人格であり、其の標準は人格價値即ち善であ

り、其の方法は論理法でも鑑賞法でもなくて、嚴密に自己批評に即する意的批評であり更に斷言的判斷である。而して其の中心特色は、批評の典型であり、随つて一切の批評の中心とも根柢となるべきものであるといふ點に存する。

第四章 藝術批評

第一節 總說

「一」藝術批評はいふまでもなく、藝術的價值即ち藝術品を批評することを目的とするものである。併しながら、いふ所の藝術に對する解釋の異なるに従つて、種々の相違を來すものである。即ち、藝術の目的乃至本質に關する解釋と、其れを批評する標準及び方法の異なるに従つて、藝術批評に種々の相違を來すものである。随つて、藝術批評の真相を明らかにせんがためには、その目的と標準と方法と更に對象の四面から解釋しなくてはならない。

「二」第一にこれを目的の方面より見るに、藝術批評の目的は藝術其のものゝ目的の異なるに従つて異なるものであることは改めていふまでもない。今この點を明らかにするに先だちて、ゲレー及びスコットの見解を一瞥する。即ち兩氏は、其の共著『文學批評論』(Gayley and Scott; Methods and Materials of Literary Criticism P.7.)の中に文

藝批評の目的として左の十項を擧げて居る。

(一)批評は知識を獲得し若しくは傳達する諸他の方法と同様に、知的興味其れ自身の満足といふことが目的である。

(二)批評は文學の一種類であるから、文學の他の形式(たとへば小説詩歌など)が是認されると同じ根柢から批評の存在も是認さるべきものである。

(三)批評は文學鑑賞に役立つこと、即ち批評しようとする作品乃至作家を明確に解説して印象を強くするにある。

(四)批評は文學上如何なる作品が優れた作品であり如何なる作品が劣つた作品であるかを教へて、一般人の時間と心的精力とを經濟的にすることを目的とする。

(五)批評は作家のために一般民衆を教養することを目的とする。

(六)批評は作家に對して如何に一般公衆に自己を適應せしむべきかを教示することを目的とする。

(七)批評は一般公衆の文學趣味を調整し教養することを目的とする。

(八)批評は文藝に對する一般の偏見を排斥することを目的とする。

(九)批評は作家及び公衆の誤謬を匡正することを目的とする。

(一〇)批評は新思想或は新刊書を親しく味ふこと若しくは讀むことの出来ないものために、其の本質を示すことを目的とする。

〔三〕次に、これを藝術の本質の方面から見ると、藝術批評の主眼點はいふ迄もなく批評家が作品から得た感銘印象である。併しながら、いふ所の感銘印象は、單に感覺感情のみに與へられるものではなくて、理知にも懇へるものであるから、感銘印象も亦自ら美の標準乃至規範によつて異なるものである。隨て其處に種々の藝術觀乃至藝術批評論の相違を生ずる。即ち第一に美を客觀的に存在するものと見る客觀說と主觀内のものを見る主觀說とがある。更に客觀說にも作品の内容を形造る所の精神、目的、價值意識一言にすれば人生觀と、この内容を表白する形式(及びこの内容に對する態度や形式に對する用意)即ち作品の成立條件との何れかを主とすることによつて藝術批評に於ても、批評の標準を形式的のものに求めるものと、内容的のものに求めるものとの相

違を生じ、随つて廣く形式主義と内容主義とに分れる他に、後者はまた狹義の美だけでなく善を中心とし、更に眞を含んだ人生全體を以て最高の價值標準とするか、或は狹義の美を以て最高標準とするかによつて人生派と藝術派とに別れるのである。更に詳しくいへば、人生派も、文藝を以て勸善懲惡の方便と見る時には高い意味の功利主義となり、廣く「人間の本性」を探究し、人生の神秘を闡きその價值を高め、且新生面を開拓し新生活を創始するものと見る時は、狹義の人生主義（創造主義）となり、更に文藝の批評を通じて個人を批評することを目的とする時は個人主義となり、社會を批評する事を目的とする時は社會主義となる。藝術派も「美のための美」といふことを以て最高標準とする時は所謂藝術至上主義若しくは唯美主義となり、快樂の増進を以て最高標準とする時は、所謂快樂主義乃至低い意味の功利主義となる。これを心理作用の方面から見れば、藝術的價值の本質を見るに感覺を主とするものと情緒を主とするものと理知を主とするものに依つて感覺主義、情緒主義、理知主義に分れる。但しこれらの區別は便宜的のものであるから、各派截然と區分し得るものでないことはいふまでもない。たとへばマッシュュー・アノルドの如きは人生派の批評家でありながら、而かも「文藝は文藝其れ自身の目的法則に従つて判断せよ、他より標準を憚ひ來る乍れ」といふことを主張する點に於て、一種の藝術至上主義者であるといふべきが如きは即ちそれである。

〔四〕第二にこれを方法の方面から區別するに、根本的態度の上から見れば論理的方法の二大差別に従つて（一）演繹批評と（二）歸納批評となり、更に後者は二つに分れて作品を外面から見ようとするものは、（三）比較批評（横的）と（四）歴史批評（縱的）となり、作品其のものの内面的價值を直接に批評しようとするものは、（五）解釋批評（知的客觀的）と（六）印象批評（情的主觀的）と（七）鑑賞批評（知情的）となる。尙こゝに一言すべきは、歸納批評が極端に走る時には所謂科學批評といふものになることである。更にこれを特に批評家の態度から別つ時には主觀批評と客觀批評となる。而して主觀批評とは主觀の感覺感情情緒を批評の標準とするものであるから、寧ろ無標準主義といふべきもので印象主義がその代表者であり、客觀批評とは客觀的標準に照して

判断を下すものであるから、理知的のものであり、印象批評以外の批評は皆この種類に屬する。只鑑賞批評のみは主觀批評と客觀批評とを調和しようとするものである。

〔五〕第三にこれを對象の方面より見るに、藝術の分類法には種々あるけれども、畢竟するに、文學、美術、音樂、舞踊、演劇に五大別することが出来るし、尙文學には詩歌、小説、戯曲の別があり、美術には、建築、彫刻、繪畫、裝飾の別があり、音樂には器樂、聲樂の別があり、随つて批評もこれに準じて夫々種々の差別を生ずるのである。但し、この對象による區別は批評の原理論としてはさ程重大な意味を持つて居ないから、單にこれだけに止めて詳述はしない。

〔六〕以下、上に分類した各種の批評について極めて簡単な説明を加へる。但し、目的よりの分類については改めて詳述する必要を認めないから省くこととする。蓋し、上に述べたゲーレー及びスコット氏の分類は甚だしく非論理的なものであつて一々批評する價值のないものである許りでなく、更に批評の目的は、單に文藝だけではなく凡てのものを通じて對象の眞價を明らかにすることと、更に進んで價值改造の動力を

附與することにあることは既に反覆説明した所だからであり、随つて、これ以外の目的は大抵件の主目的の一部分若しくはこれに對して副貳的地位に立つべきものだからである。

第二節 標準よりの分類

第一項 形式主義

美を以て形式的のものと解釋する（プレトリー、アリストートル、ホガース等の客觀的形式説、ヘルバルト、チムメルマン、リップス等の主觀的形式説）時には、自ら形式を標準として藝術品の批評を下すこととなるものである。而して形式主義藝術の典型は古典主義である。即ち、藝術品の形式のみを固定した標準に照して批判するため、内容の價值は勿論、形式に於ても嶄新な所は全く度外されて、既定の規則や方式や典據や模範やに適合するか否かのみを主眼とし随つて藝術の分化と深化とを、即ち進歩發達を阻害するに至るのである。十八世紀に於てポアローの「詩學」が藝術批評の聖

典であつたことはその最も顯著な例證である。そしてこれは畢竟するに超越批評であり、随つて寧ろ獨斷的没批判的判斷であるから、十分な意味で批評の目的、即ち「對象の價值改造」の任務を達することは出来ない。これ、藝術思潮が、クラシシズムの時期には必ず進歩が停滯すると共に、それからロマンテイシズムに移るのにつれて、内容主義に移る所以である。

第二項 内容主義

美を以て内容にありとする見解は、やがて批評論上内容主義を生ずる所以である。併し美が美を内容であるとしながら、いふ所の内容の解釋に依つて種々異つた見解を生ずる。即ち美を美のためのものと見る唯美主義、美は善のために存とする倫理主義、美の内容は快樂であるとする快樂主義、功利であるとする功利主義等種々の相違がある。尙これを他面から別つことが出来る。即ち理想主義と現實主義である。而して理想主義には抽象的と具象的との二つがある。ブレトリーや、シエリングや、シヨペンハウエルやゾルゲル等は前者に屬し、ヘーゲルやシユライエルマツヘルやカリエー

ルやシャスレルやハルトマン等は後者に屬する。

一 人生派

「藝術は人生のためだ」とか「人生のための藝術」とかいふことは、極めて明白なやうであるが、實は甚だしく不明瞭な言葉である。蓋し、凡そ一切の人間の營爲は人生を離れて存在することが出来ないものだからである。思ふに、人生派といふ言葉は、大凡二つの意味に用ゐられる。即ち、一つは最も高い意味で善を最高價值と見、美や眞をもこれに依つて統率し包括しようとするものと、一つは、美に對するものとしての善即ち實用功利等を價值標準として見るものとである。随つて批評論上の人生派も亦自ら功利派と狹義の人生派との二つに別れることとなる。

(甲)功利主義 批評論上の功利主義とは、藝術の使命は社會の進歩乃至人類の幸福に資益する所にあるといふ藝術觀を根據標準として、藝術の價值を批評しようとするものでマクス・ノルダウなどが其代表者である。即ち氏に従へば、藝術は社會全體のために役立つものでなくてはならないし、そしてそれがためには、社會一般の道德的標準

に適合したものでなくてはならない。随つて價值ある藝術は、畢竟するに、社會的であり、平民的であり、一般的であつて、單に主觀的貴族的特殊のものであつてはならない。蓋し斯くの如く藝術が通例の意味で道德的であつてのみ一般社會の病弊を矯めて、文明の正しい進歩と人間の高尚な幸福とをもたらし出すことが出来るからである。要するに、功利主義は藝術を以て勸善懲惡若しくは文明の進歩と人間の幸福の増進との方便であるといふ見地から、藝術の價值を批評しようとするものである。

(乙)人生派 狭義の人生派は、功利主義の道德的色調の一層強烈なものである。即ち寧ろ宗教的境域に入つた程調子の高い倫理觀を根柢とするものである。トルストイがその代表者である。即ちトルストイに従へば、嚴密な意味で藝術品と呼ばれるためには三つの條件が必要である。即ち(一)作者の題材に對する純真な無私な道德的態度(二)表白が明晰にして美的であること、(三)作者が描寫に對して誠實であること、即ち作者の題材に對する愛憎感を偽らざることである。そして、この三條件を貫くものは、「宗教意識から流れ出た感情」である。但し謂ふ所の宗教意識とは、或時代乃至社

會の統率力となり標的となる共通の人生觀である。随つて價值ある藝術品とは、畢竟するに件の人生觀を傳へる藝術である。斯かる見地からトルストイは現代の人生觀の基調を古代基督教の教養に見出し、基督教的藝術を以て一般的藝術とし、これを標準として創作をも批評をもなした。彼が、佛國自然主義及び耽美派の藝術を排して、ホーマーの「イリアッド」「オデッセイ」は勿論、ドイツケンスの「クリスマススカロール」等を以て最高の藝術とするに至つたのはこれがためである。

但し、最高義の人生派は、勿論その基調に於て倫理的であるが、必ずしも低級な意味の倫理道德に囚はれるものではなくて、寧ろ新道德の建設若しくは、最も廣汎なとして根柢的な意味に於ける人生そのものの價值を高めようとするもの、乃至人生そのものの意義を明らかにしようとするものである。随つて批評の究竟標準となるものは評家の價值意識即ち人生觀であり、その動力となるものは人格の力である。一言にすれば「人生の批評」「新人生の創造」を以て藝術の職能とするものである。たとへば、イブセンや、ショーヤ、ハウプトマンや、ロマン・ローランなどは皆この意味に於ける

人生派の藝術家である。

そして、この意味に於ける人生派の批評家は凡て理想主義者であり、且最も高い意味に於ける文明批評家であり、随つて又或る意味に於ける哲學者である。一言にすれば、一個の豫言者である。たとへばカアライルや、ニイチエの如きは其の大きな代表者である。尙この點に聯關して一言すべきは、藝術派に對する人生派といふよりも、寧ろ科學派に對する人生派乃至現實派に對する理想派といふやうな意味で人生派の批評家がある。たとへばブリュヌチエールの如きはそれである。

既に述べたやうに、凡そ何事でも人生を離れてあり得ないから「人生のための藝術」といつても、いふところの「人生のため」といふ所に特殊の意味がなくては、却つて藝術の特殊性を失つて低級的のものとなし寧ろ却つて「人生ののため」となることになるのである。否事實に於て、大抵の「人生派」は一般化と凡俗化と社會化とを主眼とする結果として、人生派の眞義を失つて低級な實生活や偏狹な宗教や道德の奴隸となつて單なる功利主義に墮するに至るのであることは、トルストイの例に徴して明らかなこと

である。随つて藝術乃至藝術批評の独自の價値を十分に保持し發揚するがためには、何處までも藝術乃至藝術批評の特色を發揮し、人生を複雑化し深化することに依つて、人生そのものの進歩に貢獻することを主眼としなくてはならない。要するに、低級な意味で「人生派」となることは、却つて藝術乃至藝術批評の價値即ち人生的價値を減殺する所以であることを、換言すれば、眞に「人生のため」の藝術批評をなさんがためには、寧ろ却つて最も高い意味で藝術主義に徹底すべきことを忘れてはならない。

二 藝術派

批評論上の藝術派とは、「美のための美」といふとを主眼とする藝術觀を根柢とし藝術の價値を藝術其れ自身の目的から批評しようとする批評主義でマシユウ・アーノルドや、ジョン・ラスキンやウォルター・ペーターやオスカ・ワイルドやアナトール・フランスなどが其の代表者である。而して美乃至藝術の本質は感情乃至官能の方面にあるものであるから、理知の判斷を主とするものではなくて、寧ろ鑑賞印象乃至享樂を主とするやうになるのである。そして藝術派に屬するものは大抵な場合通例な意味に於け

る道徳主義ではない。但し、或る意味即ち感情を中心とするといふ意味に於ては理想主義ではあり得る。即ちロマンティックではあり得る。併しながら大抵な藝術派はリズムでありナチュラリズムである。即ち、本能官能乃至感情の自由奔放といふことを最も重大視し、随つて意志の規正といふことを排する。刹那的な「印象」や、超意志的な「觀照」や、「享樂」やが所謂藝術派文藝の特色となるのは蓋しこれがために他ならない。

(甲)唯美主義 批評論上の唯美主義とは、美は美そのものために存在するものであり、そして美は最高價值であるといふ藝術至上主義の立場に立つばかりでなく、更に、批評そのものを以て創作と同様「美の嘆賞」であると共に「美の創造」であるといふ徹底した批評主義であつて、オスカール・ワイルドが其の代表者である。實にワイルドの批評論は、批評の對象たる藝術品を特殊の意味で「神」と見、偏にその價值を味解し鑑賞し且嘆美しようとするものである。

(乙)快樂主義 批評論上の快樂主義とは、藝術の本質を以て感覺的のものといふ、

随つて感覺的欲求を満足せしめる質量の多寡即ち快樂の多寡を以て藝術批評の標準とするものであつて、ウォルター・ペーターが其の代表者である。そして斯くの如く、快感を主とする時には、勢ひ印象主義となるものである。蓋し、藝術的價值は、理知に依つて判斷されるものではなくて、感覺的印象に依つてのみ判斷されるものだからである。ペーターがその『文藝復興期』の序文中に「詩人若くは畫家の價值を感知し、それを切離し、それを表明することは批評家の正に履ひべき三階段である」とか、或は「批評家は一種の氣質即ち美的對象に遭遇して深く感動する能力を持つとが肝要である」とか、更に「實際にありのままの對象を見るといふことは凡ての眞正な批評の目的であるといはれるのは正しい見解である。美的批評に於て實際にありのままの對象を見るといふことは實際ありのままの印象を知り、それを明かに識別し感得するといふことである」といつて居ることに依つて、彼の立脚地が印象主義であることを明らかにすることが出来る。

第三節 方法よりの分類

第一項 演繹批評

作品乃至作家に對して直ちに價値の判斷を下す批評は、演繹的批評又は判斷的批評の名を以て呼ばれる。而してこの批評は批評家が自分自らを作家よりも一層高い地位に置いて、恰も判官が一定の條文に照して判決を下すやうな具合に高飛車な傲慢な斷言的^{ゴツカレ}な態度で下すものである。たとへばジエツファレーといふイギリスの批評家の『フーズワース論』はこの種批評の代表的なものである。

第二項 歸納批評（附科學批評）

歸納批評は、論理學上の歸納的方法即ち總合法に據る批評法で、事實の蒐集や排列を主眼とし、なるべく價値の判定を避けようとする批評法である。フランスのテーヌ（境遇、時代、人種を以て批評の標準となす）とか、イギリスのセンツベリー、ムールトンとかいふやうな批評家の批評は、この種類に屬するものである。尙これに左の

二つある。

- (一) 對象たる作品と始終するもので、其の目的は、單に作品を仔細に檢覈し、秩序正しくその内容を記述することにあつて、決して價値の判定を下さないものである。たとへばムールトンの『戯曲家としてのシェイクスピア』(Shakespeare as a Dramatic Artist)はこの種批評の代表である。即ちムールトンは、科學は(一)題材の觀察(二)其の分析分類(三)系統組織の三段を経るものであるのに、現今の批評は第二段即ち歸納批評であるとし、更に歸納批評の公理として左の四つを擧げて居る。即ち(一)文學上の解釋は、科學上の臆説の性質を有し、その解釋が作品の細微の點迄十分に説明し得るか否かによつて眞偽を決すること(二)批評の機能は文學上の種類を識別すること(三)藝術は自然の一部であるから他の自然物のやうに科學的に取扱ひ得ること(四)文學は發展するものであることである。氏のシェイクスピア論は全くこの見地から批評されたのである。
- (二) 對象たる作品の眞相を明らかにするに單にこの作品だけに没頭することをしな

いで、廣くこれをその環境と聯關させて研究攷覈する方法で、その目的は主として、その作物を、その時代の他の作物と比較して如何なる位置に置かるべきかを明らかにするにある。テームやサント・ブープ等の採つた態度はこれである。そしてこれは所謂「科學批評」である。

即ち藝術を以て科學と見る結果、其の價値を批評するにも、これを數種の要素に分解し歸納的方法に依るものである。但しブープは藝術の價値を批評するに當つて、印象を重視する點に於ては印象主義に屬し、作者の人格、狀態、遺傳境遇生活等を攷覈することを主として所謂「環境」重視説を主張した點に於ては、或意味で歴史主義といふことも出来るが、その方法の緻密な點に於て歸納法を用ゐる點に於て、乃至は「文學史及び批評に於ては、ペーコンの徒弟たることが今日の急務である」と主張する點に於て、彼自身が「自然主義的批評」と呼んだやうに、たしかに科學主義である。

テームはブープの還境重視説を根源として嚴密な意味で科學批評を主張するに至つた。即ちテームはブープに一步を進めて、藝術を以て一個の純粹科學と見なし、隨つて純粹の科學的立場から藝術に對したのである。詳しくは、彼に従へば、藝術の要素は三つである。即ち境遇、時代、人種である。隨つて藝術の批評も亦この三點から見なくてはならない。

尙この科學批評の立場を取るものにはさきにアンネカンがあり、近くはブランデスがあり、ブリユヌチエールがある。中でもブリユヌチエールは、(一) 批判 (二) 分類 (三) 説明を以て批評の全體であるとして居る。

第三項 比較批評

作品を解剖して各種の構成要素に分析し、其の特質を抽出し、それを他の作品と比較して他の種類との異同を別ち、斯くして作品独自の價値を明らかにすると共に、作家の個性を明らかにするのが比較批評である。ド・スタエル夫人、シャトーブリアン、テーム、マシユー・アーノルド等の力説する所である。而して、いふ所の比較は、單に種類の比較ではなくして價値の比較であるから、この批評をするに際して注意すべきことは、異常の特質を以て直ちに價值的に卓越するものと思はないことである。隨つて單に種類の

比較のみに満足しないで、これを終ると共に更に價値の比較に進まなくてはならない。この意味に於て、この批評は價値判断に到らぬ限りは不十分であるといふまでもない。尙注意すべきことは、比較の範圍を出来るだけ廣汎にするのである。蓋し、比較の範圍が廣汎であればある程精密になり、随つて其の價値的特質が明白になるからである。

第四項 歴史批評

作品の特質乃至意味及び價値を十分に理解するために、その作品を生み出せる作者の生活(個人として、國民として乃至社會の一員としての)の背景、即ち其の社會と時代との特質を明らかにする批評法が歴史的批評法である。換言すれば歴史的批評法とは其の時代の文學界は勿論、一般社會の主潮即ち理想興味思想の特色を歴史的に明らかにし、所謂時代を解することによつて其の作品の特質と價値とを明らかにする批評法である。實に如何程卓越した天才も、其の時代と環境の感化影響を脱することは出来ない。随つて如何程卓越した作品と雖も、時代と環境との感化影響を脱することは出来ない。即ち作品の内容を形成する思想感情にしても、其の形式を組織する言語文字

文章にしても、凡て皆時代と環境の反映でないものはないのである。カーライル、テ
ーヌ等が其の代表者である。

第五項 解釋(説明)批評

作品に現はれた意味を解釋して客觀的に表明しようとするのが、解釋批評である。即ち、一般人には一見して理解することの出来ない作品の精神や作者の主眼點などを解剖して、其のかくれた本當の價値乃至本當の生命を闡明しようとするものである。随つて、この批評は、批評家の獨斷私見によるべきではなくて、作品其のものに對する周匝なる觀察と、深刻なる洞見と、精到なる批判とによつて、作品そのものの本具する意味と價値とを的確に表明すればよいのである。換言すれば、公平にして而かも同情ある心胸と、嚴正にして而かも寛大なる態度とによつて、かかれたる價値を闡明し、作者の志を助長しなくてはならない。斯くして、批評は單なる解釋のための解釋に止まらず、對象の解釋を通じて其處に獨自の創造と改造の營みとを全うすることが出来るのである。

第六項 印象批評

批評家が作品から受けた感じ心持即ち直覺直感を、その受けたままに、即ち何等の客觀的乃至永續的標準に照すことも、又は理化論理化することもなしに表白する批評が印象批評である、一言にすれば、直覺的批評であり主觀的批評である、ジュール・ル・メートル、アナトール・フランス、サント・ブーブ、マシユール・アールド氏等が其の代表者である。随つてこの批評は、演繹判斷のやうな客觀的標準に盲従するといふ意味の「獨斷」に陥るおそれがなく、又批評家自身の直覺直感をありのままに表白するから極めて自由大膽であると共に、正直端的であり、随つて又批評家の個性が最も明白に批評の上に表はれるものである。それだけ批評家其の人が老練な人であり、精確な理解と深邃な洞察と精練されたそして廣汎な趣味とを持つた人であるならば、其の批評は深刻に徹底し且潑瀾たるもの、即ち鮮やかな個性といき／＼した具象性とを具へたものとなるのであるが、これに反して若しも其の批評家が未熟偏狹な人即ち價值意識の低劣狭少な人であつたり、或は當初から何等かの先入見を懷抱して居たりするならば

其の批評は曲解獨斷一面觀に墮するのでなければ、客觀的には根據理由の不明な過褒過貶に陥り、客觀的妥當性の少い非論理的主觀的非統一的放縱的のものとなつてしまふのである。要するに、印象批評は、理知作用や規範やを俟たぬために、直截となり大膽となり自由となる長所はあるが、これに伴つて極端と偏見とに墮する癖があり、随つて批評の職能たる對象の價值改造は勿論、正しき理解さへも出來ないこととなりがちである。

第七項 鑑賞批評

公平な態度と好意と同情とに富める心胸とで、即ち肯定的な態度と心胸とで作品に對し、其の缺點を指摘し且これを非難することを辭しはしないが、而かも出來るだけ精確にその長所を理解し、出來だけ十分にこれを發揚することに力を注ぐ批評が鑑賞批評である。換言すれば、鑑賞批評とは自己の偏見に囚はれることなく、個々の作品の異つた長所美點を鑑別し味識し肯定し助成して、あらゆる個々の作品の中に多少を問はず夫々の價值を見出し其れを主眼として作品其のものの價值を肯定する批評

を指すのである。斯くの如く、この批評は、批評家自身は独自の價值標準を持ち乍ら而かもこれを暫らく胸奥に裏んで、第一に先づ作品それ自身の有する長所美點を發見し、且其の缺點を非難するにしても、批評者の有する主觀的な標準のみによるのではなくて、作品乃至作者其れ自身の價值標準によるのであるから、その主眼點に於ては對象の價值の改造を究竟目的とする批評の本旨に最も恰適するものであるといはなくてはならない。カーライルが「批評家は先づ詩人の目ざす所が何であるか、詩人の爲すべき業が如何にしてその眼前に現はれて來たか、詩人は自家の手段を用ゐて如何程迄その業を成就し得たかを知らなくてはならない」(『ゲーテ論』)といつたのも、或はシモンズが「藝術の第一目的は事物をあるが儘に表現することである。……隨つてこの世界を想像の文學と化成する作者の眼と心との特質を精確に識別するのは批評家の第一要務である」(『散文及び詩歌の研究』)といつたのも、等しくこの點を明らかにしたものである。

鑑賞批評家の最大代表者はマシュー・アーノルドである。彼は「詩は人生の批評なり」

といふことを題句としたことに依ても明らかであるやうに、或る意味の人生本位の藝術觀に従ふものであるが、而かもいふ所の「人生」とは決して低い意味の「實人生」ではなくて、寧ろ藝術至上主義の見地に立つものであることは、批評の態度として「没利害」^{ディインタレス}を力説して、即ち實用的見解を排し、心の自由な遊戯を以て批評たらしめんとし「この世に於て知られ且考へられた最善のものを明らかにし且傳へようとする没利害的努力である」といふに至つたことに徴して明らかである。ジョン・ラスキンの批評の立場も亦見様に依つては一種の鑑賞批評であるといはなくてはならない。勿論彼の見地には自然讚美の情操が遍滿して、ボサンケの所謂ロマンティック、ナチュラリズム乃至神の自然主義とも稱すべきものであるが、而かも「如何にすれば最もよく自然の意味を透徹し得べきかといふこと以外には何事をも考へることなく自然と共に勞作しなくてはならない。自然の中の何ものをも拒否することなく、又何物をも排斥してはならない」といふ點はたしかに一種の鑑賞主義の見地に立つものである。

斯くの如く鑑賞批評は、作品の價值を出来るだけ十分に味解し闡明しようとするこ

とを主眼とするものであるから、一面に於ては主観の發動を抑へて公平に客観的になるといふことが出来ると共に、他面に於ては、批評者の主観が消極的になるために作品乃至作家の表面的特色は大抵遺漏なく解釋し闡明することが出来ても、對象に主観の要求なり價值意識なりを移入せしめて一見不明な内奥の本質的價值を把握するとか或はそれに即して独自の價值改造價值創造を營むかといふやうな批評の最高職能を貫徹することが出来ないといふやうな缺點も伴ふものである。否若しも前者が極端に走る時には、對象を悉く價值あるものとして是認するばかりか、更に甚だしきに至つては、批評家自身の感情によつて對象の缺陷を補足し斯くしてそれが對象自身の本質的價值であるとさへするやうな感情的誤謬に陥るのである。而してこれはいふまでもなく極端な印象批評に極めて多く見ることの出来る所謂「過オウアー・エス・テイ・メイ・ションイション」メンダリスムであり、批評上の感傷センテイ主義であつて嚴密な意味に於ける批評ではない。蓋し嚴密な意味に於ける批評は、對象其のものの價值を精確に判断すべきはいふまでもなく、更に、對象を批評の對象として價值あるものとして他より選定し採用するためには、既に一度批評の段階を通

過すべきものだからである。これ、批評が客観的論理的知的といふことを條件としながら、純正科學と趣を異にする所以である。

斯くの如く見る時は、鑑賞批評は、對象の表面上の長所を理解するには極めて都合な批評であり、随つて對象が藝術的に價值があるか否かを判断することが出来ても其の價值の本質を徹底的に闡明し判断することは出来ない。随つて又鑑賞批評は、批評の發足點となることは出来ても其の到達點ではあり得ない。即ち嚴密な最後の價值判断を下す上に大體の方針を暗示し前提としての個々の資料を提供する所に鑑賞批評の價值が存在するのである。随つてこの批評を全からしむるには、理論的批評即ち解釋批評比較批評歴史批評等の助力を俟たなくてはならない。否只に其ればかりでなく、これらの諸種の方法によつて知解し味解し得たものを、客観的に即ち論理的に表白しなくてはならない。蓋し、批評は客観的妥當性を有すべきものであると共に、改造力でなくてはならないからである。即ち「評價」をして「説明」に至らしめることが必要だからである。

第四節 藝術批評の意義

藝術批評は、一言にすれば其の對象は美乃至美的價值體であり、其の方法は最も十分な意味に於ける鑑賞法である所に特殊の意義がある。而していふ所の美は、主として感情作用の規範であるから、他の理知の規範たる真及び意志の規範たる善と同一の價值を持つて居るものであつて、何れの一を以ても他を犠牲にすることの出来ない性質のものである。この意味に於て、「藝術のための藝術」乃至「美のための美」といふことは、「人生のための藝術」乃至「人生のための美」といふことに比して、一層意味ある内容を持つた言葉である。併しながら、いふ所の「藝術」乃至「美」といふことを以て最高價值と見る時には、この言葉は容易に肯定することの出来ないものとなる。蓋し、美の美たる價值は、それが人生最高の價值であることにあるのではなくて、寧ろ最高の價值の一要素であり、一面たる所に存するからである。尙これと共に藝術の價值は單に實質のみにあるのではなくて、その形式にもあることを忘れてはならない。こ

の意味に於て、私は所謂藝術上の功利主義を排すると共に、所謂唯美主義をも排して十分な意味での人生派に賛するものであり、更に、所謂形式主義にも所謂實質主義にも偏することを排するものである。即ち、私は藝術的價值を以て形式と實質とを併せ兼ねた、そして一個獨立なものと見ると共に、最高のものと見ると排するものである。而して、斯くの如く藝術的價值を一個獨立なものと見る時には、藝術批評に於ても、独自の目的と方法とを備へなくてはならないと共に、これを最高のものと見ない結果藝術批評に於ても、其の他の批評と共通な目的と方法とを備へなくてはならない。即ち藝術批評の目的は、一般の批評と同様に、對象の價值の改造にある。詳しくは、單に對象の價值を精密に觀察し正しく解釋判断しただけではなくて、更に、その長所と短所及びその原因根據を明らかにし、且長所を助長し短所を補匡する方途を暗示し指摘することによつて、對象の所有する價值に何等か改造の動力を與ふることになくてはならない。但し、いふ所の價值は、既にいつたやうに知的價值的價值と趣を異にするものであるから、その方法は哲學批評のやうに、論理的分析的に偏した

り、倫理批評のやうに、無上命法に執したりしてはならない。随つて上に述べた諸種の方法は、凡て採用すべきものであるが、その対象の性質が情的のものであると共に、單に主觀的の價值だけでなく、客觀的の價值をも持つべきものであるから、一面に於ては、主觀批評即ち印象批評でなくてはならないと共に、他面に於ては批評は何等かの意味で判断であるから、客觀的批評即ち判断的知的批評でなくてはならない。即ちこの兩面を具へた鑑賞批評を中心として、其の他の方法を參照し幫助とすべきものである。尙この點に關して一言注意すべきは、藝術的價值は形式と實質との調和といふことが一つの要素を成すものであるから、形式的價值をも十分に評價することが出来るやうでなくてはならないといふことである。

更に別言すれば、藝術の批評に於ては、究極の標準を最も高い意味に於ける「人生」に置くと共に直接の標準を藝術的價值即ち「美」に置いて対象に蒞み、随つて單に其の内容の倫理的價值乃至思想的價值のみを抽象的に批判するだけで満足しないで、その内容が如何なる形式によつて表白され具現されたかをも批判しなくてはならない。而

して、其の内容の價值を正しく批判するがためには、一定の客觀的標準に照して其れを分析し、その長短を明らかにすると共に、縦にはその歴史的價值を見、横には他との比較によらなくてはならない。更に形式の價值を正しく批判せんがためには、これまた客觀的標準に照して其の作品の形式（たとへば小説ならば、用語文章題材の選び方、構想、主觀の位置等）を精密に吟味しなくてはならない。最後に（時間的には最も前から最も後まで一貫するもの）、対象全體の價值を批判せんがためには、全體としての作品が自己に與へた直接の印象を尊重すると共に、周到な鑑賞法に依つて味到し得たその價值を以て中心價值としなくてはならない。斯くの如くする時は、評價の主動力たる批評者自身の鑑賞力を没却して索漠にして生氣のない客觀的批評に墮することを免れると共に、根柢を缺くとして一般的價值の少い單なる主觀的感想の表白に陥ることを免れることが出来るのである。

最後に、批評の究極標準を最も高い意味に於ける「人生」に置くといふことは即ち批評家の價值意識の統一點即ち人生觀を以て批評の究極標準とするといふことである。

而していふ所の人生觀とは、人間の最深要求乃至理想を根柢とするものであるから、藝術批評はやがて生活改造の営みである。随つて有效な批評は、單に藝術に對する理解力や觀照力があるだけで出来るものではなくて、これ以上更に卓越した價值觀即ち人生觀と眞摯強烈な生活改造の意志とがなくてはならない。此の意味に於て藝術批評家はやがて自己批評家であると共に人生批評家でなくてはならない。即ち、一面に於ては斷えず自己の要求そのものの價值意識そのものを批評することに依つて自己の價值を改造すると共に、件の自己改造に即し、藝術の中にあらはれた人生を批評することに依つて、間接に實人生の價值改造即ち進歩に貢獻するものでなくてはならない。随つて、藝術批評を以て閑事業の如く思ふものには、到底其の眞價は理解されないと共に、其の眞職能は發揮されないのである。

この點から見る時は、藝術批評の原理標準乃至方法を一定不變のものとして客觀的に存在するものと見る客觀主義も、これを以て全然主觀的のものであり随つて不定のものであると見る主觀主義も、等しく不完全な見解である。蓋し、眞理はこの中間に

あるからである。換言すれば、この二つは何れも批評の原理標準乃至方法を以て與へられるもの(客觀的と主觀的の差異はあるが)と見る點に於て同一であるのに、嚴密にいへば、これらは單に與へられるものではなくて、寧ろ斷えず改造して行くべき主觀的にして客觀的なそして動的なものだからである。この意味に於て、藝術批評は單に論理的主知的であつてもならないと共に、單に象的(感覺的感情的)であつてもならない。即ち、一面に於ては、何處までも自己主觀の美的價值と意識の直覺に聽順すると共に、他方に於ては、出来るだけ一般的妥當性のある美的標準に照して主觀的美意識其のものの本質を改造し助長すると共に、客觀的標準其のものの分化と具象化即ち成長發達に貢獻しなくてはならない。

事實に於て近代の藝術批評はその形式に於て全體的統一的となり、その方法に於て歸納的になつて來て居る。即ち舊批評は其の標準が客觀的固定的乃至先天的にあるものとする、のに對して、近代批評は價值の標準は一面に於て客觀的でありとしながら而かも其の根本性質は主觀的のものでありとし、更に其れを以てセンチペリーの所謂先

天的ではなくて寧ろ後天的アポステリックのもの即ち與へられるものではなくて創造して行く將成的のものであり、随つて固定的のものではなくて進歩的のものであるから、その方法に於ても自ら演繹的ではなくて歸納的となるのである。一言にすれば、作品の鑑賞から入つてその價值を客觀化し、歸納から入つて演繹に達し、對象の味解から知解を経て更にその超越即ち改造に到るのが近代批評の特色である。これを要するに、藝術に於て價值改造乃至助長を主眼として随つて、即ち固定したそして偏狹な死標準のみを以てせず、寛宏な温い親切な心を以て對象にのぞみ且自己のいつはりなき印象感銘を重大視し、其の缺陷や弱點は出来るだけ深刻に嚴密に指摘し非難するが、それは單に指摘や非難のため指摘や非難ではなくて、實は對象の改造のための必然やむなき手段としての指摘や非難であり、随つて又其の長所強點に對してはあらゆる方法を以て縱横表裏各方面より出来るだけ十分にこれを鑑賞し肯定し、更にそれに對して出来るだけ十分な改造を與へようとするのが近代藝術批評の特色である。

實に、藝術批評を以て自己批評であり、人生批評であると信ずるものは、藝術に對

する態度に於ても他の一部の生活態度と同様に眞摯であり熱烈である。即ち、一切を自己の最深要求、乃至最高價值を標準とし、批評を以て所謂「自己の魂の記録」でありと見、随つて既定の死形式や死標準に盲從して冷やかに他人の作物を分析しただけで満足することが出来ないと共に利、那刹那の出來心や印象のみを標準とはしないで自己の價值標準そのものを益客觀的妥當性あるものたらしめ、更に、既定の標準に改造に加へることに依つて藝術批評を進歩せしめ、随つて藝術そのものをも進歩せしめるやうにせずには居られないのである。要するに、藝術批評に於ても、其の精髓は一般の批評と同様に、「自己批評」を根柢とし「價值の改造」を目的とするものに他ならない。この意味に於て、「批評家の人格が他人の作物の解釋に強く入り込めば入り込む程その解釋は益々眞實なものとなり、愈々充實したものとなり、随つて一層人に迫る力を得て來る」といふオスカー・ワイルドの言は、洵に肯綮に價するものである。随つてまた、批評家の價值はやがて批評家の人生觀乃至價值觀であり、更に、批評家其の人の人格の價值である。

後編餘論

第一章 批評上の注意

批評をして價值あるもの即ち精確にして妥當なもの、乃至客觀的普遍的必然的なものとせしめるためには、積極的には、批評の目的意味及び價值を理解して、十分にこれに適合するやうな方法に従ふと共に、消極的には、批評の價值を阻害するやうな各種の原因を明らかにし、且これを排除するやうにしないでならぬ。而して前者については、既に其の輪廓を明らかにしたから、本章に於ては、後者即ち誤謬批評乃至似而非批評に陥ることを避けるために要する注意心得乃至方法について略言しようと思ふ。

さて、批評をして不精確不妥當ならしめるものは、(一) 價值標準乃至價值意識(批評的精神)の本質に缺陷があること、(二) 價值意識の發動即ち所謂批評的精神の發動に缺陷があること、(三) 價值判斷若しくは價值改造の方法乃至形式に缺陷があることである。

ある。別言すれば批評乃至批評家其のものの内容上の缺陷と、批評の方法乃至形式上の缺陷とが批評をして不十分なものとならしめるのである。随つて、批評をして精確妥當ならしめるためにはこれらの缺陷から免れればよいのである。

第一に、價值標準乃至價值意識の本質性を缺陷なきものとするには、批評家の懐抱する最深要求即ち理想を出来るだけ客觀的妥當性の豊富なものとする外はない。換言すれば批評家自身の人格を高大にするより外はない。而してこれは單なる『批評論』の範圍以外以上の大問題であり、よくとも寧ろ次章の『批評家論』の範圍に屬すべきものであるから茲には述べない。

第二に、價值意識乃至批評的精神の發動を缺陷なきものとするには、批評の本當の目的を阻害するやうな分子、たとへば偏頗な好惡の先入見とか、先入感情とか、悪意とか、傲慢自惚の感情とか、過度の感激、焦燥な情態とかいふものを抑制排除して、正しい意味で公明嚴正になり、冷靜緻密になり、親切にならなければならぬ。但しこれは、前項同様次章の『批評家論』に於て詳述するつもりであるから茲にはいはない。

然らば第三に、價值判斷若しくは價值改造の方法形式をして缺陷なきものとせしめるには、如何なる注意心得が必要であらうか。これに對して答解を與へるのが本章の主眼である。但し各種の批評に關する特殊の點に於ては、既に中編に於て一通り述べて置いたから、茲では只あらゆる批評の中心骨子となる論理批評を行ふ上に注意すべき點だけを略述することとする。

さて嚴密に「批評」といふ時には、その形式に於ては、判斷は判斷であるけれども、直接判斷ではなくて寧ろ間接判斷即ち推理若しくは推論であることは既に論じた所である。随つて批評をして精確妥當ならしめるためには、判斷の一般法則に適合すると共に、推理の一般法則にも適合することが必要である。而して判斷をして精確妥當ならしめんがためには、先づ判斷を構成する概念をして客觀的普遍的價值を得しめなくてはならない。

第一に、概念をして客觀的普遍的價值ならしめるためには左の諸點に注意することが必要である。

(一)概念は相合的 (Congruent) でなくてはならない。即ち概念はその内包に於ても外延に於ても、一概念内の要素としては矛盾反對がなく互に適合調和するものでなくてはならない。

(二)概念は適當 (Adequate) でなくてはならない。即ち前項に述べたやうに内包も外延も其の内に矛盾反對したものを包含しないことはいふまでもないが、更にそれ以上に一概念として包含すべきものだけを精確に包含し、包含すべからざるものを聊かも包含しないといふことである。若しも内包を除りに詳細にする時には外延は當然に狭くなつて包含すべきものをも包含し得ないこととなるし、これに反して、外延を除りに廣汎にする時には内包は當然に狭くなつて包含すべきものをも包含し得ないことになることもある。そして適當な概念は「明瞭な概念」といふし、概念をして明瞭ならしめるものは定義である。

(三)概念は精密 (Accurate) でなくてはならない。即ち概念が單に他の概念から明瞭に區別される許りでなく、其の概念を構成する要素が出来るだけ精密に理解されなく

てはならない。そして精密な概念は「ディステインクト判然たる概念」といふし、概念をして判然たらしめるものは分析である。

第二に、判断をして精確妥當即ち客観的普遍的ならしめるためには左の諸點に注意することが必要である。

(一)判断を構成する概念が常に真なる概念でなくてはならない。

(二)判断の主位と賓位とは相合的でなくてはならない。(例へば猫と虎とは或る共通點を有するが故に「猫は虎なり」とする判断は、その共通性とせるものが猫と虎との本質的性質でない點に於て誤謬である。)

(三)判断の質が肯定的であるか否定的であるかを明らかにすることが必要である。而して肯定と否定とを問はず、其の判断の立脚點主眼點乃至標準を明らかにしなくてはならない。蓋し同一事實でもその立脚點主眼點乃至標準の異なるに従つて肯定判断とも否定判断ともなるからである。更に肯定的判断なる時には、其れは同一的即ち全部の一致(全稱肯定或は外延と外延との一致、内包と内包との一致)であるか、或は部分

的の一致(特稱肯定或は外延と内包との一致)であるかを明らかにしなくてはならないし、否定的判断である時には、對象の破壊(カントの所謂「不定的判断」で、或る知識が破壊されて未だ次の知識が確定しない否定と肯定との中間的懷疑的狀態)に止るか、或は肯定的否定(即ち前者に一步を進めて一對象を否定することが他の對象を肯定することとなるもの)であるかを明らかにすることが必要である。

(四)選言的判断に於ては選言肢が真に選言的であるか、或は單に外觀上のもので實際は交叉的でないものではないか否かを明らかにしなくてはならない。即ち選言肢はAと非Aとの關係であつて中間を許さないもの、換言すれば程度の差異でなくて性質の差異でなくてはならない。

(五)假言的判断に於ては、前件と後件との關係が果して理由と歸決との關係を有するか否かを定めなくてはならない。蓋し前件は後件の真理を必然的に含むこともあれば、或は部分的に含むこともあれば、或は又兩者は補足的關係にあることもあるからである。

(六)必然、實然、蓋然の度を明らかにしなくてはならない。蓋し蓋然のものには單に想像に過ぎない場合もあれば或は幾分理由もある場合もあるが一般には實然となる事に依つて一層其の價值を増すのである。即ち學問的知識の理想なる必然的(隨つて普遍的)判断に近づくやうになるのである。これと同様に實然のものは論證によつて始めて必然となるものであつて、論證されない限りは實然的判断は偶然のものであるか否かがわからない。要するに、判断は必然的(普遍的)になつてのみ始めて客觀的妥當性を有するものであるが、それがためには先づ實然のものを根據とすべきものであり、更に、實然的ならんがためには先づ蓋然的でなくてはならない。

第三に、推理をして客觀的妥當性を得しめるためには、所謂似而非推論誤謬推論(Fallacy or paralipsis)乃至虚偽に陥らぬやうにしておくてはならない。而して似而非推論乃至虚偽には三種の區別がある。即ち其の一は形式上のもので、各種の推理法の規則を守らないことから起るもので「純粹論理的虚偽」といふものである。たとへば四語を用ゐるとか、不周延な中概念を用ゐるとか、前提に於て周延されない大小語を結論に

於て不當に周延せしめるとか、或は、假言的推理法に於て前件を否定し又は後件を肯定して結論を出すとか、或は兩前提否定又は兩前提特稱であつて結論を出す如きは皆この虚偽乃至誤謬である。其の二は、言語の使用に伴ふ虚偽乃至誤謬であつて「言語的」若しくは「半論理的虚偽」と呼ばれる。其の三は、材料乃至内容上のもので「反論理的」又は「資料的虚偽」と呼ばれる。但し第一のものは特に改めて論述する必要を認めないから茲にはこれを省く。

(甲)言語上の虚偽。

(一)一語多義の虚偽(The Fallacy of equivocation)これは多義の語を用ふる事から起る虚偽で、形式的虚偽中の「四語の虚偽」乃至四語以上の虚偽に當るものである。而してこの虚偽は殊に價值判断(就中行爲の道德的判断)に多く見出される。尙これには中概念に關するものと大小概念に關するものとの別、語に關するものと句(一句多義)the fallacy of ambiguity)に關するものとの別の他に左の區別がある。

(1)偶然性乃至轉義語の虚偽(The fallacy of accident)一語多義及び合成の虚偽は、

同一語によつて表はされたものが、或時は個々のものとして用ゐられ、或時は合成的のものとして用ゐられて居るのを混同するために生ずる虚偽であるが、同一の語によつて表はされた同一の事物が異なる事情の下に用ゐられて意義が異つてゐるのを顧みないために、即ち取扱ふ資料が本質的ではなく偶然的特殊的性質であるために、形式は正しくとも結論の正しくなくなるやうな虚偽である。尙これには(イ)一般についていつた語を特殊の事情について用ゐるもの(ロツツエの所謂「學者の弊」)、(ロ)特殊の事情について言つた語を一般の事情について用ゐるもの(ロツツエの所謂「偏狹精神の表明」)、(ハ)特別の事情について言つた語を更に別な特殊の事情について用ゐるものとの別がある。(これは純然たる「四語の虚偽」である。)

(2) 他義語の虚偽轉義語の虚偽は、同一の語が同一の意義を有しながら其の用ゐられた關係から其の意義に増減變化を來したために虚偽となつたものであるが、これは同一の形を有しながら其の言ひ現はす所が全く別であるために虚偽となるものである。

(3) 不備語の虚偽(The Fallacy of amphibology)轉義語の虚偽中に用ゐられた語は

本來同一のものであるけれども、其の用ゐられた事情が異なるために其の意義も異り、随つて事實上四語となつたものであるが、これは本來其の意義が異り、随つて其の形も異なるべき筈のものが、言ひ現し方の不完全なために同一の形を有する語である。即ちこれまた形式に於ては三語であるけれども、意義の上から見る時には三語以上となるのである。尙これには中概念に關するものと、大概念に關するものとの區別がある。

(一) 合成の虚偽(The fallacy of composition)これは言語を集合的に取ると周延的即ち普遍的に取るとの差別を明らかにしないために起るもので、即ち個々の場合に真理なものを全體として取る場合に虚偽となることを意味する。

(二) 分釋の虚偽(The fallacy of division)これは前者とは反對に集合的に取る場合に真であるものを其の部分にも真であると周延的に見るために起る虚偽である。

(三) 音調乃至語調の虚偽(The fallacy of accent)一語或は一句の上に特に高い調子を與へて全體の價值を忽視することに依つて起る虚偽である。

(四) 比喩の虚偽(The fallacy of figure of speech)比喩的に用ゐたものを其のまゝ真理

とする虚偽である。即ち形容詞的真理を直ちに論理的本質的真理とするために生ずる虚偽である。

(六)不適中の虚偽 (Irrelevant conclusion) これは一般に論點に適中せざる推理である即ち自己の論據薄弱なるにも係らず、對者の議論を破らんとして枝葉の論據を用ゐるために生ずる虚偽である。尙これには左の數種を數へることが出来る。

(イ)論旨の如何に係らず、其の提言者の人格性行乃至職業の信ずべからざることを根據として、其の所論も信ずべからずとするもの、乃至其れと正反對の論證法で Argumentum ad hominem. と呼ばれる。

(ロ)正當な論理に依らずに對者乃至公衆の感情或は偏見に訴へて自分の結論を正當と認めしめるもの、即ち The fallacy of appealing to the emotion と呼ばれるもので論點變更の虚偽の一種である。

(ハ)論敵が議論の眞偽を判定する力のないのに乗じて自分の結論を正當と認めしめるもので Argumentum ad ignorantiam と呼ばれる。

(ニ)正當な論理に依らずに孔子の言なりとか釋迦の教へだとか或はバイブルの語だとかいふやうに對者が其の言語や議論を使用した人の人格に對して有する尊敬の情に訴へてその正しきことを認めしめるもので Argumentum ad verecundiam と呼ばれる。

(ホ)正當な論理に依らずに、只威力に依つて結論を正しと認めしめるもので Argumentum ad baculum と呼ばれる。

(ヘ)多數人の感情を煽動し、其の正當な判断力を失はしめて、自己の所説を容認せしめること、乃至多數人の同情心憐愍心などに訴へて論證の弱點を蔽はうとする如きために生ずる虚偽で Argumentum ad populum と呼ばれる。

(七)歸結の虚偽 (The fallacy of consequent) 前提より正當に出て來ない斷案を下すこと、即ち、前提に於て言及ばないことを斷案に於て言表はして結論を出すために生ずる虚偽にて、或は(論證不足の虚偽) (Non sequitur) ともいふのである。

(八)誤謬原因の虚偽 (The fallacy of false cause) これは眞の原因でないものを原因とするために生ずる虚偽である。換言すれば、偶然の同時或は單なる繼續的の前後關係

を以て直ちに因果關係とする虚偽である。

(九)多疑問の虚偽(The fallacy of many or complex questions) 二個以上の性質の異つた意義を有する發問を單一の發問の如くにして問ひ、これに對して可否の返答を求め其の返答を捕へて結論を下すために生ずる虚偽である。即ち「揚足取り」或は「あらさがし」の議論がこれである。

(一〇)論點忘却乃至變更の虚偽(The fallacy of shifting the point at issue) これは所謂「お門違ひの論法」ともいふべきもので、ツェノーンの「アキリスと龜」の論の如きは其の一例である。即ち或ることを論證すべき場合に自己の立論の根據が薄弱なために、論點以外の別事を論證して同一の結果を得たやうに装つて對者を欺かうとする虚偽の推論である。

(一一)以上の外斷案の根據となるべき前提が却つて斷案を根據として立ち、或は斷案と同一の事が或る變装の下に前提となつて居て、斷案は只之れを繰り返すに過ぎないやうな場合がある。先決問題要求の虚偽(Peti tio principii)と稱せられるものは即ちこれであるが、尙種々に別つことが出来る。

(イ)斷案竊取(Assumptio non probata) 一つの推論に於て前提として用ゐられた命題が其の形式に於て誤謬がなくとも其の意義を考へる時は、その命題は斷案を是認して後始めて成立つことが出来るのであつて、その裏面にかくれた眞義は即ち斷案と同一なことがある。これは即ち竊かに斷案を取り入れたものであるから斷案竊取の虚偽と名づけるのである。ツェノーンの「萬物不動論」に用ゐたる論證の如きはさうである。

(ロ)循環論證(Circulus in probando) 前提の根據が斷案に述ぶる所と同一なるか、若しくは斷案が前提の一たる同一命題を繰返すに過ぎざる時、即ち前提の理由を求めて斷案に歸するか、或は前提に於て斷案と同一事を繰返す如き論式、更に換言すれば斷案を證するに前提を以てし、其の前提を證するにまた斷案を以てするが如き論式を循環論證といふのである。

さて眞理の一個の屬性は客觀的といふことである。随つて眞理の反對たる虚偽は客觀的でないことである。更に詳しくは、主觀的であること即ち客觀的妥當性のない竟

見乃至臆見に根柢を有するものである。而してこの虚偽を以て眞理と見る所に所謂誤謬が生ずるのである。即ち小さな體系を以て大きな體系と混同し、主觀的に價值あるものを以て客觀的に價值あるものと混同する所に誤謬が生ずるのである。今左に誤謬の一般的原因を略述しよう。

(一)先入見或は偏見を有する時には或る事物の一面を見て其の反對の一面を見逃すばかりでなく、其の外に、全く存在しない事實をも錯覺又は幻覺として知覺することさへあり、随つて其の全相眞相を十分正しく觀察することが出来ないといふやうな誤謬即ち一面觀若しくは曲解に陥るのである。

尙この點に聯關して注意すべきは、ベーコン (Francis Bacon, 1561—1626) の所謂偶像 (Idola) 論である。即ちベーコンは吾々をして學問的誤謬に陥らしむるものは四種の偏見でありとし、これに偶像と名づけたのである。即ち第一は洞窟の偶像 (Idola ^specus) である。即ち各人の特有な性質から來る誤謬で、恰かも自己の洞窟内に閉ぢ込められるやうに、凡ての事物を自己獨特の立脚地から考察し、随つて小範圍に限ら

ことを指すもので境遇、習慣、教育、嗜好等に依つて着色させる所謂「井底の蛙」的見解は凡てこれに屬するものである。第二は劇場の偶像 (Idola theatri) で、古人の傳説時代の思想又は父母長上君主聖賢等所謂オーソリチーの教等を自己の思想に訴へて批評せず其の儘没批判的に受取るために生ずる誤謬である。これを劇場の偶像と名づけるのは、恰も演者が或る人格を只管模倣するに等しいからである。第三は市場の偶像 (Idola fori) で人間の交際から生ずる言語上の誤謬である。即ち人々が理性を以て言語を驅するのではなくて、倒まに言語のために思考が制限され、随つて言語を以て實物とする誤謬である。第四は種族の偶像 (Idola tribus) で、人間本來の性質に本づく誤謬で、感覺器官が正當に事物を知覺することが出来ないで錯覺を生ずるとか、或は現在と同様に將來もあるだらうとか、或は人がいつも自己と同様に考へるだらうとか、乃至は自然界の現象をも人間と同様に目的的に見るといふ如き擬人的傾向に陥るとか、いふ如きはこれである。而してベーコンは、これら四種の偏見を去ることを以て學問研究の消極的方面であると考へたのである。即ち、第一に對しては他人の經驗をも比

較参照して廣く知識を求むること、第二に對しては批評的になること、第三に對しては經驗的に事物乃至自然界の實際に就て考へること、第四に對しては自然界には原因結果の機械的關係がある許りであつて目的はないものとして考察することとした。

(二)想像せるものを實際事實であると思ふ時には誤謬に陥る。

(三)感情が興奮して對象の一面のみを見てその全體を正しく見ることが出来ない時には誤謬に陥る。

(四)言語は形式的にして且多數を有するために、これに依つて現はされたる性質を直ちに事實其のものと見なす時には誤謬に陥る。

(五)不注意、忘却、無智より誤謬に陥る。

(六)偏れる個人的性癖を標準として判断する時には誤謬に陥る。

(七)感覺機關の不完全より所謂錯覺といふ誤謬に陥る。

最後に、批評を精確妥當ならしめんがためには、批評者は上に述べたやうな各種の注意をなすと共に其の態度を正しくしなくてはならない。即ち、嚴密な意味に於て批

評的態度を取つて、決して獨斷的な態度に出てはならない。換言すれば、内在的批評を主としなくてはならない。但しこの點に關しては、前章に於て一言した所であるから、茲には省くこととする。

第二章 批評家論

〔一〕批評は、對象の具有する價値を闡明し改造することを通して、批評家独自の價値を創造することを主眼とするものである。随つて嚴密な意味に於ける批評は、價値創造若しくは價値改造の意志即ち「批評的精神」とこの意志を十分に遂行するための手段若しくは過程即ち「批評作用」との二つを缺くべからざる要件とするものである。そして第二の要件は更に二つに分れて、一つは對象が多くは不明瞭な姿に於て具有する價値の真相を認識することと、一つは其價値を判断し且これを客觀的に表明することを通して、對象の具有する價値に改造を施すこと即ち對象の價値に即しながら内在的に其れを超越することによつて批評家独自の新價値を創造することとなるのである。

批評を斯くの如く解することが眞實であるならば、批評家として必要な資格も亦當然この二要件に適合するものでなくてはならない。詳しくは、批評的精神、即ち、價値改造若しくは創造の意志が、純粹にして強烈であることと、この意志を十分に遂行することの出来る力量が充實して居ることとである。そして後者は、對象が多くは不明瞭な姿に於て具有する價値を精確に認識し理解し判断することの出来る能力と、其の價値の表明に即して批評者独自の改造乃至創造作用を營むことの出来る能力との二面を備へた時に始めて全いものであることは、前述の言葉に徴して明らかなことである。斯くして、嚴密な意味に於ける批評家は、第一に先づ熱烈な價値の追求者でなくてはならない。

〔二〕思ふに、凡そ如何なる生活の營みでも、それが眞劍に營まれる限り、價値追求の要求を源泉としないものはないのである。即ち自分の生活の營みが何等かの意味に於て、又何等かの方面に於て、價値を増進するやうにありたいといふ要求に依つて動かされないものはないのである。併しながら、この價値追求の要求は、それがどんな種類のもでも畢竟は自己改造の要求に歸着するものである。蓋し、たとひ社會の進歩のためとか人類の幸福のためとかいふやうな客觀的一般的な價値の増進を直接の目的として生活する人々も、其の心胸を徹底的に解剖して見る時は、斯くの如き客觀的一般

的價値の増進のために力を致すことが、其の人自身にとつて最も望ましいこと即ち最も價値のあることであり、随つて客觀的一般價値の増進のために力を致すことを通して自己其のものの獨自な價値を増進しようとするものに他ならないからである。此意味に於て、批評家は第一に「熱烈な價値の追求者」でなくてはならないといふ吾々の要求は、やがて批評家は「自己の熱愛者」であり、随つて「自己批評家」でなくてはならないといふことを意味するものである。

如何にも、批評は表面的に見れば、自己以外の對象の價値を批判したり、或はそれに對して稱讚や非難を加へたりするだけで、批評主たる批評家の自己そのものの價値には何等の影響をも及ぼさないかのやうであるけれども、實際に於ては決してさうではなくて、他に對する批評はやがて自己そのものに對する批評であり、對象の價値改造はやがて自己そのものの價値改造に他ならないのである。蓋し、嚴密な意味に於ける批評は、既に述べたやうに、批評者の心胸に、對象の批評を通して價値あるものを發見し創造しそして自己の價値を高めようといふ誠實な生活意志がなければ出來ない

と共に、凡そ何事でも、それが有意的に營まれる限りは、自己の價値意識に没交渉であることは出來ないものである許りでなく、對象（人間であると事象であると問はず）の價値は自己に明確な價値意識がなければ十分理解することが出來ないし、たとひ對象の價値を理解したにしても、その長所を助成し、その短所を匡正することに依つて對象そのものの價値に改造の原動力を與へるといふ批評の眞職能を十分に果たすことは、批評家其の人の心に熱烈な自己改造の意志乃至自己信愛の至情があつてのみ出來ることだからである。

斯くの如く一切の批評は自己批評を根柢とするものであるといふこと、乃至本當の批評は凡て自己批評であるといふことは、やがて本當の批評家の生活は悲痛なものであるといふことを意味する。蓋し、彼等は常に絶えず自己一人の劣弱性のために懊惱するばかりでなく、あらゆる批評の對象となるもの、即ち全人類乃至全人性の劣弱性その者の爲に懊惱しなくてはならないからである。併しながら、件の懊惱は勿論絶望の懊惱ではない。即ちそれは批評家を悲觀主義絶望主義に導くやうな致命的絶望ではない。

思へば人間性乃至人間生活其のものに缺陷のあることを知りながら、而かも懷疑にも冷笑にも自暴自棄にも絶望にも悲觀にも陥らずに、絶えざる努力と奮闘とにより、一切の對象の改造を通して歩一步高大な價値の世界に進み行く所にこそ、批評家の悲痛な併しながら勇敢にして尊嚴な生活がある。

實に、姑息偷安と自欺自蹈との状態を自らのうちよりの力で破つて自己の劣弱性をまともに凝視することの苦悶に堪へ得ることそのことがやがて自我の現實的價値の存在を證明することであると共に、其の自我が一層優強な自我となり得る可能性の存在を證明することである。蓋し、理解は超越の原動力であり、反省は伸展の基點であり懊惱は解脱の淵源だからである。幻滅の悲哀や破産の寂寞をも意とせず、絶えず自らのうちよりの力で自己の劣弱性を凝視して其の假面を剝奪し、その虚偽を打破して行くことの出来る人の生命力には、幻滅の悲哀によつてさへも永遠に消滅しない希望と理想の光と、破産の寂寞によつてさへも恒久に破壊されない伸展と成長の資産とが具つて居るからである。

これを他面より見るに、批評家が或る對象に向つて批評の興味と必要とを感ずるのは、いふまでもなく對象其のものの中に批評に値する要素が存在するためであるけれども、更に批評家自身がそれに對して一種の責任を自覺するがために他ならない。即ち缺點のある對象を其のままにして置くことは、何等かの意味で批評家自身の價値と尊嚴とを傷つける所以であることを自覺するがために他ならない。換言すれば、或る對象に對して批評を加へようとするのは、批評家自身の胸奥に、自分が對象よりも優れた價値を具有して居るといふ自信、若しくは批評することによつてその對象の具有する價値に改造を試みることに、即ち對象の價値を増進することが出来るといふ自信——少くとも豫想乃至要求を懷抱して居るがためである。随つてこの自覺がある限り、批評家は勿論自己を對象の奴隸とするものではなくて、たとひ對象即ち人格や思想行動事業やが、全體として批評家自身の人格や思想行動事業やに比して優越した價値を具有するとしても、少くとも其の批評の對象となつた當面の部分だけに對しては、何等かの意味で、優越感を感じて居るものである。然るに、若しこの優越感を感ずることな

しに、若しくは實際優越した価値を持つことなしに、即ち徹頭徹尾対象の価値に隨喜して、只其れが優れた価値を具有して居るといふことだけを客觀的に斷言するか、或は、その優越點だけを説明するかに過ぎないならば、そして其の対象の価値の優越性が特別な闡明を俟つことを要しない程明らかなものであるならば、これは嚴密な意味に於ける批評ではなくて、寧ろ單なる稱讚でなければ單なる説明であり、隨つてまたこれを行ふものは嚴密な意味に於ける批評家といふことは出來ないのである。

眞の批評家は矜持を持たなくてはならない。対象より卓越した自己獨自の本質的価値を具有することの自覺に伴ふ矜持と、自己の価値標準——理想の力に照して対象の価値を改造することが出來るといふ自信に伴ふ矜持とを持たなくてはならない。實に批評的精神即ち価値改造欲は、自己に誠實ならんとする意志を中心とする點に於て、嚴密な意味の自我乃至人格の構成力であると共に、其の自由と尊嚴との保持力増進力である。蓋し、自我の眞價詳しくは自我の最深要求とその本然性とを正しく認識した時にのみ嚴密な意味に於ける人格が創造されると共に、この自我の最深要求即ち獨自

の価値標準乃至価値意識によつて自我を統率し且他に對することによつてのみ自我の獨立と自由と尊嚴とが保持されるものであり、そして自我をして斯かる態度を取らしめるものはやがて批評的精神そのものに他ならないからである。

併しながら、批評家の一つの資格が自己尊重自己信愛の情乃至矜持を持つことであるといふことは、批評家は傲慢であり尊大であるといふことを意味するものでないのはいふ迄もない。否これは寧ろ倒主に、批評家は謙遜であり敬虔であれといふことを意味するのである。蓋し、批評乃至批評家の表面上乃至直接の任務は、対象の価値の闡明と改造と、即ち隠れたる価値を現示すると共にこれを助成することであり、そしてこの任務は傲慢と尊大とに依つて成し遂げることが出來るものではなくて、只其自身卓越した本質的価値を具有する批評家が、眞理のために暫らく自己の優越性を抑制し、謙遜な態度と敬虔な心境とで即ち他の美を成さうとする美しい心で対象に向ふことによつてのみ成し遂げられることだからである。そしてこの自己尊重自己信愛の情が、対象に向つた時に一見正反對とも思はれるやうな謙遜敬虔の情となる所にこそ、即

ち一見「自己没却」とも思はれる程徹底的に且有効に自己を主張し、一見全く價值意識を缺いて居るかのやうに思はれる程敏活に且有効に評價作用を行つて居る所にこそ、實は批評乃至批評的精神の眞面目があると共に、まことの批評家の美はしさと床しさとがある。蓋し否定を通しての肯定こそ批評の精髓だからである。

要するに批評家が十分なる自信と矜持とを持つて居ればこそ対象をして美を成さしめることも、またこれがために暫く自己の優越性を抑制することも出来るのである。

〔三〕斯くの如く、批評的精神即ち價值改造若しくは創造の意志が純粹であり強烈であることは、批評家たる資格の首位を占むべきものであるが、眞の批評家となるには未だこれだけでは足りない。即ちこの精神を十分に發動せしめ、この意志を完全に遂行せしめる能力を缺く時には、未だ眞の批評家と稱することは出来ないのである。随つて眞の批評家たらんがためには、既に述べたやうに、批評的精神を涵養すると共に、批評能力を充實しなくてはならない。

批評の力量を充實せしめる上に第一に必要なことは批評の対象其のものの具有する

本質的價值を精確に認識することの出来る能力を養成することである。蓋し、批評の対象となる價值が單純なものの低級なものであるならば兎に角、複雑高大なものであるならば、表面には明白に現はれて居ないで、多くは不明瞭な渾沌たる姿に於て存在するものだからである。然らば、このかくれたる價值を精確に理解し認識するには如何にすればよいかといふに、批評家自身の胸奥に、如何なる対象に對しても客觀的に妥當性のある價值判断を下すことが出来るやうな確乎たる價值標準を有し乍ら、而かも其の標準を唯一最高のものとして如何なる場合にもこれのみを強用しようとするやうな固陋な横暴な傲慢な精神や態度を持たないやうにすることが何よりも必要である。

そして批評家が対象の價值を精確に認識するには鑑賞眼又は觀察眼が精確でなくてはならないし随つてそれがためには官能が十分發達し洗練されて居なくてはならない。

殊に藝術批評に於ては趣味と官能とが巧に調和して居なくてはならない。ヘーダーがその『文藝復興』の序文に於て「批評家にとつて重要なことは、理知に對する美の精確な抽象的定義を持つことではなくて、或る種の氣質即ち美的對象の現出によつて深く

動かされる力を持つことである。」とし、更に「詩人又は畫家の價值を感じ、それを解釋し表明することがやがて批評家の採るべき三階段である」といつたのはこの點を指したものである。

○ 詳言すれば、本當の批評家として必要な第二の資格は、確乎たる独自の價值標準乃至價值意識を持つことである。併しながら、いふ所の「確乎」とは、固定的といふことではなくて、寧ろ對象の性質の異なるに従つて融通無礙であり乍ら、而かも批評家たるの權威を保つに足るだけの力あり生命ある思想を背後に藏することを意味するものである。即ち出来るだけ主觀を抑制し出来るだけ謙遜な態度を採りながら、而かも暗黙の間に批評家としての人格の反映が批評作用の上に力強く現はれるやうな價值標準乃至價值意識を所有することである。換言すれば客觀的妥當性のある價值標準若しくは價值意識を有しながら、實際批評作用を行ふ場合には、出来るだけこの標準を亂用せず、即ち超越批評や印象批評をせず、寧ろ對象の所有する標準によつて所謂^{インマネ}内在批評^{イントクワイシズム}（對象の價值が高ければ高い程、複雑であれば複雑である程、批評家は益々自

己を謙虛にして益々内在的態度を取らなくてはならない。）を試み、對象の價值の理解や認識に即して批評家の價值意識即ち自己そのものの精髓眞價が必然的に表現されるやうになることである。そして批評家の最も困難とする所は、一定の學理乃至論理的標準に照して表面上明白な批判を下すことではなくて、實に對象そのものの價值標準を理解し、それに照して對象の最も優れて居る點を見出すことである。然らば斯くの如く批評家をして間接の自己表現をなさしめることによつて批評の困難點を避けしめる力は抑も何であらうか。いふまでもなくそれは「謙抑」である。

對象の價值を精確に理解し認識せんがためには、批評家の心は何よりも先づ謙抑でなくてはならない。何故なれば、理知の聰明を蔽ふものは、理知の優越性そのものではなくて、その自覺に伴ふ傲慢の情であり、そしてこの感情を抑制して卓越した理知の力を十分に發揮せしめるものは謙抑だからである。但し、茲にいふ所の謙抑とは勿論對象の具有する價值よりも自己の價值が低小であるといふ自覺から來た羞恥感を伴ふやうな所動的謙抑ではなくて、自己尊重に伴ふ對象貶視の病弊を脱し、表面の色

彩や形状其のままを直ちに對象其のものの本質的價值と誤斷し速定する輕率と粗大と怠惰と眞理欲の萎靡とを救つて、如何なる對象に對しても其のものの具有する價值をその最も十分な姿に於て顯現せしめずには止まないといふ旺盛熱烈な眞理欲——眞理に對する愛を源泉とする能動的謙抑である。對象其のものの價值を出来るだけ精確に乃至は出来るだけ十分に理解し顯現せんが爲めに出来るだけ主觀の發動を抑制せんとする「科學者の謙抑」である。そしてこの謙抑な心があればこそ、一見無價值とも或は全然不可解とも思はれるやうな對象に對して煩瑣な分析と精到な洞察とを加へることも出来れば、或は又對者(たとへば作家)の滿不滿や社會の毀譽褒貶やを意としないで、十分に對象の長所を推稱し徹底的に其の短所を非難することも出来るのである。

思ふに、最も強烈に欲求するものは却つて無欲であるかのやうに見え、最も熱切に愛するものは却つて冷刻であるかのやうに見えるものである。そして眞の批評家の資格として必要な「謙抑」と「敬虔」とはやがてこの無欲と冷刻とに類似する。即ち對象から出来るだけ多くの價值を發見し獲得しようとする欲求が強烈であればこそ主觀の發

動を抑制するのであるし、對象を出来るだけ價值あるものとする愛情があればこそ出来るだけ對象そのものの價值標準を生かして觀照的乃至内在的批評を試みるといふ謙抑な客觀的態度を取ることが出来るのである。そしてこの意味に於ける客觀的態度即ち對象に對して所謂「即かず離れざる」態度を取ることが要するのは、批評家に於ても創作家に於ても同様なことである。

尙この謙抑と聯關して必要なことは、「虚心」である。即ち、常に自己の價值標準を以て絶對最高のものでして何ものに對しても超越的態度を取らうとすることを避ける許りでなく、更に批評するに先んじて、何等かの成心を挾んだり、低劣な不純な動機や獨斷的な豫想や先入見やを懐いたりすることを避けることの出来る虚心坦懷明澄純眞な心を持つことである。

要するに、批評的精神乃至價值改造の意志が純粹であり強烈であれば、独自の價值標準も價值意識も出来ると共に、對象を精確に認識し理解するために必要な謙虚も敬虔も生れて來るのである。

「四」批評家の一つの資格が、対象の価値を精確に認識し理解する能力を具へるにあるといふことは、勿論批評家は單なる対象の解釋者であり説明者であるといふことを意味するものではない。蓋し、批評は究極する所批評者自身の要求乃至價值意識の發動であり、随つてワイルドの言つたやうに、「批評は其の精髓に於て純然たる主觀的のものであつて、他人の秘密を探求するものでなく、主觀そのものの秘密を探求するもの」だからである。そしてこの點から見ると、既に述べたやうに、批評家として最も重要な資格は、依然として自己改造若しくは自己批評の要求が強烈なことである。随つて、文字通りに客觀的であることは、實に批評家をして單なる忠實な解釋者説明者に墮せしむる所以に他ならない。即ち批評家として必要な客觀的態度は「最も主觀的なことが最も客觀的なことである」といふやうなパラドキシカルなものでなくてはならない。この意味に於て、ワイルドの「批評家の人格が解釋の中に強く入れば入る程其の解釋は一層如實なものとなり、一層満足なものとなり、一層信服するに足るものとなり、更に一層眞實なものとなる」といふ言葉と、「批評家が他の人格や作物を説

明することが出来るやうになるには只自分の人格を強めることに依る外はない」といふ言葉との間には何等の矛盾もないのである。更にこの意味に於て、批評家は公平でなくてはならないといふことは、いふ所の公平といふことを、小さな主觀即ち低劣な利益好惡の情に囚はれないことと解する限りに於てのみ妥當な要求であつて、決して大きな主觀即ち強烈な要求と雋敏な價值意識の發動とを阻害することを意味するものではない。換言すれば批評乃至批評家の資格として要求する公平とか客觀的とかいふことは、價值判斷即ち批評の結果の價值をして客觀的妥當性を有するやうにせしめることと、批評作用の第一着歩をして客觀的態度を以て対象に向ふやうにせしめるといふこととを意味するものであつて、批評の點睛的作用までも客觀的であれといふことではない。否、批評の價值は、要するにこの點睛的作用がどれ程十分な意味で主觀的であるか否かによつて定まるものなのである。即ち批評家が対象の價值を闡明することを通してどれ程強く且明らかに自己の價值を表現し、どれ程迄自己の價值意識を深くし大きくしたかによつて定るのである。そして批評作用が創造作用であるといふこと

も要するに對象に即する批評家の主観作用の新生と展伸とが其の中心を形造ることを意味すると共に、批評の内容は批評家によつて異り、批評の價値はやがて批評家の價値であるといはれる所以に他ならない。この意味に於て、ワイルドの「創造が客觀的に見れば見える程實際は一層主観的である」といふ言葉も、「批評は不公平でなくてはならない……公平は眞の批評家の性質の一つではなく、批評の一條件でさへもない」といふ言葉も單なる言辭上のアイロニーとして一笑に附するには餘りに意味深い言葉である。随つてまた、上に述べた批評家の資格として必要な謙抑敬虔といふことも、自己を卑下したり、主観の要求や價値意識を極度に抑制したりして、對象の價値をオヴァーエス過テイオート衰テイオートしようとするものでないのは改めていふまでもない。

實に批評家の資格として必要な對者に對する愛情は「眞理」の光を廻避する盲目的愛情や、將來の「伸展」と没交渉な目前的愛情ではなくて、眞理の所有者としての對者を愛し、伸展の可能體としての對者に對する愛情でなくてはならない。出来るだけ十分に乃至出来るだけ精確に對者の眞價を闡明するため、陋劣な卑賤な動機と思ひ上つた

獨りよがりの成心とを排して、辛辣な嚴正な鋭利な明燈な敏活な、併しながら博大な溫い心が斷えずその純眞の姿を保つて居ることこそ、まことの批評家に必要な愛情が具つて居ることの證據であり謙抑敬虔の存することの證據である。一言にすれば、本當の批評家の資格として必要な愛情は、「眞理」と「價値」とに對する、若しくは「眞理」と「價値」の所有者としての「人間性」に對する愛情、即ち哲學的にして倫理的な愛情でなくてはならない。

随つて、批評家が本當の批評を試みる上に必要なだけの客觀的態度、即ち謙抑な敬虔な公平な態度を取ることに依つて對象の一般的意義及價値が明らかになつたならば、それ以上は出来るだけ森嚴な峻厲な態度で、其の短所弱點を破壊し否定すると共に、最も透徹した理知と深刻な直觀との力で對象の中核を把握するやうにしなくてはならない。そしてそれがためには、批評家は、徹底的に自己に忠實でなくてはならない。即ち最も十分な最も高い意味で主観的でなくてはならない。蓋し、既に述べたやうに、批評家そのもの乃至批評そのものの眞價を決定するものは實にこの主観的作用の力だ

からである。批評の精髓たる創造作用といふのも要するにこの客観作用を止揚した主観作用に他ならないからである。

〔五〕対象の価値を明らかにすることから入つて、対象そのものの価値を増進する源泉を見出し且つ原動力を與へるか、若しくは対象の価値を闡明することに即して批評家独自の新価値を創造するに至つて、批評は始めて其の十分な職能を貫徹したのである。蓋し、既に幾度も反覆したやうに、批評の精髓はやがて価値の改造若しくは新価値の創造だからである。随つて眞の批評家たらんがためには、上に述べた批評的精神及び対象の理解力乃至認識力の外に、卓越した創造力を具へなくてはならない。

思ふに、批評は舊を通して新を見出し、現實を通してよりよき將來を生み、小を通して大を獲、停滯を通して流動に到り、偽を通して眞を求むる作用である。即ち批評其のものが一個の創造である。そして批評の中心が創造であればこそ、批評は單なる説明や解釋ではなく、随つて又批評家は創作家の奴隸たることを免れ得るのである。この意味に於て、批評家に必要な資格の中最後のものでありながら而かも最大なもの

は「創造力」乃至「獨創力」でなくてはならない。

併しながら茲に注意すべきことは、いふ所の創造力乃至獨創力は、どこまでも対象に即して働くものでなくてはならないといふことである。蓋し批評は其れ自身獨立完全な作用ではなくて、或る價值的対象と相對的な作用だからである。即ち批評の眞價は或る対象に即しながらどれ程迄それを、内在的に超越したかといふことに依つて定まるものだからである。随つて、批評家に必要な創造力乃至獨創力は、卓越した改造力でなくてはならない。この意味に於て、先づ対象を解剖し理解し闡明することを爲すことなしに、その対象の具有する価値より優れた自分の価値を端的に提供しようとするやうな性急な悪い意味で主我的主觀的能動的な人は、如何程卓越した創造力乃至獨創力を具へて居ても、嚴密な意味での批評家になることは容易に出來ないのである。即ち、一見対象の批評の闡明に没頭して居るやうな無心な謙抑な敬虔な心境や態度を取り、対象の価値の推稱に傾倒して居るやうな沒我的な状態にあり乍ら、而かも其の結果に於ては自己の創造力を十分に助長し、自己の獨創力を力強く發揮し得るやうな微妙な

能力を具へた人のみ、本當の批評家となることが出来るのである。この意味に於て、本當の批評家は模倣者でも發明者でもなくて、寧ろ最も卓越した「改良家」でなくてはならない。

そして批評の職能たる價値の改造といふことは、對象の長所を助成することよりも寧ろ其の短所を破壊し匡救することに主力を注ぐことによつて出来ることである。随つて、批評に於ても亦其の短所の指摘に主力を注ぐべきものである。蓋し、凡そ行爲と思想と事業とを問はず、苟くも、其の當事者は大抵何等か價値あるものと信じて居るものであり、随つて、批評家がそれを改造するためには、第一にその長所を認むべきことはいふまでもないが、その長所だけを助長するよりも、寧ろ其の短所を指摘すると共に、其の短所の原因を明らかにし、且その匡救法を明らかにすることが最も大切なことだからである。そして、相當の批評能力を持つものにとつては、この對象の短所を明らかにすることは其の長所を明らかにすることと同様に大した困難もないのであるが、その原因を明らかにすることと有効な匡救法を講ずることとはかなりに

困難なことである。蓋し、これがためには、少くともこの限りに於て批評家は被評家に對して一段優れた價値を具へて居なくてはならないからである。そしてまたこの點こそ實は否定を通して肯定に至る批評の積極的方面即ち改造的創造的方面であり、随つてこの點に關する力量の相違こそやがて批評家としての力量の相違だからである。一言にすれば、これは明快な理知と透徹した直覺との協力の結果として生じた独自の創造力に依つてのみ出来ることだからである。この點から見ても、吾々は、對象の缺點を指摘し非難することその事を排するものではない。要は、批評的精神を根柢としない低劣な目的で爲されるもの、即ち自他の何れに對しても創造や改造の動力とならない非難のための非難、否定のため否定を事とするやうな單なるあらさがしや罵詈譏謗やを排するものである。

〔六〕以上の叙述に依つて明らかであるやうに、批評的精神は、批評乃至批評家の中心的要素とも根柢的要素ともいふべきものであり随つてこれを缺くものは勿論批評家といふことは出来ないから、批評家たる資格として特に缺くべからざるものは、「理解

力」と「創造力」とである。そして前者は批評力の消極的表面的方面であり後者はその積極的內面的方面である。併しながら、人間の性格其のもの間に、概して消極的なものと概して積極的なものとの對峙が明らかであるやうに、批評家にもこの兩要素兩資格を調和的に具へたものが洵に少くて、多くは其の一面に傾き、随つて批評家中自ら二つの異別を生ずるに至るのである。即ち公平な、自己を抑制した態度を以て作物の觀賞や説明や解釋や註釋やを主として、純粹に改造的であるものは前者であり、個々の作物や作家などとは離れて、豫言者の態度で主義の主張唱道宣傳を任務とし作家を導き時代を導かうとするものは後者である。

そして前者は、大抵批評家の對象とする作家より一段低級な地位に立ち、随つて心境や態度は謙抑敬虔ではあるが、それが度を過して卑屈となり、盲從阿附雷同を事とする結果その批評に何等推重する價值をも權威をも持たないやうな状態に墮し勝ちである。これに反して、後者は少くとも其の意氣に於ては作家と同等乃至同等以上の地位に立つものであり、事實に於ても亦作家より卓越したものが多く、随つて其

の價值の主眼點は對象の長所を認めるよりも寧ろ其の短所を發見するか、若しくは其の長所の助成と短所の匡正とを基礎として對象以上の價值を創造しようとするものである。随つてまた批評には價值の優れたものが多いが、それに伴つて自ら其の心境は冷刻尊大となり態度は傲慢となる結果として批評が單なる獨斷と獨りよがりとに陥り易いのである。そして其の何れにしても、それが極端に走る時には同様に有害無益な似而非批評家となつて自己は勿論批評の對象の價值をも損傷し、社會一般をも誤るに至り、嚴密な意味で「批評家」といふ境界を脱するに至るものであるが、殊に後者に於て其の弊害が顯著である。本當の批評家は、件の兩面を具へて對象の價值を精確に理解し精確に表白すると共にそれに對して改造作用を施し、自己を主張すべきものであるから、文藝批評家と其の他の社會批評家乃至文明批評家とを問はず、何れの一面にも偏しないやうにしなければならぬ。

然らば、この弊害から免れるにはどうすればよいかといふに、いふまでもなく前者は後者の長所を加味し、後者は前者の長所を加味することによつて各自の短を補ひ、

いふ所の「改造」の意志と能力とを涵養する外に方法はないのである。併しながら、既に一言したやうに、これは人性の二大特色であるからこの調和は到底完全には行かないのである。随つて批評家たんとするものは、只自分の特性を理解して其の態度を定めるやうにすればよいのである。但し、消極的態度を取るにしても或は積極的態度を取るにしても、本當の批評家たんとするものは、其の究竟目的に於ては出来るだけ自己の獨創力を發揮することを念とすると共に、其の前提としては、出来るだけ自己を抑へることによつて精確に對象を理解するやうに心掛けなくてはならない。即ち如何なる批評家も一度は先づ謙遜にして緻密な科學者となり、溫雅にして聰明な鑑賞家となり、他の中に自を見出し個を通して全を思ふヒューマニストとならなくてはならない。然るに若しこの階段を通過することなしに一足飛に独自の價値を發揮しようとするものは、この階段から一步をも脱出することが出来ないものと同様に、本當の批評家となることが出来ないことは既に一言した所によつて明らかなことである。

「七」 翻つて思ふに批評家は價値の創造者である。少くともかくれたる價値の顯現者

である。即ち對象の内奥に渾沌たる形に於て、或は不純な姿に於て、或は不當な状態に於て存在する價値に光と力とを與ふることに依つて、明白純真正當十分な客觀化事實化を行はしむるのが批評家の任務である。即ち隠れたる價値を闡明し、誤られたる價値を匡正し、未完成の價値を補成改造する、一言するに對象の價値を一步だけ高めると共に、改造された價値を客觀化することに依つて社會の文運に貢獻するのが批評家の任務である。この意味に於て批評家は價値世界の南極探検家であるといはなくてはならない。

然るに、批評家の職能を以て、「價値改造」とする時には、其の作用は一見消極的であるかのやうに見えるけれども實は積極的なものでなくてはならない。即ち、批評家は「批評」に依つて自己を助長し自己の眞價を表現するものであるから、其の理想は高大なものであり、その態度は進取的でなくてはならない。換言すれば、批評家は革命者の意氣と戰士の勇とを具へて居なくてはならない。隠れたる價値を闡明する點に於て批評家はドライデンの所謂「水底の眞珠を獲得するもの」であると共に、自己の理

想と信念とを實現し表白するためには如何なる大敵とも戦ふ覺悟を持たなくてはならない。殊に社會批評家乃至文明批評家のやうに、紛糾混亂する社會乃至文明の基調を明らかにし、その缺陷を打破することに依つて社會を正しく整頓し文明に正しい進路を取らしめると共に、萬人をして生活の歸趨を知らしめることを職能とするものは、對象に對する廣汎濶大なる理解力と精到深遠なる洞察力と高邁卓拔なる識見と精確豐富なる學殖とを持つべきことはいふ迄もなく、その理想が高く、そしてその思想が時代より一步を進めたものでなくてはならない。更に眞理と價值とを保持増加せんがためには、一世を敵として戦はうとする壯烈な戰士の意氣と熱實な豫言者の風格とを持たなくてはならない。さうでなければ批評家はいつも第二流の地位を脱することが出來ないのである。

否、たとひ最も狭い意味に於ける批評、たとへば作物批評を試みる時に於ても、作物作家の缺陷弱所に對しては容赦なく、併しながら温い同感と明白な理論とを以て十分な非難攻撃を加へ、必ず創作家を説服して、改造の途に就かしめるやうにする程の熱誠を持たなくてはならない。

併しながら、斯くの如く批評家は戰士であり、時としては反抗者であり破壊者であるべきものであるが、決して「拗ね者」であつてはならない。即ち如何なる意味に於ても消極的であり、不徹底であり、怯懦であつてはならない。何處までも進取的であり公明正大であり徹底的であり男性的でなくてはならない。随つて批評家は冷笑、皮肉負け措み等の心事態度を極力排斥しなくてはならない。

これを要するに、批評的精神は哲學的精神であるといふ意味に於て、批評家は哲學者でなくてはならない。詳しくは、一切を徹底的に、即ちその眞實の姿に於て見ようとする點に於て、單に對象だけでなく、評價の主體認識の主體たる自我そのもの主觀そのものをも嚴密な批評の對象とするといふ點に於て批評家は哲學者でなくてはならない。即ち常に最も高い意味に於ける理性を標準として理性其の者の批評を試みると共に、理性の所産たる文化に對して斷えず有力なる批評を試みる事に依つて所謂文化價値の改造の原動力となる點に於て批評家は正しく哲學者と同一使命を有するものであり、

随つて哲學者たる資格を備へなくてはならない。私が批評家は自己批評と社會批評とを併せ兼ねる本當のヒューマニストでなくてはならないと反覆力説するのも要するにこれがために他ならない。

實に批評家は、淺薄低級な意味に於て自他の區別を排し、偏に價値の改造のために公平にして嚴肅な態度を取り、徹底的にして進歩的な態度を取り、最高價値乃至眞理以外には何ものにも囚はれない所は哲學者であると共に、最も高い意味に於て自由思想家でなくてはならない。旺盛な價値創造乃至價値改造の欲求に導かれ、何ものにも囚はれることなくして斷えず前へ前へと自由に進み行くものが批評家でなくて何であらうか。眞理と最高價値以外何ものかに囚はれて居る限り、それは批評と正反對な獨斷でなければ盲従に墮するのは改めていふまでもない。この意味に於て批評家に必要な資格は、最高理性に導かれていつも鮮活な澄徹したるとして自由な心境で自己をも他をも見て行く力である。

以上の如き見地及び批評其のものの種類から見るとは、特に批評家と名づくべきものは文藝批評家と文明批評家とである。然らば何故この兩者のみ特に批評家を以て目さるべきかといふに、それは對象が一定して居ると共に一個の職業とするに足る程豊富な複雑な内容を持つて居るからである。そしてこの兩者は各獨特の使命を持つて居るために、兩者を十分に兼ねることは容易でない。併しながら、其の批評家としての根本覺悟に於て、乃至は根本的能力に於ては何等の相違がない。只その對象が、一方は文藝であり他方は文明であるために、そして前者は後者の一部分であるために、前者は幾分専門的となり微細となり、部分的となるだけである。随つて、文明批評家たることは決して文藝批評家たることを妨げるものでもなく、また文藝批評家たることが文明批評家たることを妨げるものでもない。否本當に文藝批評家たるがためには何等かの意味で文明批評家でなくてはならないと共に、本當の文明批評家たるがためには何等かの意味で文藝批評家でなくてはならない。

尙文藝批評家を論ずる際に一言しなくてはならないことは(次章に述詳するやうに)文藝に於ける所謂批評家と所謂創作家との關係に就てである。勿論、既に一言したや

うに、批評も創作も同様に人間の精神作用であり、随つて一人にしてこの両面を兼ねることも出来ることであるから（たとへばゲーテやレッシングのやうに）絶對的に二者の優劣長短を定めることが出来るものではないが、批評と創作とを區別することが可能であり必要であると同一の意味で、批評家と作家とを區別することも亦可能にして必要なことである。

私は（次章に詳述するやうに）批評を以て間接的價值創造（即ち改造）作用であり、文藝を以て直接的價值創造作用であるとするものである。随つて、私から見れば批評家は必ず作家を「材料」「對象」として要するものである。勿論作家も批評家を必要とする點に於ては同様であるが、それは自己の創作物の價值を明白にして呉れるもの、乃至價值改造のため助言を與へて呉れるものとして批評家を要するものであるから、批評家が作家を要するのに比して甚だしく消極的である。更に兩者の本質的關係を見ても、批評は判斷分析を主とし、創作は直覺總合を主とするものであり、随つて兩者はその職分分野を異にするものであるからそれ自身に於て價值の高下がある譯では

なる。

併しながら批評家は作家の先に立つては作家に指導と激勵と暗示と進路とを與へ、作家に後れては、創作の價值を批評してその將來に於ける價值改造の動力萌芽を與へるものである。随つて作家は、少くとも卓越した批評家を兼ねた作家でない限りは作家としての自己乃至自己の作品の眞價を正しく認識するためにも、それを客觀的に妥當性あるものとするためにも、乃至は自己の長短を明らかにし、且その長所を助成し、短所を匡正する方法を知ることによつて將來改造の途に就くがためにも、必ず卓越したとして本當に同情のある批評家の力に俟たなくてはならない。畢竟するに批評家は親切と聰明と乃至は激勵と苦言とを併せ兼ねることに依て作家の保姆であり、友人であり、後援者であり、随つて兩者は唇齒輔車の關係を有すべきものである。然るに、在來乃至現在に於ても、批評家と作家とは兎角交情が疎隔して寧ろ犬猿鬮ならざる如き關係を有し勝ちである。そしてこれは畢竟するに、一方に於ては批評家に他の美を成す親切が足りなくて、徒らに作家の缺陷の指摘曝露と弱點の非難攻撃

とのみを事とするがためであると共に、他方に於ては、創作家に自己改造の誠意と他の忠言に信順する雅懐とを缺いて、徒らに小成に安んじ排他と尊大とに墮するがために他ならない。

創作家と批評家とが十分に相提携してのみ、始めて文藝の進歩を見ることが出来るものであるから、両者は互に、本當に自己を尊敬せんがために他を尊敬し、本當に自己を主張せんがために自己を抑へるやうでなくてはならない。そしてそれがためには何よりも先づ両者は右の缺陷から免れるやうにしなければならぬ。

「八」以上の見地から見れば、我が國現時の批評家の共通缺點は、第一に本當の意味の批評的精神、殊に最も高い意味の人道的精神と眞理欲とが缺乏して居ることである。そして前者の結果は、批評家をして冷刻なものたらしめると共に、主觀的利己的なものたらしめるものであり、後者の結果は、批評家をして獨斷的なもの不徹底なもの乃至是非論理的なものたらしめる。殊に後者は、たとひ熱情と誠意とがあるにしても、これを十分に事實化する力量がなければ到底免れることの出来ない缺點である。そして

批評は客觀的妥當性を得なければ無意義なものであると共に、思想や言説が客觀的妥當性を得るためには、一面に於て人格的實行的根據の上に立つと共に、他面に於て論理的の形態を備へなくてはならない。然るに、我が國現今の批評家にはこの論理的卓越性を具へて居る人は極めて少い。否寧ろ「論理的」乃至「概念的」といふことを積極的に排斥しようとする傾向が強いのである。随つて大抵な批評は客觀的價値の不明な印象批評に陥つて仕舞ふのである。そして印象批評は、前提乃至過程をぬきにした結論のみの批評に過ぎないから、たとひ正しい批評でも、それによつて被評者も一般社會も啓發される所が甚だ少いのである。

勿論斯くの如き能力の優れた批評家もないではないが、其れらは、反對に具象的事實を尊重する念が薄いため、多くは實際を離れた抽象的な論議即ち所謂論理的遊戯に墮し、随つてまた對象の價値改造といふ批評の本義を遠かづて、却つて主觀的となり超越的となるやうな矛盾に陥るのである。吾々の望む所の批評家はこの兩面を併せ兼ねたもの、即ち鋭敏な直覺力を具へると共に、この直覺の力で捕へた眞理を、生き

た事實を對象としながら論理的に解明することによつて、客觀的ならしめることが出来るやうな能力を具へた批評家である。實に論理化されぬ直覺と前提の不明な結論とを得ることは文藝家の特色であり、單なる論理的運用と理知的解明とは學者の特色であるから、これらの一面にのみ偏しては批評家独自の地位を獲ることは出来ないのである。この意味に於て吾々は、我が國現今の批評家が自己の職能に對して正しい自覺を持つことを望んで止まぬものである。即ち本當の意味の自己批評から出發することを望んで止まぬものである。

第二の共通の缺點は、鑑賞力に乏しいといふことである。即ち我が國現今の批評家には、相當の批評的精神を具へたものはあつても、それらの多くは、批評の本義を没却して似而非獨創を衒ひ、一人よがりの主張や宣傳のみを事として、謙抑な着實な精緻な鑑賞的態度に出るものは至つて少いのである。偶々この態度を取るものがあるとしても、その多くは單なる解釋や説明やに悉きて、何等推重に値するやうな獨創的な改造を試みるものがない。そしてこれはいふまでもなく、一面から見れば批評家の對

象となるべきもの（たとへば創作）に優れたものがないためであるが、實は批評家其の人に優れた鑑賞力を具へた人がないためである。蓋し批評家の力量だに優れて居るならば、如何程價値の低小な對象を取扱つても相當に卓越した批評を試みることが出来るからである。

併しながら、事實上我が國に於ては、批評の對象となるべきものが低小である。少くとも、文壇に於ては創作界は評論界より一步後れて居る。但し、これは作家が批評家より本質的に價値が劣つて居るがためではなくて、實は我が國現下の文藝界の傾向即ち新理想主義の時代としては極めて當然な事象である。蓋し、單に現今ばかりでなく、廣い意味で理想主義の時代に於ては、要求よりも事實が後れ、理論よりも實際が後れ、抽象化よりも具象化が後れるのがその常態だからである。それにしても、鑑賞的態度其のものは如何なる批評家の資格としても缺くべからざるものであるから、たとひ新理想主義の時代に於ても、決して斯くの如き態度や若しくは斯くの如く態度を取る批評家を非難し排斥すべき理由はないのである。否批評家全體に互つてこの態度

やこの能力が缺けて居る所に、若しくはこの態度や能力を十分に具へた卓越した鑑賞的批評家の少いところにこそ、やがて我が現今批評界の一大缺陥が存するのである。

第三の共通缺點は、第一の缺點中に含めることも出来るものであるが、自己批評と社會批評とが乖離して居るといふことである。思ふに、本當の批評は凡て自己批評を根柢とすべきものであることは既に明らかにした所である。そしてこれを倒まにいへば、いふ所の自己が社會的のものである限り、本當の自己批評は當然社會批評であるべき筈である。然るに我が國の批評界は、不思議にもこの論理が徹底しないで、社會と沒交渉な抽象的自己批評を試みるものと、自己批評をぬきにした社會批評（國家批評文明批評）を試みるものとの間に截然たる區別があるのである。

實に敬虔な態度と深刻な反省と精緻な解剖とに依つて、自己の内生活の奥底に沈潜し、其處に自我の核心と個人生活の基調とを把握しようとする所謂「内觀的」批評家はある。氣の利いた思付と表面的な敏感とで巧に思想界の局面を展開することに依つて社會に瞬間的な刺戟と暗示とを與へて行く詩人評論家印象批評家はある。自己をぬき

にしてみだりに國家のためや社會のためや文明のためやを絶叫する志士的政治家的經世家的批評家はある。併しながら嚴肅明澄深刻悲痛な自己批評を根柢とし中心として、國家社會文明乃至人生若しくは人間性其のものの缺陷弱所を指摘非難憎惡し、且其の原因を闡明しその匡救策を考案することに依つて、その進歩發達に資益しようとする誠意と實力とを併せ兼ねた本當の批評家は現今の我が國に於ては見る事が出来ないのである。但し最近に於ては、この間の距離が次第に接近しつゝあるのは喜ばしいことであるが、而かも尙未だ意識的目的々にこの間の區別を明らかにして其の一面に偏することを得意とするやうな批評家が少くないのである。そしてこれは要するに、批評家が批評の本當の意味を理解しないことと、本當の意味の批評的精神殊に吾々の意味するヒューマニステイックスピリットを缺いて居ることから來る缺點なのである。即ち批評の中心對象は、一面的な自己や社會や歴史ではなくて、それらの根柢たり源泉たり統一點たる人性乃至人生であるといふこと、随つて眞の批評家は哲學者でなくてはならないといふことを理解することが出来ないことから來る缺點なのである。

〔九〕吾々は今や本章を終るに際し、劈頭に於て批評家の具ふべき資格として擧げた三個の條件を顧る必要を感じるものである。蓋し、上に述べた我が現今批評家の共通缺點を救ふ方途は、只彼等をしてこの三つの資格を十分に具へしめるやうにすること、を他にしては無いからである。即ち、第一に批評的精神が強烈純真であることと、第二に認識力鑑賞力が精確廣汎であることと、第三に改造力が卓越して居ることと、を他にして本當の批評家となる方途はないからである。

第三章 文藝に於ける批評と創作及び批評家と作家

文藝に於て、批評と創作とが離るべからざる關係を持つて居ることは改めていふまでもないことである。併しながら、批評と創作との間に離るべからざる關係があるといふことが明らかであることは、直ちにこの兩者の關係異同が明らかであるといふ意味ではない。否事實に於て兩者の關係については種々の異つた見解があるのである。さて、この問題を闡明するために、第一に必要なことは、問題の性質及び内容を理解することである。そして前者即ち問題の性質の方より見れば、左の三點を明らかにしなくてはならない。

- (一)二者は本來全く同一のものであるか。但しは、
 - (二)全く異つたものであるか。
 - (三)一部分同一であつて一部分異なるものであるか。
- 若し、第一の關係ならば、勿論問題は直ちに消滅するし、若し、第二の關係ならば

その差異点だけを明らかにすればよいし、若し、第三の關係ならば、問題は複雑となつて、ミルの所謂類同法と差異法とを併用して兩者の異同を明らかにすると共に、更に、その異同点の何れが根本的のものであり、何れが末梢的のものであるかを明らかにしてのみ、始めて問題はその中核根柢に觸れることが出来るのである。而して、私から見れば後に詳述するやうに、批評と創作との關係は、勿論第三の關係にあるし、そして兩者はその根本を一にするものであるが、その末梢を異にするものである。

次に後者即ち問題の内容の方より見れば、左の諸點を明かにしなくてはならない。

- (一)先後問題。即ち批評と創作とは何れが先か、何れが後か。
- (二)廣狹問題。即ち二者は何れが廣いか、何れが狭いか。
- (三)本質問題。

(イ)二者に先後關係があるとすれば、それは必然的關係(眞の因果關係)であるか、但しは偶然的關係(即ち先後關係)であるか。

(ロ)二者に廣狹關係があるとすれば、それは有機的關係(包含關係)であるか、但

しは機械的關係(共在關係)であるか。

(ハ)二者は心理的事實として如何なる關係即ち異同を有するか。

(四)價值問題。即ち二者は價值に於て何れが優り、何れが劣るか。更に前に記した

先後關係廣狹關係は直ちに優劣關係であるかどうか。

尙批評と創作との本質的關係を明らかにするためには、(一)兩者の原動力は如何なる關係を有するか、即ち批評的精神と創作的精神との關係異同を明らかにすること、(二)兩者の過程形式が如何なる關係異同を有するか、即ち批評作用と創作作用との關係異同を明らかにすること、(三)兩者の材料乃至對象が如何なる關係異同を有するかを明らかにすること、(四)兩者の目的乃至結果たる價值の本質が如何なる關係異同を有するかを明らかにすることを努めなくてはならない。

但し、これらの諸問題は、大抵混同した形で論議されて居るから、始めには先づ、其の混同した形に於てこの問題の輪廓を大觀することとしよう。即ち、今試みに其の代表的な論議見解を擧げ、且これを攷覈吟味することに依つて兩者の關係を闡明する

こととしよう。

さてこの兩者の關係を論ずる上に二つの異つた立脚地がある。即ち創作を主にするものと批評を主にするものである。而して一般には前者の見解が優勢を占めて居ることは改めていふまでもない。

(一)前者の第一は、創作は批評に先んずるものであり、批評は創作を俟つてのみ存在するものである。即ち創作あつての批評であるから、批評は創作よりも一段低級なものであるとする見解である。

(二)その第二は、古來作家と批評家とは相容れない許りでなく、其の力量に於ても後者は到底前者に及ばないものである。即ち批評家は作家乃至創作の缺點短所の指摘と非難とにその主力を傾注するけれども、事實に於て批評家乃至批評が作家乃至創作に若かないことは創作の旺盛な時代は批評の旺盛な時代ではないといふ(マコーレー)歴史的事實に徴しても明らかである。随つて批評は創作より一段低級なものであるとする見解である。

(三)その第三は、批評は創作力を破壊するものであるから、創作に比して一段低級であるとする見解である。

(四)その第四は、批評は本來理論的のものであり、創作は感情的乃至天才的のものであるから、前者は後者より一層低級なものであるとする見解である。

(五)後者の第一は、創作の價值を決定し明らかにするものは批評だから、批評はたとひ創作に後れるとも價值に於ては一段優れたものであるとする見解である。

(六)その第二は、批評には多分に創作力が含つて居て、獨創力や創作力を害するばかりでなく寧ろ批評力が創作の原動力となるものであるから、即ち創作は人生の批評を骨子とするものであるから、勿論創作に先立つ許りでなく、價值に於ても一段優れて居るものとする見解である。

(七)その第三は、批評そのものが事實の新統一を齎す新見地を發見するものであるから、やがて一種の創作である(ワード)許りでなく批評こそ創作中の最も進んだ形式即ち創作の創作(ワイルド)であるから、勿論創作よりも優れたものであるとする見解

である。(ヘンリー・ジェームズやボスウェットも其の代表者である。)

以上に挙げた創作と批評との關係に對する諸種の見解は、究極に於て優劣論であるが、その間に(一)本質的價值により優劣を定めるものと、(二)その先後により優劣を定めるものとの區別があることを見逃してはならない。随つて創作を優れりとするものも、(一)それが批評に先ずるためであるとするものと、(二)それが本質的に批評より優れた精神作用であるとするものと二つの區別があると同様に、批評を創作より優れりとする根據にも、亦二つの區別があるのである。而して私は批評は創作よりも時間的に後れるばかりでなく、價值的にも一段劣るものであるといふ一般の見解を大部分は認しながら、即ち批評は、其の本質上何等かの對象、精しくは價值的對象を豫想するものであり、そして文藝の批評の對象となるものはいふまでもなく作品(及び作品の創作者としての作家)であるから、批評は創作を全然離れて其れ自身の價值を有するものではないといふ一般の見解を認めながら、而かも既に述べたやうに批評に二つの意味、詳しくは二つの段階があるとなすものであり、即ち批評を別つて批評的精神と

批評作用となすものであり、更に前者は生命の第一義欲たる價值創造の要求の最も端的にして強烈な發動であり、後者はそれが或る價值的對象につきあつたために寧ろ價値の決定及び改造の形となつたものであるとする點から見て、後者は勿論創作より後れるものであるけれども、前者は創作家自身の創作作用の原動力となるものでありとして、批評は創作に先んずると共に本質的にも優れたものであると見るものである。以下この結論の論理的に正しいことを證明しようと思ふ。

さて吾々はこの問題を攷究するに際して劈頭考ふべきことは、漠然と、創作と批評とを比べてどちらが優れて居るかといふことを問題とすることが極めて馬鹿げたことであると同様に、創作家と批評家との價值を抽象的に論定することも亦洵に無謀なことであるといふことである。蓋し、創作と批評にしても、或は創作家と批評家にしても、具體的な個々の作品(一個の創作)と作品(一個の批評)との間或は具體的な個々の人間(一人の創作家)と人間(一人の批評家)との價值の比較によつてのみ定められるものだからである。併しながら、凡そ創作と批評との本質が何であるか、其の關係異同

がどうであるかを吟味した上で、一般的に見た二者の価値を大體定めることは必ずしも不可能なことでもなければ、また必ずしも無意義無価値なことでもない。

然らば、一般的に見て創作と批評とは果して何れが先きであらうか。若し創作を以て出来上つた作品と解し、批評を以てこの出来上つた作品に對する通例の意味での批評作用即ち對象の価値を解釋闡明する作用と解するならば、嘗に創作は批評に先だつ許りでなく本質的にも卓越するものであり、随つて又、批評家は作家よりも一段低級なものであるといはなくてはならない。これ即ち批評(乃至批評家)は只創作(乃至作家)があつてのみ即ちその存在を俟つてのみ価値あるものであつて、其れ自身価値を持たないものであるといふ見解「前記の(二)」の現はれて來る所以である。而して、大抵の場合にはこの見解が妥當である。即ち、事實に於て(經驗的にも歴史的にも)批評及び批評家は創作及び作家に追隨し依從する場合が甚だ多いのである。

併しながら、この事實と理論とを肯定しても、批評は必ず創作に追隨し依從するものであるとも見ることが出来ないし、價值的に劣るものなど、見ることは尙更出来な

いのである。蓋し、この見解と倒さに、批評は創作に先をずるものであり、創作の根本動力であるとする見ることが出来ると共に、批評は創作の価値を解釋し闡明するばかりでなくそのかくれたる価値を顯現し、缺けたる価値を補ひ明らかになつた価値を改造助長するものであると見ることが出来るからである。否、この価値の創造力と改造力即ち作品の原動力と助長力をこそ批評の精髓だからである。

詳しくいへば、第一に、創作は作家の批評即ち批評的精神を俟つことなしには出来ぬものである。蓋し文藝的乃至美的作品をして所謂實生活上の事象から區別せしめる最大屬性たる再現乃至表現といふことを可能ならしめる動力は、やがて批評的精神だからである。實に自己を題材とすると他人或は廣く社會的事象を題材とするを問はず、生な或は實的な事實を嚴密な意味で藝術化し美化するには、換言すれば描寫するには、形式上の技巧以外に優れた価値或は複雑な意味を、雜多紛々として一見取りとめもないやうな間から見出し搜出して、これを客觀的妥當性を備へた藝術品として行く價值意識乃至評價能力、即ち批評的精神の發動を俟たなくてはならないのであ

る。創作家殊に自然派の創作家によつて力説された客觀的態度、即ち題材に就かざる態度が描寫の上に必要であるといふことも、單に形式上の問題ではなくて、寧ろ偏に主觀の好惡や偏見や利害、即ち沒批判的獨斷的態度や心境によつて題材其自身の有する本質的價值を見損つたり傷つけたりしないといふことの必要、即ち自己精しくは自己の態度心境そのものすらも客觀化するやうな批評的精神の必要を力説したものとしてみ始めて意義ある要望なのである。

實に優れたる創作を得んがためには、創作家は單に題材内の價值を精確に認識するだけで満足すべきものではなくて、題材の價值を認識し批判し案配する主觀其のものゝの價值、即ち主觀の價值標準乃至題材に對する主觀の態度位置をも嚴密に反省しなくてはならない。否、後者の作用が十分に備はつてのみ、前者の作用が完全に出来るのである。そして題材に即しながら、即ち題材を主觀の價值によつて案配しながら、而かも題材そのものゝ客觀的本質的價值を損傷しないと共に、題材を主觀から離しながら、即ち題材を客觀化しながら、而かも主觀即ち創作家の人格と思想の獨特な色調を

題材の本質的價值を損傷しないかぎり十分に加味するといふやうな、所謂即かず離れざる主觀と客觀とを内在的に超越した純粹の藝術的態度は、只優れた批評的精神の微妙な發動を根源としてのみ可能である。マッシュウ・アールドが、文學上の傑作を創り出さんがためには、創作家の力と時代の力とが互ひに融和すべきものであり、そして時代の力を捕捉するのは創作力ではなくて批評力の作用である。即ち批評力は各種の觀念即ち時代精神を總合し系統化することに依つて創作力をして十分に發動せしめる源泉となり根柢となり資料となるものであるとしたのは、この點から見て極めて妥當な見解である。但し氏が斯くの如き見地に立ちながらも、批評家を以て創作家に超越するものと見たのは畢竟するに「批評」を狹義に解したために他ならない。

そして、斯の如く、批評的精神が創作の原動力であるといふことは殊に自己描寫即ち自己を題材として描寫する時に於て最も明白に立證されるものである。蓋し自己描寫の上に最も大切な條件は、其の題材となる自己が卓越した自己であるといふことは改めていふまでもないことであるが、この他特に大切な條件は、自己をどれ程精確に客

観化したか、即ちどれ程精確に批評的に取扱つたかといふことだからである。換言すれば、題材となつた自己の性格や言動やが、どれ程其れ自身のユニークな本質的價値を保存して、即ち低級な利害關係や好悪心や一時的な實感的興奮やに囚はれたり、便宜的な價値の尺度に照らして小刀細工をされたりしないか、主觀に即しながら而かも其れを超越した客觀的な美的統一性を持つたものとして、即ちふつくりとしたすがたで表現されたかどうかといふことだからである。更にこれを他面より見るに、作家が卓越した批評家の暗示と激勵と指導とによつて卓越した創作を成すことも事實に於て決して少いことではないといふ意味に於て、批評は創作に先行し、創作の原動力となるといふことも出来るのである。

斯くの如く見る時は、批評は創作に追隨し依據するものではなくて寧ろ倒しまに創作の原動力となり、時間的に先立つ許りでなく、價値的にも一層本源的なものであることが明かである。併しながら茲に一言注意すべきことは、批評が創作の原動力であるといふことは只批評も創作も等しく狭い意味で用ゐられた時にのみ正しいといふことである。

とである。換言すれば、批評的精神が創作作用の原動力であるといふ意味に於てのみ批評は時間的に創作に先んずると共に、價値的にも一層本源的であるといふことが出来るのである。

然らば、批評及び創作を一般的に解して、即ち批評作用と創作品といふ意味に解する時は、兩者の關係は果してどうなるであらうか。表面的に見れば、この意味に於ける批評はたしかに創作に後れるばかりでなく、性質的に創作より一層低級なものである。蓋し、この意味に於ける批評は、第一にその對象となるべき創作品（及び創作家）を要すると共に、第二に、其の職能も、對象の具有する價値を解釋し認識し斷定し闡明することに限られて居るからである。併しながら更に一步を進めて考へるに、いふ所の創作品の具有する價値は、批評を俟つことがなくとも其れ自身明白なものであらうか。換言すれば、批評は、單に創作品の具有する價値を等量的に暗い所から明い所に出すだけ、即ち解釋するだけであらうか。吾々は決してさうは思はない。蓋し、批評は一見單に與へられただけのものを解釋する消極作用のやうに見えるけれど

も其の精髓に於ては積極的な創造作用改造作用だからである。

詳言すれば、第一に創作の客觀的價値は其れ自身で明白になつて居るものではなくて作家以外の人々(即ち専門的批評家と一般の讀者と)の批評によつて定められるものである。殊に卓越した専門的批評家の卓越した批評によつて、作家自身すらも精確には認識し確實には信ずることの出来ない價値を發見し檢證し決定されるものであることは、歴史的事實の明かに證明することである。たとひ低級な一般讀者にしても、苟も創作に對して何等かの價値判斷を下すかぎり、それは依然として廣い意味で彼等の批評的精神の發動に俟つものなのである。更にこれを作家自身が批評家や讀者の批評を俟たずに、自身の作品を價値あるものとして肯定し自認する場合に於ても、單にこれを盲目的に肯定し認許するのではなくて、自分の素質力量や他人の作品や或は一般藝術の規範理想などを標準として客觀的の批評を加へた結果始めて肯定し認許するのである。殊に、彼等がたとひ批評家や讀者から、自己の作品若しくは作家としての自己の價値に對して惡評や非難を加へられるやうなことがあつても、容易く自己信愛

の念を疑つたり傷つけたりしないのは、負惜みや盲目的な自惚やのためではなくて、要するに彼等の信愛が嚴密な峻厲な自己批判の結果として得た根據のある合理的の信愛だからである。

併しながら、斯くの如く、創作の價値が批評の結果として客觀的に明白になるといふことを以て、直に批評が創作の價値の全部を創造することを意味すると思つてはならない。蓋し批評は創作の具有する價値の可能性乃至潜在性を客觀化し顯在的にすることが出来るけれども、價値の可能性即ち其の素材までも創造することが出来るものではないからである。而かも價値は本來客觀的顯在的のものである限り、單に暗い所にあるものを明るい所に出しただけで、其の性質には少しの影響も與へないといふのではなくて、寧ろ、可能性或は蓋然性として渾沌たる有様であるものに新らしい要素と動力とを加へて體を與へるものであり、そして其の體を與へ、客觀化するためには、批評家自身の主觀の積極的活動を要するものであり、更にいふ所の批評家の積極的活動とは批評家独自の創造力の發動だからである。これ同一の對象即ち創作品

に對しても批評家の異なるに従つて種々の異つた批評が生ずる所以であると共に、創作品の具有する價值が大きければ大きい程、新らしければ新らしい程批評の差異が甚だしい理由である。一言にすれば、創作品の具有する價值の闡明決定客觀化作用が勿論創作そのものに屬する作用であると共に、批評そのもの、独自の創造作用を一面とするものである。随つて創作の價值を客觀化し顯在化する批評が、この意味に於て一種の創造であるとするを以て必ずしも不當とすることは出来ない。少くとも、批評を以て創作の價值を客觀的ならしむる唯一最高の原動力である點に於て、兩者を補合的・相關的・同位的のものと見ることは断じて不當ではない。随つて又批評が創作に對して時間的に後れることを以て直ちに價值が劣るといふことの不當であることも明らかである。尙この兩者が補合的關係を有するといふ點に關聯して一言すべきことは創作は主として個的具象的事實を中心として一般的乃至抽象的理論を暗示するに對して、批評は、個的具象的事實の暗示する一般的乃至抽象的な意義と價值とを闡明することを主眼として、倒置に個的具象的事實を理解しようとするものであるといふことである。

以上私は批評が創作よりも時間的に後れるから一段低劣なものであるとする見解の誤謬であることを明らかにした。併しながら二者の優劣論には、時間的立脚地よりするもの以外に、尙一つ性質的立脚地よりするものがあることは、既に一言した所である。以下順次これらの見解を吟味しよう。

第一に、力量に於て批評家は創作家に及ばないから批評は創作よりも低級であるとする見解(前記の(二))を見るに、この見解には明らかに一つの根本的誤謬がある。即ち批評乃至批評家を以て單に創作品乃至創作家の缺點を指摘し非難するものとするのは批評の一面のみを見たものであつて、決して十分な見解ではない。更に批評家が作家より力量が劣るといふことも一概に云へることではない。勿論文藝史若しくは文藝批評史に現はれた批評家と創作家とを比較して見れば、後者に卓越したものが多くとはたしかに事實である。殊に批評家乃至批評といふものを直接に創作品乃至創作家に對してなすものと見る時には一層この見解は妥當である。併しながら、批評乃至批

評家といふものを廣義に解する時は、必ずしも批家評は凡て創作家に劣るといふことは出来ない。たとひ前の意味に解しても、歴史上の事實が必ずしも必然的の絶対的の眞理であるとも限らない。否事實に於て、卓越した批評家の批評によつて其の價值が明らかになつた作家は決して少いとはいへない。殊に第二流以下の作家は、大抵第一流批評家の批評によつてのみ其の價值を認められるものであることは改めていふまでもない程明らかである。只第一流の作家と批評家とを比較する時は、前者に卓越したものがこれまで多かつたといふことは正當である。

尙この點に聯關して一顧を要することは、「創作の旺盛な時代は批評の旺盛な時代ではない」といふマコーレーの見解についてである。私を以て見れば、これはたしかに一面から見れば正しいと共に他面に於て誤りである。蓋し事實上創作の旺盛な時代は批評の旺盛でないこともあると共に、倒まに創作の旺盛な時代がやがて批評の旺盛な時代であることもあるからである。否寧ろ後者の方が一層多いからである。換言すれば、批評時代を其の先にか或は後にか伴はない創作時代はないと共に大批評家の力を

藉りない大作家がなく、また大作家にして大批評家を兼ねるものもあるからである、更にたとひ、マコーレーの考へた様に前者の方が多しとしても、それを以て直ちに批評が創作に比して價值的に一段劣つて居る所以と見ることは出来ない。何となれば、創作の旺盛な時代に批評が旺盛でないといふことは、一面から見れば、批評は必ずしも全然創作に依頼するものではなくて、其れ自身の價值を有することの反證だからである。

第二に、批評は創作力を破壊するから創作よりも低級であるといふ見解（前記の(三)）を見るにこれ亦不當な見解である。蓋し批評は創作力を破壊するものではなくて寧ろ創作の一原動力となるものだからである。但しこの見解は見方によつては一理あるともいふことが出来る。即ち如何にも價值ある創作の内容となる思想は勿論其の字句や形式の一部分も批評的精神の發動の結果であるが、これだけによつて價值ある藝術品が出来上りはしない。換言すれば價值ある藝術品の全部が批評的精神の資ではない。蓋し批評的精神乃至批評作用は既に述べたやうに、勿論生の第一義欲を根源と

するから精神の全體作用根柢作用でありながら、而かも其の大部分は本來理論的のものであり、其の形式過程に於ては分析破壊を主とするものであるのに對して、藝術品の特色即ち藝術的價値は主として人間の感情情操に懇へる所に存し、且、其の形式過程に於ては總合建設を主とするものであり、隨つてこの藝術的價値は批評的精神の直接の産物ではあり得ないからである。即ち藝術品をして其他の人間の製造品と異つた獨特のふつくりした色調を持たしめるやうにするのは、一部は其の實質内容を形成する作家の思想の力でもあるが、寧ろ主として其の思想を中心として圓量若しくは雰圍氣を形造るもの、たとへば作家の個性や手法や文字や文章等の力であるといはなくてはならないからである。そして批評的精神乃至批評作用は創作の骨子となる思想の洗練の上に直接の影響を及ぼすけれども其の藝術の色調を形造る方面に對しては間接のそして極めて僅少の影響しか及ぼさないのである。否啻にそれ許りでなく、前者に對する批評的精神の影響は徹頭徹尾良好であるけれども、後者に對する影響は必ずしもさう許りでなく、寧ろ卓越した藝術の創作は批評的精神を超越した天真流

露の作用乃至は直覺直觀天來の感興に依ることが多いのである。そしてこの點こそ、やがて藝術的創作ばかりでなく、あらゆる創作に共通する根本的特質であり、嚴密な意味に於ける創造作用の特質であり、更に「偉大なる藝術家は彼等の自覺するよりも一層賢明である」といふエマソンの言葉を俟つまでもなく偉大なる作家の特質なのである。斯くして大まかな意味では批評は創作の原動力であることはいふまでもなく更に批評はやがて創作であるといふことさへ出来るけれども、嚴密な意味では創作は直に批評であるとも批評は即ち創作であるともいふことが出来ないこととなる。

併しながら、それだからといつて、これを以て倒主に批評は創作力を破壊するものであるとか或は批評は創作よりも價値が一段低級であるとかする理由とはならない。蓋し、創作作用内の意識的方面と無意識方面、乃至は理智的方面と感情的方面とは本質に於て相殺的のものではなくて、寧ろ補合的なものだからである。換言すれば凡ての批評的精神そのものが所謂創作力を損傷するのではなくて、その偏重が創作力を損傷するやうになるものだからである。即ち、生命の中心要素の必然的な發動としての

批評的精神ではなくて、人爲的な随つて外的な皮相的な作用だからである。随つて創作力を損傷せしむることなしに、批評的精神を作用せしめることがいくらか出来るものである。否真に天才的な作家は、深刻精到な批評的精神をたくみに藝術的雰圍氣の中に融かし込んで行くのである。思想が生な思想のまゝでござろくしてゐるのは、思想や批評的精神が藝術的天分を損傷するがためではなくて、實は藝術的天分が思想や批評を藝術化し統一する力を缺くがためである。斯くして、批評が其のまゝに創作でもないと共に、批評が創作力を損傷するものでもなく、随つて批評が創作に比して一段低級なものでもないことが明らかになつたのである。

第三に、この非難に聯關して考ふべきものは、批評は理知的のものであり、創作は感情的のものであるから前者は後者より一段低級であるとする見解（前記の四）である。思ふに、批評は理知的のものであり、随つて修養的のものであるのに對して、創作は感情的のものであり随つて天才的のものであるといふ見解は極めて皮相的な意味では妥當であるけれども、嚴密には決して其のまゝに是認し得べき見解ではない。蓋

し、既にいつたやうに批評は全然理知的のものでないと共に創作は聊かも理知的要素を入れないものでもないからである。否理知と感情とは創作には缺くべからざる二大要件であり、随つて補合的のものであると共に、たとひ批評を理知作用とし、創作を感情作用とする見解を正當なりとしても、感情作用が理知作用より一層價值が高いといふことが出来ないからである。即ち要は感情と理知との相違ではなくて、創作の内容と批評の内容との相違であり作家と批評家との人間の相違だからである。

以上要するに、創作を以て批評に優るとする見解は、これを時間的の立場よりするも或は本質的の立場よりするも到底不合理であることは明らかである。然らば倒まに前に列擧したやうに批評を以て創作より先であるとか、價值的に優れて居るとか、或は、批評そのものが創作（若しくは創作中の創作）であるとかする見解は果して妥當であらうか。概言すれば、批評は或る意味に於て創作に先立つものでもあり、本質的に優れて居るものでもあり、随つて批評を以て「創作の創作」でありとも「批評が即ち創作」であるとも見ることが出来るのである。

詳言すれば、既に述べたやうに、批評を以て批評的精神と解する時は、明らかに創作の一大原動力であり、随つて創作に先立つものであり、これを創作に對する批評作用と解する時には批評は創作よりも後れながら而かも創作の價值を決定し客觀化するものであり、更に批評を以て對象即ち創作の具有する價值を顯現し且改造すること若しくは對象の具有する價值に即して新價值を創造することであると解する時には、批評は創作に後れながら而かも創作を價值的に超越するものである。更に別言すれば、第一の意味に解する時は、批評は創作に先んずるがそれよりも範圍が狭少な屬性であり、第二の意味に解する時は、批評は創作に後れるが而かも創作の全體を對象とするものであるからその範圍は創作と同一であるし、第三の意味に解する時は、批評は創作に後れ且範圍が狭少であるけれども、而かも價值に於てそれを内在的に超越するものである。随つて批評と創作とは、廣い意味で用ゐる時には時間的に先後の別を一定することも出來なければ、範圍の廣狹を定めることも出來なければ、或は價值の高下を定めることも出來ない。併しながら批評の本質を以て價值の創造乃至改造と見る時

は、價值あるものを創造しようといふ要求とそれの實現のための努力とを主眼とする點に於て創作も批評も同一であり、随つて批評家も創作家も同様に結局は新價值の創造者であるから抽象的には價值の高下を定めることは出來ない。只創作は直接に人生乃至自然の生な素材から價值を創造しようとするのであり、随つて創作家は直接に人生や自然について自己を表現すればよいのに對して、批評は一旦形を成した價值體から價值を創造しようとするのであり、随つて批評家は創作家の自己表現である創作について、若しくはそれを通して間接に自己を表現すべきものであるがために、多くは前者に比して狭い範圍から僅少な價值しか見出すことが出來ないやうな具合になるのである。即ち創作家は勿論新價值の創造を主眼とするものであるから價值批評といふことに關しては何等の支障もないが、批評家は非常に卓越した人でないかぎり單に創作家から見ても價值の改造者或は單なる解釋者に過ぎない許りでなく、批評家自身にとつてすら依然よい分で創作の具有する價值の僅かな改造をするに過ぎないやうになるのである。否大抵兩者の關係は發明と改善、革新と改新、創造と改造といふやうな有

様になるのである。併しながら結局は人の問題である。即ち偉大な人は凡て卓越した
価値の創造者である限り、偉大な批評家は依然として偉大な作家であり、随つて卓越
した批評は卓越した創作と同様偉大な価値の創造力である。そしてこの點から見ると
は創作界が萎靡沈滞する時に於て即ち偉大な作家がない時に於て批評が創作乃至批
評家が作家の職能を代辨して大方遺憾がないのも決して不思議なことではない。随
つて又この意味に於てオスカー・ワイルドの「ザ・リライツク、アズ、アーティスト藝術家としての批評家」乃至「創作と
しての批評」といふことも是認されるし、又彼の所謂「創造的でない批評時代はあつ
たけれども批評的でない創造時代はなかつた」といふ言葉と、「批評は最高の意味に於
て創造的であり……創造中の創造である」といふ言葉との間の矛盾も、實は聊かも矛
盾とはならないことを理解することが出来るのである。

以上、私は極めて簡單ながら、本章の劈頭に掲げた數個の問題の全部に對して一わ
たり解答を試みた。而して私はこれによつてこの問題即ち以上に述べた批評と創作と
の關係論乃至價值論は結局する所、高い意味での理性（睿智）と感性（直觀）との關係論

であり、随つて哲學と藝術との關係論であることを理解するに至つた。

附 録

一 批評家としての哲學者

哲學の意義本質に關する見解には種々の相違があり、随つてこれに精確な學術的定義を與へることは、かなり困難なことであるが、大まかにその特質を攷へる時は、カントの三大批判を俟つまでもなく「哲學は批評である」といふことが出来る。即ち凡ての意味に於て、「獨斷」と「曖昧」とを排して、一切の對象をその最も眞實な最も明瞭な最も徹底したがたに於て見る許りでなく、何よりも先に主觀そのもの、認識主⁷そのもの、理知そのもの、本質と眞價とを十分に明白ならしめようとする點に於て哲學はたしかに「批評」である。

換言すれば、哲學は常に（通例いはれて居るやうに）認識能力そのもの、根本的批

評である許りでなく、更に人生乃至生活全體の根本的批評である。獨斷的な信仰はいふまでもなく、假定の上に立つ科學的眞理にも安んずることが出来なくて、件の假定そのものゝ由つて來る根據をも徹底的に闡明することに依つて、人間生活の眞髓に觸れようとするのが哲學でなくて何であらうか。この意味に於て、哲學的精神はやがて批評的精神である。随つて、本當に哲學を理解し研究しようとするものは、何よりも先に、最も十分な意味に於て批評的精神を具へなくてはならない。

そして、いふ所の最も十分な意味に於ける批評的精神とは、何事に對しても改造の意志が旺盛であることと、改造の能力が豊富であることとを意味する。換言すれば、何事に對しても(自己に對してはいふ迄もなく)只與へられた儘で受容することがなくその意味と價值とを徹底的に攷覈し、その長短を十分に明かならしめ、且それに對して出来るだけの改造作用を施す意志と能力とを具へることを意味する。畢竟するに、自己が本當に目覺め、生活意志が本當に生動して居ることが、十分な意味で批評的精神が具はつて居ることである。蓋し批評は凡て自己批評だからである。

然るに、哲學を以つて批評であると解すものゝ中にも、いふ所の批評とは單に認識批評に限ると思つて居るものが少くない。單なる讀書究理が哲學者の天職であるとするが如きは蓋し、この徒である。併しながら、「知らんとする意志」が「生きんとする意志」の一發動である限り、十分な意味に於ける認識批評は、只徹底した生活批評、即ち自己改造の要求と動力とを根柢としてのみ出来ることなのである。

これを、哲學思想史の教ふる所に徴するに、ソクラテスはいふ迄もなくプラトーンにしてもアリストテレスにしても、カントにしてもフイヒテにしてもヘーゲルにしてもショーペンハウエルにしてもニイチェにしても、近くはジエームスにしてもオイケンにしてもベルグソンにしても、凡て皆究理のための究理、認識批評のための認識批評に止つては居ないで、廣い意味で生活の改造を目的として居たのである。即ち表面的に見れば、論理いぢりに墮し瞑想に耽つて居るかのやうであるが、實は自己の生活を改造し自己の時代の社會と文明とを改造することを目的とし主眼として居たことは彼等の生活の眞相と彼等の努力の結果とを審かに檢覈する時には、何人にも容易に理解

し得られる所である。これを畢竟するに、推稱するに足る古來の哲學者達は、結局皆卓越した「批評家」であつたといふことが出来るのである。

二

然るに、この見地から我が國現時の哲學界の状況を見るに、私は其處に甚だしい不満を見出すものである。蓋し我が國現時の哲學者の中には、私の意味する、乃至私の期待するやうな「批評家」としての哲學者」が餘りに少いからである。勿論我が國には本當に「哲學者」と稱するに足るものが皆無に近いといへば、問題はそれまでであるが、苟も哲學を研究するもの、若しくは哲學者と稱するものがかなりに饒多である限り、私は一概に上のやうな斷言をすることが出来ない。

由來東洋(我が國も勿論)に於ては學問が生活に即し、思想が實行に裏付けられて居たのである。然るに、歐米の主知主義を根柢とする學問思想が何等の準備も改造もなしに急遽として輸入された結果、學問のための學問、思想のための思想が、學者思想家の間に尊重せられて、恰かも守錢奴が其れの意味と價值と目的とを理解することな

しに、單に多くの財寶を獲得し所藏することを以て誇りとし楽しみとするやうに、我が國の學者思想家達も、亦徒に學問思想を多量に獲得し所藏することを以て誇りとし楽しみとするやうな厭ふべき風習傾向を形造るに至つたのである。

そしてこの風習傾向は、個人的にも社會的にも一つの過渡期の特色としては決して一概に排斥し非難すべきものではない。併しながら、凡そ一切の人間の營爲は、悉く生活の改造を目的とするものである限り、嚴密にいへば、學問のための學問とか思想のための思想とかいふことはあり得ない、否あつてはならない筈のものである。即ち一切の「知識」は力であるべき筈である。殊に哲學といふやうな根柢的といふことを徹底的といふこと、全體的といふこと、統一的といふこと、乃至進歩的といふことを缺くべからざる特質とするものに於ては、これを學ぶもの、自我に對しては最も強い「力」を與へなくてはならない。換言すれば、哲學を學ぶことに依つて生活に對する確信と、その改造に對する原動力とを、即ち自己を信愛し自己を統率し自己を成長せしめる「力」を獲ない限り、未だ本當に哲學を研究したといふとは出来ないのである。そ